

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成11年度

2001

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成11年度

2001

奈良市教育委員会



井戸SE12 井戸枠及び石敷全景（東から）

平城京左京一条三坊十三坪（第440次）



井戸SE12 井戸枠全景（東から）

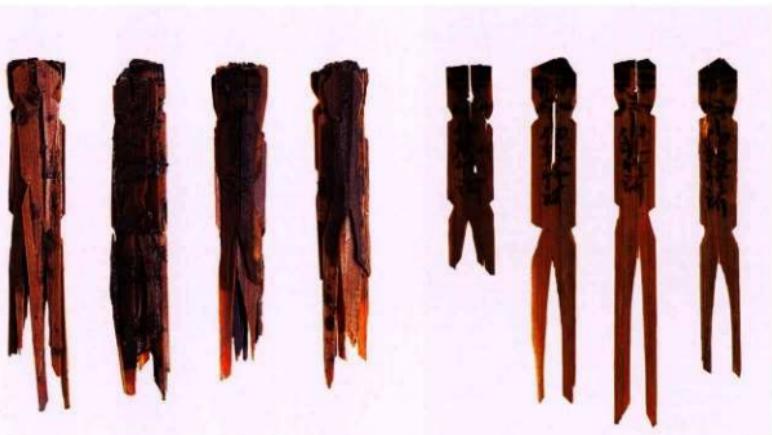
平城京左京一条三坊十三坪（第440次）



人形木製品
(平城京右京二条三坊二坪出土・第431-1次)



蛭藻金（奈良町遺跡出土・元興寺第48次）
上-表、下-裏



木製人形（平城京左京一条三坊十三坪出土・第440次）

はじめに

藤原京から平城京へ遷都してから1290年、新しく21世紀を迎えることとなりました。振り返ってみると、これほどの年月を隔てて遺構・遺物が地下に眠っていることに感慨をおぼえます。

奈良市教育委員会は、市民の皆様の文化財保護に対する御理解と御協力によって、毎年、平城京跡を中心に発掘調査を実施しています。また、昨年の4月には、文化財保護法が改正され、埋蔵文化財の取り扱いについても認識を新たにしているところです。

本書は、平成11年度に行った埋蔵文化財の発掘調査の成果の概要をまとめたものです。多くの皆様に御活用いただき、奈良市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の作成にあたって御指導、御協力くださった関係機関の皆様に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成13年 3月

奈良市教育委員会
教育長 冷水 究

例　　言

1 本書は、平成11年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告をまとめたものである。

2 調査体制については下記の通りである。なお、各調査の現地担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部 文化財課 課長 西村廣彦

主幹 森川倫秀（～平成11年9月30日）

前原武副（平成11年10月1日～）

埋蔵文化財調査センター 所長 高谷明男

庶務係 係長 杉村武史 事務員 山形和広

調査第一係 係長 西崎卓哉

技術吏員 立石堅志 鎌方正樹 松浦五輪美 安井宣也 久保邦江

宮崎正裕 久保清子 原田香織 細川富貴子 大庭淳司

調査第二係 係長 篠原豊一

技術吏員 三好美穂 森下浩行 秋山成人 武田和哉 中島和彦

原田憲二郎 池田裕英 山前智敬

3 発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会等関係諸機関から御指導と御教示を賜わった。記して感謝いたします。

4 発掘調査と出土遺物の整理には、作業員、補助員の方々が参加した。

5 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。

遺跡の略号は次の通りである。なお、平城京については遺跡の略号を省略した場合がある。

平城京-HJ 東市-TI 大安寺-DA 元興寺-GG 西人寺-SD 菩原寺-KK 春日大社-QG
コナベ古墳-KN

6 本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員が分担して行ない、文末に文責を示した。

7 本書で使用した遺構等の番号は、一部を除いて、調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、SA（築地・聯）、SB（建物）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SX（その他）などの記号を付した。

8 本書で使用した遺物の名称・形式等は、以下の刊行物等に準拠した。

「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」奈良市教育委員会、1996。

「平城宮発掘調査報告書Ⅲ」奈良国立文化財研究所、1982。

9 引用文献のうち、奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、奈良国立文化財研究所発行の概報・年報については、調査機関名（それぞれ市、県、国と表示）、調査記号と報告年度のみを本文中に記した。なお、市の調査については、機関名を省略したものがある。

10 発掘区位置図については大和都市計画図を、調査地位置図については1/25,000地形図を使用した。

11 本書の本文中、および図中に示した位置の表示は、平面直角座標系VIによっている。

12 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものもある。

13 本書の編集は、森下浩行が担当した。

本文目次

I 平城京の調査

1	近鉄西大寺駅南上地区画整理事業に係る発掘調査	1
(1)	平城京右京二条三坊一坪の調査 第426次・第431-1・-2次	
(2)	平城京右京二条三坊三坪の調査 第431-3・-4次	
2	JR奈良駅周辺地区画整理事業に係る発掘調査	25
(1)	三条遺跡・平城京左京四条五坊五坪の調査 第429-2次	
(2)	平城京左京四条四坊十六坪の調査 第429-1次	
(3)	平城京左京四条五坊七坪の調査 第429-3次	
(4)	平城京左京三条五坊五坪の調査 第429-4次	
3	平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡の調査 第424次	33
4	平城京左京一条三坊十三坪の調査 第440次	53
5	平城京右京七条一坊十五坪の調査 第427次	61
6	杉ヶ町遺跡・平城京左京四条五坊十四坪の調査 第423次	69
7	ヤイ古墳・平城京左京一条五坊北郊の調査 第437次	74
8	平城京右京一条北大路・西三坊大路の調査 第430次	78
9	平城京左京三条三坊五坪の調査 第433次	80
10	平城京左京二条五坊五坪・十二坪の調査 第434次・第439次	82
11	平城京左京四条四坊七坪の調査 第435次	84
12	平城京左京五条一坊十三坪の調査 第438次	86
13	平城京左京四条三坊十四坪の調査 第428次	88
14	平城京右京四条二坊十六坪の調査 第425次	89
15	平城京左京五条二坊十三坪の調査 第436次	90
16	平城京左京一条三坊七坪の調査 第432次	91
17	平城京左京九条一坊七坪の調査 第441次	92
18	平城京東市跡推定地の調査 第21次・第25次	93

II 寺院・神社の調査

1	元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査 第48次～第51次	103
2	史跡大安寺旧境内の調査 第84次～第87次	133
3	西大寺旧境内の調査 第13次	143
4	普原寺旧境内の調査 第4次	144
5	史跡春日大社境内の調査 第1次・第2次	146

III その他の調査

1	コナベ古墳の調査 第3次	147
2	試掘調査及び確認調査	148
3	工事立会	149

番号	次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者名/事業内容	担当者	届出番号
1	423	杉ヶ原跡	杉ヶ町51-6、7、-9 平城京左京四条五坊一四坪	H11. 4. 9~ 5. 7	140nf	松川公明／共同住宅建設	大森	H10 : 3264
2	424	平城京左京四条八坊一四坪 奈良町遺跡	字方字町1-1、ほか	H11. 5. 6~ 6. 23	238nf	奈良市長／(仮称)ならまち 工芸工房建設事業	松浦・相川	H10 : 3312
3	425	平城京左京四条二坊十六坪 か	尼辻西町221-4、ほか	H11. 6. 8~ 6. 16	68nf	近畿日本製鉄㈱／近鉄尼ヶ丘 駅地下化工事	大森	H10 : 3293
4	426	平城京右京二条三坊二坪	内野町12~14、17、 210	H11. 6. 9~ 8. 11	600nf	奈良市長／石鏡西大寺駅南北 地区画整理事業	施方・ 山根	S63 : 3056
5	427	平城京右京七条一坊十五坪	六条町102-1、ほか	H11. 6. 10~ 6. 23	394nf	医療法人蔵慶会／病院増築	二野	H10 : 3249
6	428	平城京左京四条三坊十四坪 384-2	三条松町380-4、 384-2	H11. 5. 19~ 6. 2	112nf	飯田善之／共同住宅建設	武田	H10 : 3295
7	429-1	平城京左京四条四坊一六坪	二条富吉町1	H11. 6. 28~ 7. 14	100nf	奈良市長／JR奈良駅西辺地 区土地整理事業	久保邦 裕	S63 : 3055
8	429-2	三条跡	二条本町376-6、 377	H11. 8. 17~ 9. 30	255nf	奈良市長／JR奈良駅西辺地 区土地整理事業	久保邦 裕	S63 : 3055
9	429-3	平城京左京四条五坊七坪 か	二条本町4~10、ほか	H11. 8. 12~ 27	485nf	奈良市長／JR奈良駅西辺地 区土地整理事業	久保邦 裕	S63 : 3055
10	429-4	平城京左京一条五坊五坪 一帯	大和町1丁目26-3の 一帯	H11. 11. 22~ 12. 28	260nf	奈良市長／JR奈良駅西辺地 区土地整理事業	安井	S63 : 3055
11	430	半城京右京一条北大路・西 三坊大路	西大寺新田町475-1	H11. 8. 19~ 9. 8	98nf	米田義久／共同住宅建設	大森	H10 : 3327
12	431-1	平城京右京二条三坊一坪	南野町12~14、211 9-1、210	H11. 8. 17~ 12. 24	1,250nf	奈良市長／近鉄西大寺駅南北 地区画整理事業	吉川・ 施方・ 松浦	S63 : 3056
13	431-2	平城京右京二条三坊一坪	南野町12~14、211 9-1、210	H11. 8. 17~ 12. 24	1,000nf	奈良市長／近鉄西大寺駅南北 地区画整理事業	吉川・ 施方・ 松浦	S63 : 3056
14	431-3	平城京右京二条二坊一坪	南野町196-1、2、 199-5、6	H11. 8. 17~ 11. 30	1,060nf	奈良市長／近鉄西大寺駅南北 地区画整理事業	立石・ 久保清	S63 : 3056
15	431-4	平城京右京二条一坊一坪	宮脇町187-1、-2、 -3	H11. 11. 10~ 12. 28	600nf	奈良市長／近鉄西大寺駅南北 地区画整理事業	立石・ 久保清	S63 : 3056
16	432	平城京右京二条三坊七坪	法華寺町320、321、 321-4	H11. 9. 3~ 9. 17	75nf	柳あわね住宅／宅地造成	武田	H11 : 3042
17	433	平城京左京三条三坊五坪	大和町4丁目313-3	H11. 9. 10~ 10. 6	87nf	奈良市長／二帝公民館建設事業	鶴川	H11 : 3015
18	434	平城京左京一条五坊五坪 一坪	仙台町5-3、6、7-1、 ほか	H11. 9. 27~ 10. 22	206nf	奈良市長／烟中小規模住宅地 区改良事業	安井	H10 : 3176
19	435	平城京左京四条四坊七坪	三条舟町236-3	H11. 10. 14~ 11. 15	280nf	祐吉工務店／共同住宅建設	大森	H11 : 3085
20	436	平城京左京五条二坊十二坪	大安寺西1丁目334、 ほか	H11. 10. 28~ 11. 15	94nf	水俣保雄／石碑造成・共同住 宅新築	武田	H11 : 3044
21	437	ヤナ内堀・平城京左京二条 九坊北郭	法華町746	H12. 2. 7~ 3. 13	275nf	(社)カトリック萬葉カミマリ アーチ道金／宗教施設建設	原田憲	H11 : 3079
22	438	平城京左京五条一坊十三坪 ほか	松原町305-1、-3、 305-2	H12. 1. 20~ 2. 25	420nf	小島敏嗣／宅地造成・片舗借 貸	武田	H11 : 3232
23	439	平城京左京二条五坊五坪 十二坪	畠山町4-1、ほか	H12. 2. 1~ 3. 10	385nf	奈良市長／烟中小規模住宅地 区改良事業	安井	H10 : 3176
24	440	平城京左京一条一坊十二坪	法華寺町1351	H12. 2. 1~ 3. 31	531nf	奈良市長／一条高校多目的複 合施設建設	松浦	H11 : 3199
25	441	平城京左京九条一坊七坪 西九条町5丁目2-5	H12. 3. 6~ 3. 10	80nf	北农社油断化学株式会社／下 塙塗装	中島	H11 : 3261	
26	T124	平城京東山小路推定地	古市町561、592	H11. 11. 16~ H12. 1. 13	400nf	範囲確認調査	秋山	
27	T125	平城京東山跡推定地	東九条町435-2	H12. 1. 17~ 3. 30	600nf	奈良市長／西九条佐保線街路 整備事業	宮崎・ 相川	H11 : 3102
28	DAB41	史跡人安寺跡境内	大安寺町1044-4、 1046-1	H11. 4. 14~ 4. 26	42nf	水保司／個人住宅改築	秋山	H11 : 1090
29	DAB45	史跡人安寺跡境内	大安寺町5丁目994-1、 995-967-12	H11. 5. 26~ 6. 11	33nf	楠木博一／個人住宅新築	秋山	H11 : 1099
30	DAB46	史跡大安寺跡境内	大安寺町5丁目998、 999-967-17	H11. 8. 17~ 8. 25	15nf	酒井政子／自家用車庫の改築	秋山	H11 : 1001
31	DAB47	史跡大安寺跡境内	大安寺2丁目1299-1	H11. 1. 12~ 1. 20	20nf	史跡大安寺跡境内保存整備事業	原田憲	H11 : 1057
32	GG46	元興寺跡境内・奈良町通跡	比叡町18-1	H11. 5. 11~ 6. 22	212nf	杉山鳳一／共同住宅建設	中島	H10 : 3282
33	GG49	元興寺跡境内	鬼園山城・高麗塚1116-3、-4、 -5	H11. 5. 26~ 7. 27	520nf	藤シエルホーム／共同住宅建 設	安井・ 原田香	H10 : 3283
34	GG50	元興寺跡境内・奈良町通跡	高麗門町17	H11. 9. 17~ 9. 29	10nf	村上良雄／個人住宅建設	秋山	H11 : 3106
35	GG51	園戸古墳・元興寺跡境内・ 奈良町通跡	協和町3	H11. 11. 29~ H12. 1. 8	150nf	奈良市長／文化施設整備事業 (奈良市立草薙古道歴史館)	中島	H11 : 3018
36	KK4	青柳寺跡境内	宝来町1丁目854-1	H11. 7. 15~ 8. 4	272nf	中城直一／共同住宅建設	武田	H11 : 3090
37	SD13	西大寺旧境内	西大寺町2丁目 2532-1、-2	H11. 8. 2~ 8. 12	75nf	山田米作／共同住宅建設	中島	H11 : 3164
38	QG1	史跡春日大社境内	春日町	H11. 10. 25~ 10. 28	20nf	奈良市長／春日大社バース兼备 施設建設	中島	H11 : 1013
39	QG2	史跡春日大社境内	春日町160-1	H11. 10. 28	57nf	奈良市長／市道中第184号 線道路新設改良工事	中島	H11 : 1029
40	KN3	コナベ古墳	法華寺町1805-1、 2	H11. 11. 10~ 11. 19	77nf	奈良市長／西大寺一条駅街路 整備事業	原田憲	H11 : 3179
41		西隆寺跡境内	西大寺町2丁目52 56-6、ほか	H11. 7. 1~ 9. 29 10. 20~ 12. 28	1,130nf	宮崎	H11 : 3036	



調査地位置図 1/50,000

I. 平城京の調査

1. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査

この調査は、奈良市が進める西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約30万m²）に係って実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続して実施している。平成11年度は表に示した通り、通常事業で1箇所、促進事業で4箇所の発掘調査を実施した。調査面積は、4,510m²であり、初年度からの調査面積は合計93,080m²になる。

平成11年度に実施した調査地は、平城京の条坊復原では右京二条三坊二坪・三坪の2坪に及んでおり、ここでは、それらの調査を各坪ごとにまとめ報告する。2坪では、坪の西半中央部を調査し、これまでの調査成果と合わせ坪内の様相のおおかたが判明した。これによると坪内の南北を4等分する宅地割がみられ、また、東西にも大きく2等分した上で、さらにそれを2ないし4等分する宅地利用が想定できた。三坪では坪の南東および北西部を調査し、坪内の東西を4等分する宅地割の存在が確認できるなど、同じく宅地計画についての成果を得ることができた。

なお、各報告で用いる遺構番号については、坪ごとに、奈良時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代及び以降のものに3桁の番号を付けている。これらの番号はいずれも、これまでの各坪の調査からの通し番号である。

平成11年度 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査一覧

調査次数	事業名	道路名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
426	通常事業（継続）	平城京右京二条三坊二坪	青野町12~14、17、2120	H11. 6. 9~8. 11	600m ²	能方・山前
431-1	促進事業	平城京右京二条三坊二坪	青野町12~14、2119-1、2120	H11. 8. 17~12. 24	1,250m ²	能方・松浦・第正香
431-2	促進事業	平城京右京二条三坊二坪	青野町12~14、2119-1、2120	H11. 8. 17~12. 24	1,000m ²	能方・松浦
431-3	促進事業	平城京右京二条三坊三坪	青原町196-1、-2、199-5、-6	H11. 8. 17~11. 30	1,060m ²	立石・久保清
431-4	促進事業	平城京右京二条三坊三坪	青原町187-1、-2、-3	H11. 11. 10~12. 28	600m ²	立石・久保清



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の発掘調査位置図 1/5,000

(1) 平城京右京二条三坊二坪の調査 第426次・431-1・-2次

I はじめに

調査地は、右京二条三坊二坪の北半部にある。北側の第398次調査発掘区、南側の第351-2次調査発掘区の成果との整合性を考慮し、一部を重複して発掘区を設定した。調査地中央の区画道路建設地部分を第426次調査とし、その東西を第431-1、-2次調査として実施した。

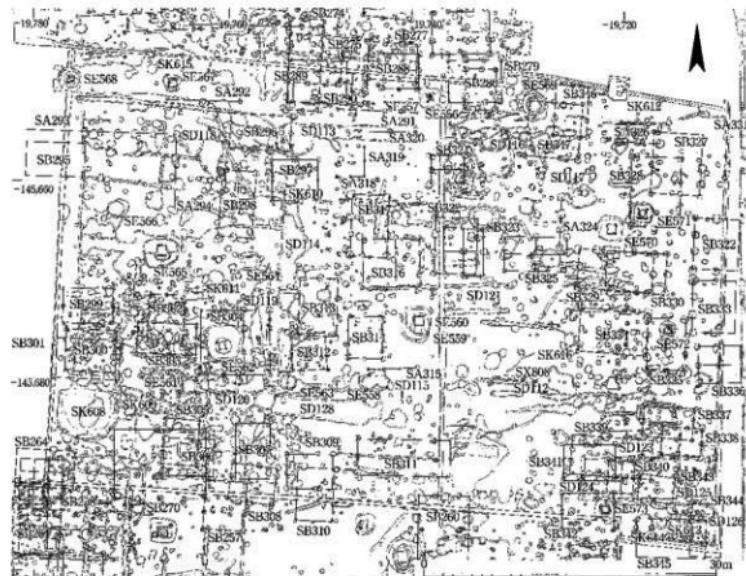
基本層序は、耕上の下に黄灰色土、黄灰褐色土が堆積する。その下の遺構面である地山は、南から北へ向かって緩やかに下がっており、深さは北で0.35m（標高約70.3m）、南で1.10m（標高約69.7m）である。したがって、南北での遺構面の高低差は約0.6mとなる。

主な検出遺構には、奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物55棟、掘立柱塀11条、溝16条、井戸17基、土坑6、中世の掘立柱建物5棟、溝1条、土坑3などがある。このうち、SB257、SB258、SB260、SB261、SB264、SB270、SB308、SB310、SB342は、第351-2次発掘区に、SB274、SB275、SB277、SB279、SB280、SB288、SB289は、第398次発掘区にまたがって検出した。また、SR332、SB333、SB336は、第283次発掘区との位置関係から、それぞれの規模を確定しないし推定することができた。掘立柱建物・塀、井戸、土坑については、その概要を以下の表にまとめた。遺構の数が多いため、主要なものに限ってその概要を報告する。

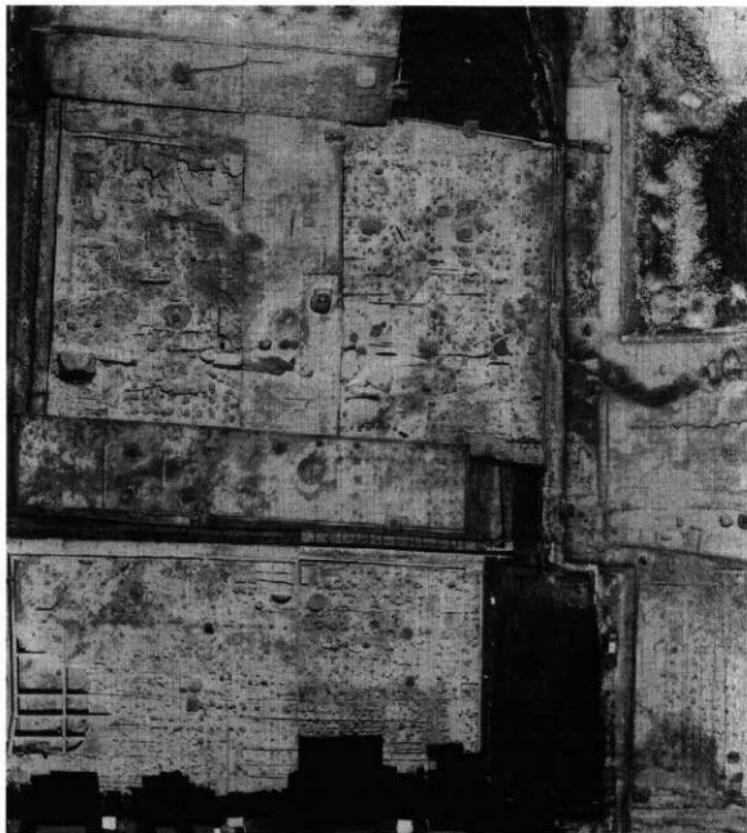
II 奈良～平安時代前半の遺構

奈良時代前半から平安時代前半にかけての遺構を一括して概述する。

SD113・116 SD113は長さ11.3m以上、幅1.5m前後、深さ0.3mの、SD116は長さ12.2m以



遺構平面図 1/500



発掘区全景（上が北、周辺の発掘区も含む）



第431-1次発掘区全景（南西から）



第431-2次発掘区全景（北から）

上、幅1.0~1.8m、深さ0.2mの東西溝である。SD113は東へ向かって浅くなり途切れるため、本来はさらに東へと延びてSD116に続いていたものと推測できる。両溝を合わせた全長は23.7mである。SD113の南側に0.3mほど枝分かれする箇所が1つあり、この東、南側を取り囲むようにSA318、SA319が位置する。溝の底が西に向かってドがっていくので、何らかの排水施設であった可能性が高い。また、SD116の南側に接続する方形の座みがSB321を避けるように配されているので、これらは同時期に並存していたらしい。両溝は、坪内の南北1/4ラインにはほぼ合致する。埋土には奈良時代中頃の土器を含み、SD113の西端付近からほぼ完形を保った須恵器壺K1点が出土した。

SD114 長さ27.8m、幅1.5m前後、深さ0.3~0.4mの南北溝で、所々で浅くなり途切れながらも南北両端でSD113、SD115と接続する。下層に奈良時代前半、上層に奈良時代後半~平安時代前半の遺物を含む。南側の下層からほぼ完形を保った須恵器壺K1点と土馬が出土した。

SD115 長さ11.8m、幅1.5m前後、深さ0.2m前後の東西溝である。井戸SE563（奈良時代後半）は、SD115の埋土を掘り込んでいる。

SD117 長さ5.6m、幅1.0m前後、深さ0.2mの南北溝で、北端がSD116と接続する。

SD118 長さ8.5m、幅0.7~2.2m、深さ0.2mの東西溝で、SD113の西側に0.8mの間隔で東西に並んでいる。奈良時代末~平安時代初めの上器が出土した。

SD119・SD120 SD119は、長さ8.8m、幅1.2m前後、深さ0.1mの南北溝で、SD114と1.5m前後隔てて西側に平行する。SD120は、長さ7.1m、幅0.9~1.9m、深さ0.2mの東西溝で、SD119と東端で直交し、SD115と東西に並ぶ位置にある。奈良時代後半の上器が出土した。

SD121 長さ15.9m、幅0.3~0.6m、深さ0.1mの東西溝で、SB316よりも古い。

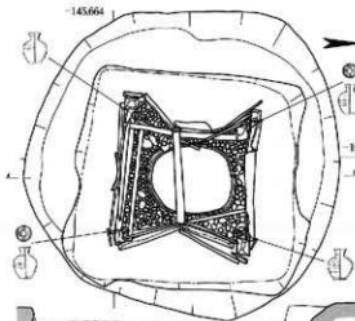
SD122 長さ13.9m、幅0.3~0.7m、深さ0.2mの東西溝で、途切れながらもさらに西へ続いている、SD115と同一の溝である可能性がある。

SD123・SD124・SD125 SD124の北端にSD123、南端にSD125が直交してコ字形の溝を形成する。長さはそれぞれで異なり、SD123が9.8m、SD124が4.7m、SD125が12.3mである。幅は0.4m前後、深さは0.1m。SB339~SB343よりも古い。

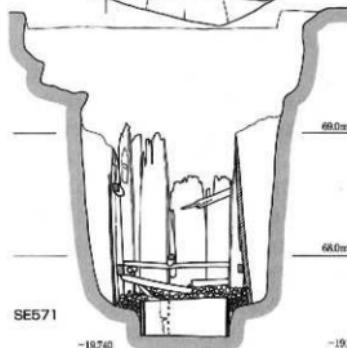
SD126 長さ10.3m、幅1.2m、深さ0.3mの東西溝である。重複関係からSB343よりも古い。

SE556・557 2基の井戸が同じ位置で重複している。SE557はSE556の埋土を掘り込んで構築されている。SE556の井戸枠は抜き取られていたが、底近くで掘形が一辺約0.7mの方形となるので、おそらくこれに近似した大きさの井戸枠であったと思われる。底から須恵器壺Qが1点、土師器壺Bが1点出土した。奈良時代後半に廃棄されたとみられる。一方、SE557では方形縦板組隅柱横桟留構造の井戸枠が十圧で潰れながらも遺存していた。枠の大きさは、内法で南北0.84m、東西0.76mである。横桟は遺存せず、隅柱は下端を尖らせて打ち込まれていた。縦板には厚さ1~2cmの薄いへぎ板を主に使用するが、端部に釘穴が残るものが多いので屋根材を転用したものと思われる。他に曲物側板を転用したものが2枚あった。底に方形曲物を据えた施設を備える。曲物は、短辺（南北）0.48m、長辺（東西）0.66mの長方形で、深さ0.30mである。底から須恵器壺Aが1点、壺Qが1点、墨書き土器などが出土した。奈良時代後半~末に廃棄されたとみられる。

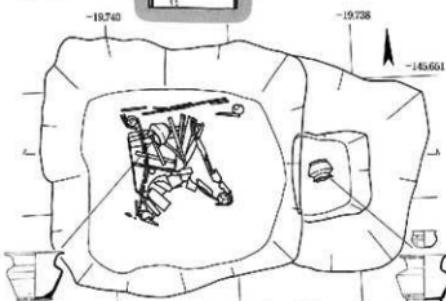
SE558 掘形は、深さ0.8m付近で段をつけて2段に掘り込まれる。下段は一辺0.81mのほぼ正方形である。枠は抜き取られていたが、下段の四隅がオーバーハング状であることなどから方形縦板組隅柱横桟留構造の枠が構築されていたのではないかと思われる。底から須恵器壺Mが1点、土師器壺が2点出土した。奈良時代後半に廃棄されたとみられる。



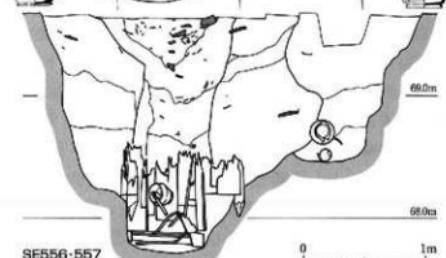
SE571全景（東から）



SE571壺M出土状態（東から）



SE556・SE557断面（南西から）



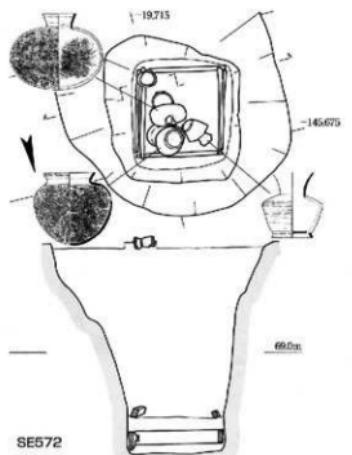
SE557全景（南から）

SE559・560 2基の井戸が同じ位置で重複関係にある。SE560はSE559の埋土を掘り込んで構築されている。SE559の井戸枠は抜き取られて遺存しないが、井戸底に濾過用の疊敷が残存していた。疊敷の範囲は、南北0.78m、東西0.71mの方形で、厚さは約5cmである。この上から斎車1点、須恵器杯Bが1点（墨書き「季」あり）、土器器鉢Aが1点（墨書きあり）、木製刀子鞘1点と多くのへぎ板片が出土した。へぎ板片は井戸枠部材の残欠と考えられるので、井戸枠の構造は方形縦板組であったと推定できる。奈良時代後半～末に廃棄されたとみられる。一方、SE560には方形縦板組隅柱横桟留構造の井戸枠が遺存し、大きさは内法で南北0.90m、東西0.92mである。一辺に3～4枚の厚い縦板（厚さ3～5cm）を配してから、その縦目の外側に薄い縦板（厚さ1～2cmのへぎ板）を当てて隙間を塞いでいる。隅柱には円柱2本（東北隅、東南隅）と角柱2本（西北隅、西南隅）が使用されており、いずれも建築部材の転用品である。横桟は隅柱の下から0.28m、1.06m前後の位置に枘穴を穿って挿入されている。底の埋土から押し曲げられた和同開窓1枚が出土した。奈良時代末～平安時代初頭頃に廃棄されたとみられる。

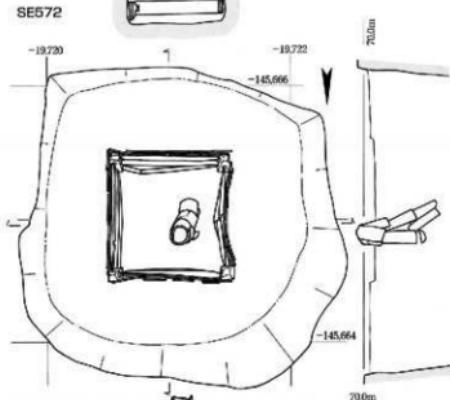
SE562 方形横板組隅柱留構造の井戸で、横板5段分が遺存する。隅柱の縦溝に横板を落とし込んで枠を組み上げ、底には薄い横板を方形に組んで内側から杭で固定した水溜施設のようなものがある。四隅の裏側にそれぞれもう1本の異なる隅柱が掘形の中位に配置されており、上方では外側へさらに枠を組ぎ足していたらしい。ただし、この隅柱には横桟を挿入する枘穴があるにもかかわらず横桟が認められなかったので、これは先行する井戸枠部材の転用品である可能性が高い。掘形が非常に大きい点や掘形から多量の遺物が出土している点から考えて、造り替えが行われたのは確実だろう。枠内上部の埋土から人形木製品、銭貨5枚、掘形から三彩瓦が出土している。最終的には奈良時代末～平安時代初頭頃に廃棄されたとみられる。

SE570・572 2基の井戸で丸瓦を利用したいわゆる息抜き筒を確認した。SE570は方形縦板組隅柱横桟留構造の井戸で、玉縁を上にした丸瓦を2つ合わせて円筒を作り、3段以上積み上げた息抜き筒（外径15.0cm、内径12.0cm、復原できる残存長94.5cm）が地表近くに組まれている。平瓦片や土器片で締目を丁寧に塞いでおり、当初にはおそらく地表にその口を開けていたに違いない。井戸枠内に土砂がある程度自然堆積した後にこれを設置して井戸を埋めているが、枠の腐朽などにより枠内埋土が陥没して北へ少し倒れ込んでいる。奈良時代末～平安時代初頭頃に廃棄されたらしい。SE572は井戸枠が抜き取られ、底に方形横板組の枠が一段分残るに過ぎない。やはり地表近くに息抜き筒（外径13.5cm、内径10.5cm、残存長13.0cm）を設置するが、丸瓦1段分しか認められない。SE570例と違って丸瓦を逆さまにして組まれているので、当初から1段分のみであった可能性が高い。枠を抜き取った後、底に須恵器壺Q、甕、横瓶を置いて井戸を埋め、地表に口を出すように息抜き筒を最後に設置したものと考えられる。奈良時代中頃に廃棄されたらしい。注目できる共通点は、いずれも地表近くにのみ息抜き筒を設置し、底までそれが延びていない点である。おそらく地表と地下との間に鬼魄が入りりするための最低限の通路が確保されればよいとみなされていたのであろう。なお、平城京左京四条四坊十四坪SE113例（第347-2次及び第353-1次・平成8年度）では、息抜き筒が縦板で構成されていた。長さ55cm以上、幅18cm、厚さ8cmの縦板の中央に幅10cm、深さ5cmの溝を縦方向に削り込み、これに同じ幅の縦板（厚さ4cm）を合わせて、中に空洞を作り出している。枠材を抜き取った後にこれを挿入するが、地表から底近くまで貫通していたものと推測できる。それに対しても本例は、丸瓦を積み上げる高さにも一定の限界があるため、材質の違いによって地表近くのみに省略したのかもしれない。

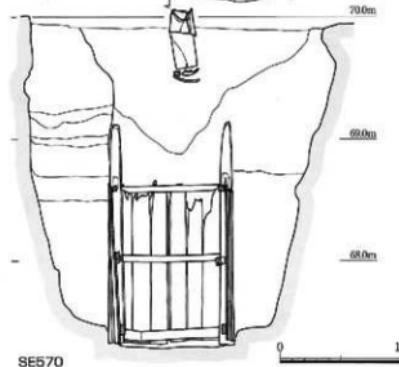
SE571 方形縦板組隅柱横桟留の井戸で、底中央に水溜用の曲物（長径0.70m、短径0.55m、



SE572断面及び瓦・土器出土状態（北から）



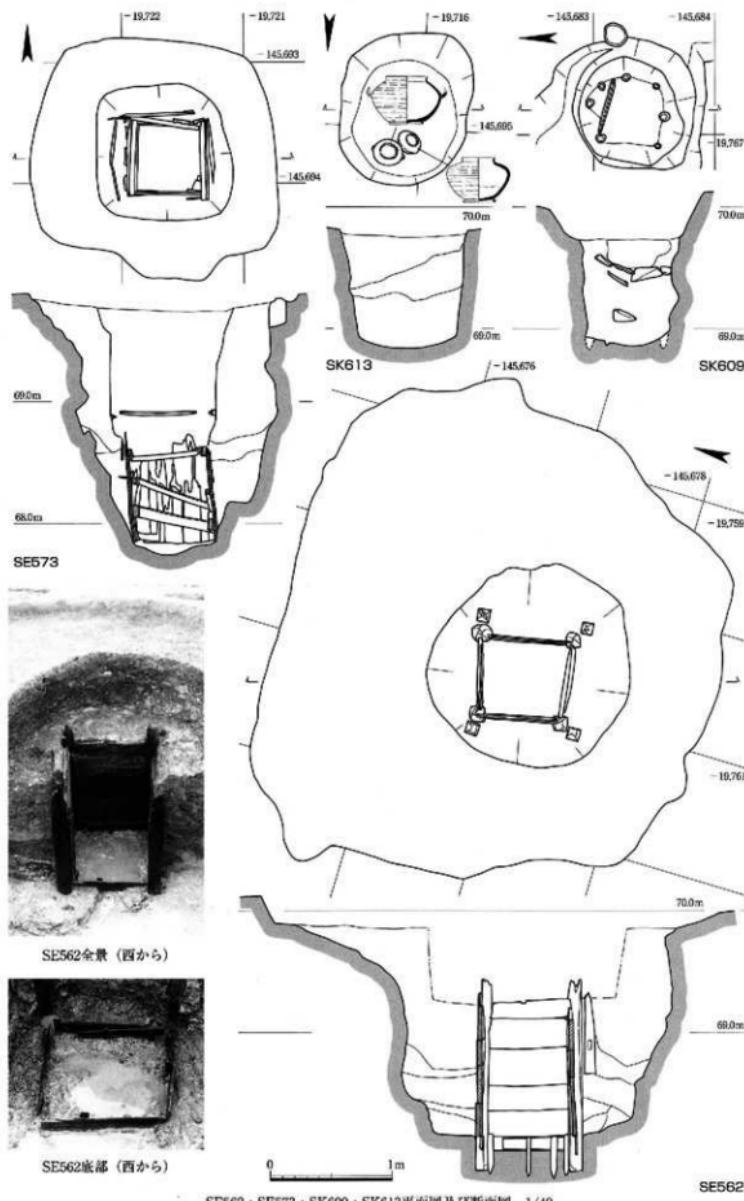
SE570断面及び瓦出土状態（北から）



SE570瓦出土状態（西から）



SE570全景（北西から）



SE562・SE573・SK609・SK613平面図及び断面図 1/40

奈良～平安時代前半の掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	複方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁間全長 m (尺)	桁行柱間 m	梁間柱間 m	周の出 m	備考
SA260	南北	2×5	12.0 (40)	8.4 (18)	2.4等間	2.7等間		
SA261	南北	2×15以上	4.5 (16)	2.1 (7) 以上	1.25等間	2.1		間仕切りあり 2×2 の複合建物か?
SA264	東西	3×2	6.0 (20)	3.6 (12)	2.0等間	1.8等間		
SA270	東西	3×3	7.2 (24)	4.8 (16)	2.4等間	2.4等間	西2.4、南2.4	西・南北付
SA277	東西	3×2	5.1 (17)	3.9 (18)	1.7等間	1.85等間		
SA279	東西	3×2	5.4 (18)	4.4	1.8等間	2.2等間		
SA280	南北	3×2	4.2 (14)	3.6 (10)	1.6等間	1.5等間		
SA286	東西	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.9、1.7、1.8	1.8等間		
SA289	東西	3×3	5.4 (18)	4.8 (15)	1.8等間	2.25等間		
SA290	東西	3×2	6.0 (20)	3.8 (11)	2.1、1.8、2.1	1.85等間		SD269より新しい
SA291	東西	5	8.2		1.6、1.8、1.6、1.6			
SA292	東西	2	7.5 (26)		3.75等間			
SA293	東西	5以上	9.6 (32) 以上		2.4、1.8、1.8、1.8			
SA294	南北	3	7.8 (26)		2.4、2.7、2.7			
SA295	東西	1以上×2	2.65以上	1.6 (12)	2.0	1.8等間		SA293と直交
SA297	東西	3×2	4.8 (16)	4.2 (14)	2.4等間	2.3等間		
SA298	南北	3×2	6.6 (22)	3.3 (11)	2.3等間	1.85等間		
SA299	東西	3×2	6.1 (17)	3.6 (12)	1.7等間	1.8等間		
SA300	東西	3×2	5.4 (18)	4.2 (14)	1.8等間	2.1等間		
SA301	東西	2以上×2	4.8 (16) 以上	4.2 (14)	2.4等間	2.1等間		
SA302	南北	3×2	5.1 (17)	3.6 (12)	1.7等間	1.8等間		
SA303	東西	4×3	6.0 (20)	3.2	1.8等間	1.5、1.7		
SA304	南北	3×2	6.6 (22)	4.4	2.3等間	2.2等間	東2.7	東面付
SA305	南北	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.8、1.8、1.5	1.8等間		
SA306	東西	2×5	5.1 (17)	3.8 (13)	1.8等間	1.95等間		SB307より新しい
SA307	南北	3×2	5.7 (19)	3.6 (12)	1.9等間	1.8等間		
SA308	東西	2×2	4.5 (15)	3.9 (15)	2.4、2.1	2.1、1.8		SB307より新しい
SA309	東西	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.8等間	1.8等間		
SA310	南北	3×2	5.4 (18)	3.9 (13)	1.8等間	1.95等間		SB309より新しい
SA311	東西	5×2	9.6 (32)	5.6 (12)	2.4、1.8、1.8、1.8、1.8	2.1、1.5		間仕切りあり
SA312	南北	2×2	3.9 (13)	3.6 (12)	2.1、1.8	1.8等間		
SA313	南北	3×2	6.0 (20)	4.0	2.0等間	2.0等間		
SA314	南北	3×2	4.2 (14)	3.6 (12)	1.4等間	1.8等間		
SA315	東西	3	5.1 (17)		1.7等間			
SA316	南北	3×2	5.1 (17)	3.3 (11)	1.7等間	1.85等間	東2.4	東面付、SD123より古い
SA317	南北	3×2	6.3 (21)	3.6 (12)	2.1等間	1.8等間		
SA318	東西	2	2.8		1.4等間			
SA319	南北	2	3.0 (16)		1.8等間			SA318と直交
SA320	東西	2	6.0 (20)		3.2、2.8			SD113より新しい
SA321	東西	3×2	3.6 (12)	2.8	1.8等間	1.4等間		縦柱建物
SA322	南北	3×2	5.7 (19)	4.8 (15)	1.8、2.1、1.8	2.25等間		縦柱建物
SA323	南北	2×2	5.1 (17)	4.8 (14)	2.25等間	2.1等間		縦柱建物
SA324	南北	3	5.4 (18)		1.8等間			
SA325	東西	3×2	6.3 (21)	3.6 (12)	2.15等間	1.8等間		縦柱建物
SA326	東西	2	4.5 (15)		2.25等間			
SA327	南北	2×2	6.3 (21)	3.1 (17)	3.15等間	2.4、2.7		
SA328	南北	3×2	7.2 (24)	5.1 (17)	2.4等間	2.35等間		
SA329	東西	4×2	7.8 (26)	4.5 (14)	1.8、1.8、2.1、2.4	2.1等間		
SA330	東西	3×2	6.3 (21)	4.2 (14)	2.1等間	2.1等間		
SA331	南北	2	4.2 (14)		2.1等間			
SA332	南北	3×2	5.4 (18)	4.8 (16)	1.8等間	2.4等間		
SA333	南北	3×2	5.4 (18)	4.2 (14)	1.8等間	2.1等間		一削削定山原
SA334	東西	3×2	6.9 (23)	4.5 (15)	2.3等間	2.25等間		
SA335	南北	3×2	5.1 (17)	3.9 (13)	1.7等間	1.55等間		
SA336	東西	2×2	4.6 (18)	3.9 (13)	2.25等間	1.85等間		
SA337	東西	3×2	5.1 (17)	3.3 (11)	1.7等間	1.65等間		
SA338	東西	3×2	4.2 (14)	3.0 (10)	1.4等間	1.2等間		SP337より古い
SA339	東西	5×2	8.4 (28)	3.9 (13)	1.5、2.0、1.8、1.6、1.5	1.55等間		SD125より新しい
SA340	南北	2×2	3.3 (11)	2.7 (9)	1.65等間	1.35等間		SD124より新しい
SA341	東西	3×2	5.4 (18)	3.7	1.8等間	2.1、1.8		SD124より古い
SA342	東西	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8等間	1.8等間		SD125より新しい
SA343	東西	2×2	3.6 (13)	2.7 (9)	1.8等間	1.35等間		SD126より新しい
SA344	南北	2以上×1以上	3.6 (13) 以上	1.8 (5) 以上	1.8等間			
SA345	東西	4×1以上	7.2 (24)	2.1 (7) 以上	1.8、1.8、2.0、2.1			
SA346	南北	3×2	5.1 (17)	3.4	1.7等間	1.7等間		
SA347	南北	3×3	5.7 (19)	5.4 (18)	2.4、1.8、1.5	1.8等間		

平安時代後半～鎌倉時代の掘立柱建物・解説表

施設番号	構造内 (桁行×梁間)	面積 (m ²)	桁行全長 m (尺)	梁間距離 m (尺)	桁行件間 m	梁間柱間 m	備考
SH267	南北	3×2	5.1 (17)	4.2 (14)	1.7等間	2.1等間	磐石あり
SH268	南北	3×4	5.4 (18)	4.2 (14)	1.8等間	1.6、1.9、1.4	磐石あり
SH274	南北	5×2	9.6 (32)	9.3 (11)	1.6、2.4、2.1、2.3、1.6	1.65等間	12世紀
SH275	東西	3×2	5.4 (18)	4.8 (16)	2.1、1.8、1.5	2.4等間	SH274より新しい
SH286	東西	3×2	6.3 (21)	3.6 (12)	2.1等間	1.8等間	

井戸・土坑・観察表

施設番号	概 形		井 戸			主要出土遺物及び参考事項
	平面形	平面規模 (m)	溝さ (m)	形態・構造	内法寸法 (m)	
SH556	隅丸方形	南北1.65	1.22	抜き取り(方形井戸枠跡)	0.7前後	須恵器底Q、土師器底Q、磁石
SH557	隅丸方形	2.0×2.1	1.96	方形礎板組脚柱構造	0.8×0.16	須恵器底八、底Q、帶青七、磁石、桃核
SH558	隅丸方形	1.5×1.9	1.45	抜き取り(方形井戸枠跡)	0.8前後	須恵器底八、上部漆器、鉢、瓶等
SH559	不整形	東西3.77	3.22	抜き取り(方形礎板組)	0.7前後	古車、墨書き土器、木製刀子柄、桃核
SH560	造形	2.9×2.5	2.46	方形礎板組脚柱構造	0.92×0.9	和同開珎I、房桂
SH561	円形	径1.3	1.2	抜き取り(方形井戸枠跡)	0.7前後	瓦器、青磁
SH562	隅丸方形	3.5×3.8	2.0	方形礎板組脚柱構造(底谷分り)	0.65	人形木製品、三彩瓦、木香、櫛、萬年通鑑I、牛馬開闢4、磁石、鈴、鏡、漆刷、漆單羅
SH563	円形	径1.5	1.9	抜き取り		
SH564	隅丸方形	一辺1.7	0.95	抜き取り(近辺に神痕跡)		
SH565	隅丸方形	2.8×3.3	2.8	方形礎板組脚柱構造		船輪器、白物、工具柄、磁石、桃核
SH566	椭円形	1.8×2.2	0.9	抜き取り(方形井戸枠跡)	1.0前後	
SH567	隅丸方形	一辺1.8	1.3	方形礎板組	0.7	桃核
SH568	円形	径2.2	1.35	方形礎板組脚柱構造	0.4	
SH569	円形	径2.3	1.3	抜き取り(方形井戸枠跡)	0.8	漆沙冠片
SH570	隅丸方形	一辺2.5	2.7	方形礎板組脚柱構造	0.95	九五三段階による基盤各段、高木、瓦、磁石、瓦器
SH571	円形	径2.5	2.4	方形礎板組脚柱構造	1.05	須恵器底Mを四隅に埋納、藤平永寶2、曲物、匙形木製品、磁石、帆核、風扇片
SH572	椭円形	2.1×1.8	1.7	方形礎板組	0.65	九五三段階による基盤各段、須恵器底M・Q、盤、櫛、房桂
SH573	隅丸方形	一辺2.0	2.1	方形礎板組脚柱構造	0.85	墨書き土器、鈴、漆刷、桃核
SH508	隅丸方形	5.0×6.0	1.6			上部漆器、瓦器、須恵器、磁石、劍形・鏡形・杓子等小裝品
SK609	円形	径1.0	0.9			瓦器
SK410	方形	一辺2.0	0.2			
SK511	不規則形	径1.5	0.8			
SK512	隅丸方形	2.1×1.6	0.9			
SK613	椭円形	1.9×1.9	0.95			須恵器底Mが2点
SK614	椭円形	2.0×1.5	1			
SK515	円形	径1.0	0.6			上部漆器、瓦器
SK516	円形	径1.2	0.9			

深さ0.30m)を設置し、この周囲に砾を敷く。砾敷下の四隅に須恵器壺Mを配置し、南東隅から隆平永寶1枚と土師器皿、北西隅から隆平永寶1枚が出土した。これらは、井戸構築時に埋納された遺物と考えられる。使用時に東西の井壁が内側に圧迫されたため、補修した痕跡が残っている。その補修方法を復原的に述べると、まず北西隅柱を内側に新たに据え直し、それと南壁を支点として西壁を支えるために南北方向の丸木を入れる。次に、これと直交させて南壁沿いと中央に突っ張りの丸木を東西方向に入れて東壁を支持する。枠材は建築部材の転用品で、縦板には原材が再利用されていた。平安京遷都後の構築であろう。

SK613 須恵器壺△2点を底に置いて一度に埋め立てた土坑である。

SX808 南北1.7m、東西1.6m、深さ0.85mの柱穴で、柱抜き取り時の掘削によって上部に段がつく。底には瓦片を敷き詰めて柱の礎板としている。これと組み合う柱穴が周辺になく独立しているので、幡を立てた跡である可能性も考えられる。

III 平安時代後半～鎌倉時代の遺構

12世紀前半～14世紀前半の遺構を一括して概述する。

SD128 長さ18.7m、幅2.1m前後、深さ0.2～0.6mの東西溝で、西半分が大きく鉤形に屈曲する。埋土は大きく2層に分かれる。上層には地山の黄灰色粘土ブロックが多く混入しており、この溝が一度に埋め立てられたことがわかる。下層の灰褐色土からは多くの瓦器、土師器などが出土し、12世紀前半頃に埋没したと推定できる。

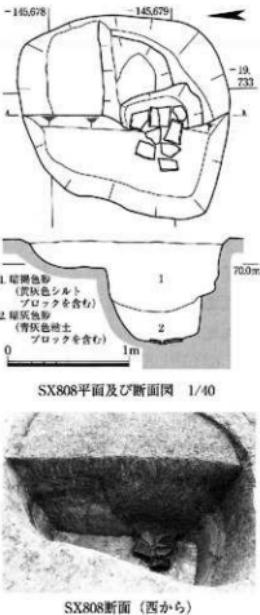
SK608 東半が一段深くなり、埋土は一度に埋め立てられている。底からは、12世紀前半頃の瓦器碗・皿、土師器皿、漆器碗などがまとまって出土した。

SK609 底には、西側を除いては等間隔に7つの杭跡がめぐっている。西側が開口するようすに土坑内に杭が打ちめぐらされていたらしく、14世紀前半の瓦器碗が出土した。

SK610 埋土には炭が多量に混在し、底からが壁片と思われる焼土塊がまとまって出土した。12世紀後半～13世紀前半の遺物が出土した。

IV 出土遺物

土器、埴輪、土製品、瓦塊、錢貨、金属製品、木製品、石製品、石器がある。多くは、奈良時代前半から鎌倉時代にかけての遺物である。埴輪は包含層から数点出土した。口縁部高7cm、突帯間隔13.5cm以上のⅡ期¹⁾の円筒埴輪片がある。石製品のほとんどは砾石であり、他に流紋岩製の紡錘車が1点ある。石器には、石鎚3点、スクレイバー1点、大型蛤刃石斧1点、剥片などがある。遺物整理が終了していないので、ここでは奈良時代の主要な遺物について若干の報告を行なうにとどめる。なお、図示した遺物の出土遺構は、1がSE562、2がSB322西側柱列の北から2番目の柱穴、



SX808平面及び断面図 1/40

SX808断面(西から)

1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」「古墳時代政治史序説」堺書房、1988。

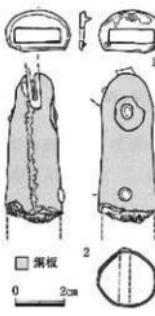
3がSE558、4がSB299北東柱穴、5~10及び13~16がSE571、11・12・31がSE559、19・29・30がSE557、20~23がSD114、18・24・26がSE556、17がSE571、27・28がSK613、25・32・33がSE572、34~57がSE570、58~68がSE562である。

土器 5~8は、SE571井戸枠内の四隅に配置されていた壺Mである。すべて底部には糸切り痕跡が残る。13・14は縁鉢皿である。21の須恵器杯Bには「美濃国」の刻印があり、老洞古窯跡群A-II-2類^aの刻印と同じものと思われる。同窯の製品であろう。墨書き土器は24点あり、判読できた墨書き土器は9点である。4点(11・12・19・64)を図示した。線刻土器は7点あり、「×」などの記号を刻む例が多い。文字の陰刻を確認できるのは2点にすぎないが、いずれにも「左兵」と記されており、19の墨書き土器もあるいは同じ内容であったかもしれない。この3点の出土地点が近接するのも注意される。墨書き・線刻・刻印土器の概要は以下の一覧表に示した。

瓦塼 丸瓦、平瓦と、軒丸瓦26点、軒平瓦29点、熨斗瓦12点、施釉瓦27点、埠85点などがある。軒丸瓦の内訳は、6133種別不明1点、6200A1点、6225種別不明1点、6275A1点、6308種別不明1点、6316B1点、型式不明17点、平安時代以降2点。軒平瓦の内訳は、6561A1点、6641E1点、6647D1点、6664D1点、6666A1点、6667A2点、6685A1点、6689Ab1点、6691A1点、6702F1点、6721C1点、6721E1点、6732C1点、6732Z1点、6732種別不明1点。型式不明9点、平安時代以降のものが3点である。施釉瓦には、三彩平瓦と縁釉平瓦の2種があり、ほとんどがSE562及びSB300西側妻柱穴から出土した。この他に「男」a種^bの刻印を押す平瓦が1点ある。

金属製品 1は銅製丸鞘の表金具である。用途不明の鉄器(2)は木柄に銅板を巻き、上下2箇所を鉄製目釘で留めている。先端には目釘で留められた鉄板が付くが、大部分が欠失している。

木製品 30・31・57は柾革、58は木靴片である。59はヒノキ製の人形木製品で、高さ19.9cm、最大幅(肩部)3.1cm、最大厚(腹部)1.9cm。軽く腹を突き出したような立ち方で、右腕を肘から前に曲げる。左腕は前方に差し出されていたか、胸前に当てられていたと思われる。下半部は付け根が脛部より張り出すので、足の表現ではない。全体的特徴から仏像である可能性が高い。



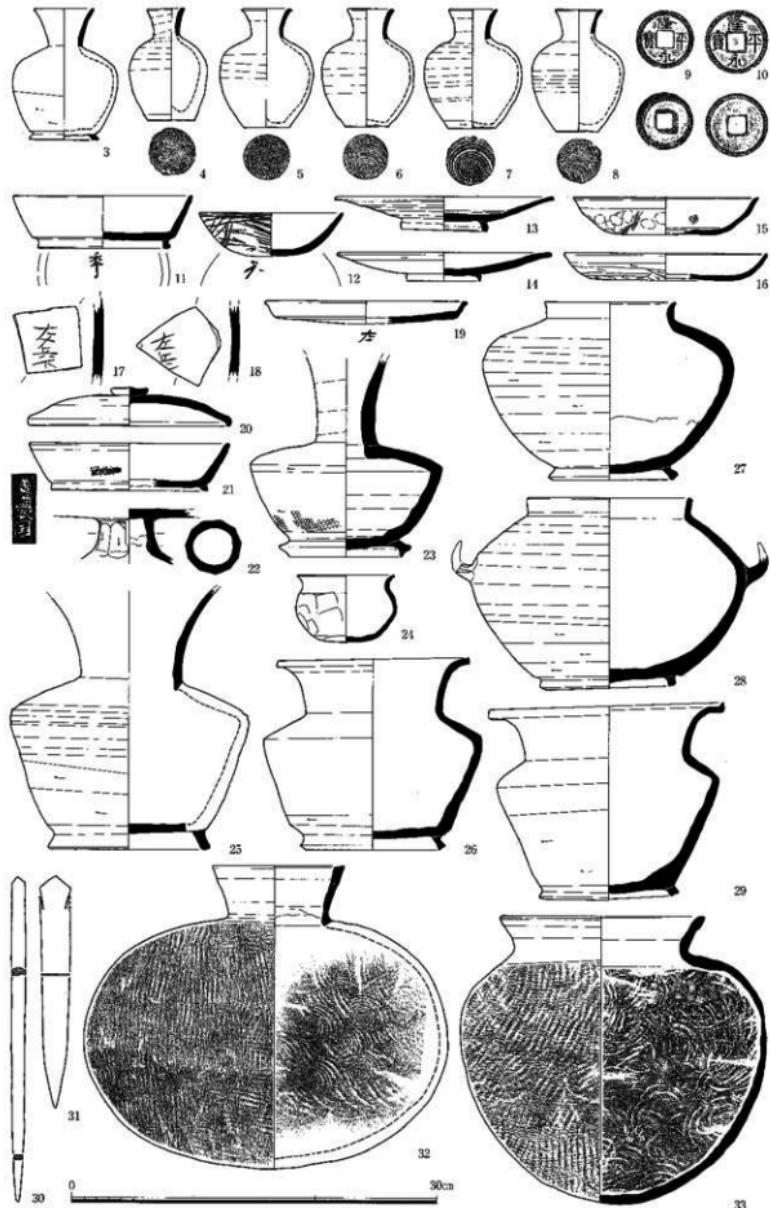
金属製品 1/4

2) 岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981。

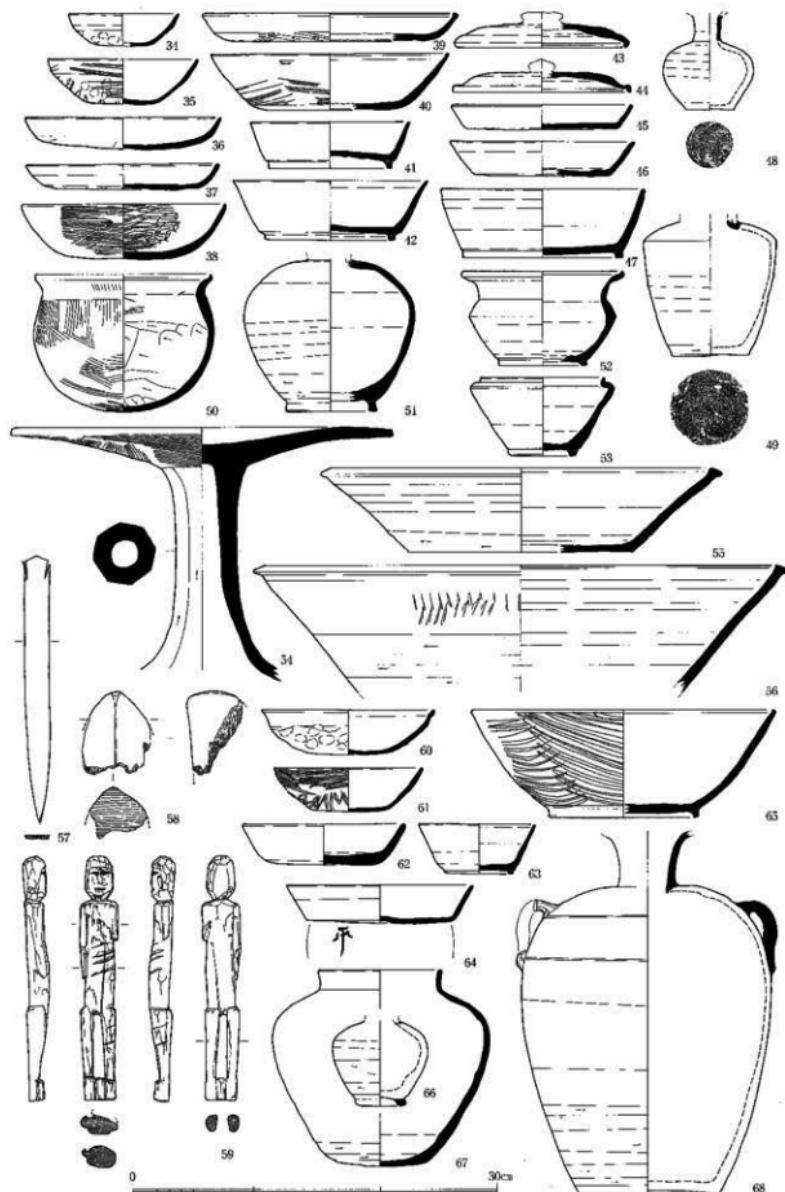
3) 西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990。

墨書き・線刻・刻印土器一覧表

内 容	固番号	分類	器 种	位 置	山 土 遺 構
1 幸(年の眞体字)	11	墨書き	須恵器杯B	底部外面	SE559
2 左(以下欠損)	15	墨書き	須恵器杯A	底部外面	SE567
3 素(断点文字?)	64	墨書き	須恵器杯A	底部外面	SE562
4 右□		墨書き	土師陶杯または皿	底部外面	SE569
5 ○		墨書き	須恵器皿	つまみ上	SD118
6 南		墨書き	須恵器皿A	底部外面	SE567
7 用?		墨書き	須恵器皿または皿	底部外面	SE567
8 蔊		墨書き	須恵器皿または皿	底部外面	SE567
9 大		墨書き	須恵器皿B	底部外面	SE570
10 兵下	17	線刻	須恵器皿または皿	底部外面	SE571
11 左兵(以下欠損)	18	線刻	須恵器皿または皿	底部外面	SE556
12 兵邊圓	21	刻印	須恵器皿B	底部外面	SD114



出土土器・銭貨・木製品 1/4



SE562・SE570出土の土器及び木製品 1/4

V まとめ

今年度に実施した調査によって右京二条三坊二坪内の様相をほぼ解明することができたが、十分な整理作業が未だできていない。ここでは、ある程度の見通しを概述してまとめとしたい。

坪内は南北に4分割、東西に4分割された1/16の区画で基本的に利用されていたらしい。南北に2分割する位置には東西方向の空閑地がみられ、ここに通路の存在を想定できる。その幅は、およそ3.6mあり、これを坪内1/2東西道路と呼ぶ。SD113~117によって方形に区画された宅地がこれに北面して存在し、その広さは坪の約1/16である。方形区画溝の西北、西南隅付近から出上した須恵器窯Kや土馬は、その内側を守護する祭祀に関わって置かれた可能性も考えられる。この区画の西隣に0.8~1.5mの間隔をあけて類似した区画溝SD118~120があり、そこにも同規模の宅地を想定できる。これらの宅地間の空閑地にも通路としての機能を想定できるが、坪内を南北に貫くように通路が存在したかどうかは遺構配置からみて疑問である。また、SD113・116・118は坪を南北に4分割する位置にあり、それぞれ北側に沿って幅1.5m前後の空閑地が東西方向に延びている。これも通路であると考えられ、坪内1/4東西道路と呼ぶ。このように、東西道路で坪内の北半をまず2分割し、主要な通路としてそれを確保した上で宅地をさらに東西方向に4分割していた可能性が高い。坪内の東西道路は、それぞれの宅地の南辺を削いて設けられている。

これに対して、南半では坪内1/4東西道路の存在を想定し得るような空閑地を認めるることは難しい。ただし、遺構配置からみて南半も南北に2分割して利用されていた可能性は高い。そこで考えられるのは、南端の南北1/4区画は二条条間路に南面してこれを通路とし、この北側の南北1/4区画は坪内1/2東西道路に北面してこれを通路としたという推測である。では何故、北半にのみ坪内1/4東西道路が設けられたのであろうか。二坪の北側には東西方向の流路が東流しており、周辺地の南北道路の側溝はそれに向かって排水するように勾配を付けてある。この点からもわかるように、当初から二坪の北端は流路と接しており、一坪と二坪の間には小路の存在を想定できない。北端の南北1/4区画から北へ直接出ることができないので、北半にはどうしても坪内1/4東西道路が必要となってくるのである。

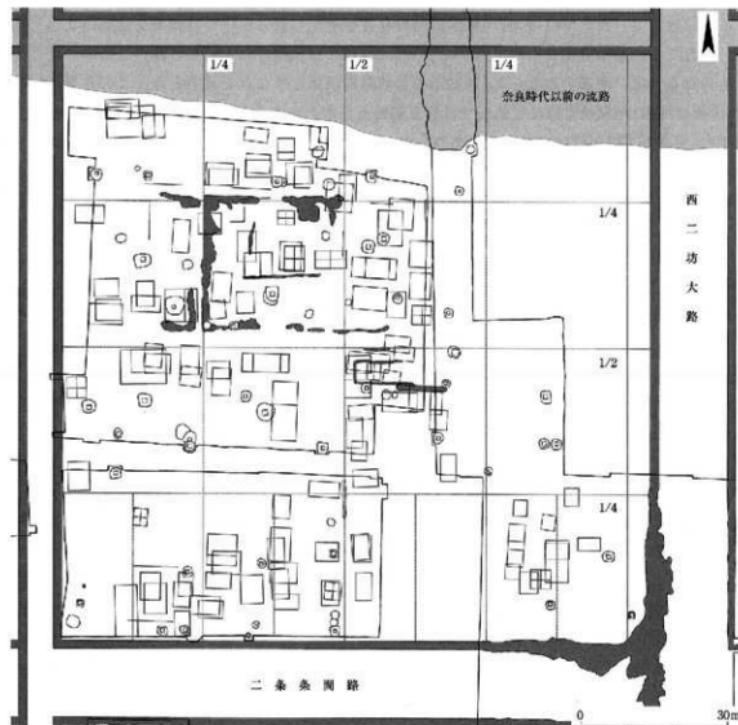
宅地割は、計画道路心ではなく、坪の周囲を取り囲む道路側溝の内辺を基準として行なわれ、坪内を均等に16分割している。ただし、東西の分割は正確に均等ではなく、東端の区画だけが少し大きくなっている。東端の区画は西二坊大路に面しており、大路に沿って何らかの区画施設が坪内に設けられていた可能性を考慮すれば、東端の区画が大きいのは見かけ上のことに過ぎないと言えるだろう。なお、坪の南辺や西辺に沿っては道路側溝の際まで建物や井戸⁴⁵が構築されているところがあり、区画施設の存在した痕跡が見当たらない。また、二条条間路に面した南辺には一定の間隔を置いて井戸が掘削されており、それを基にして南端の南北1/4区画には、1/16をさらに東西に2分割した1/32の宅地割を想定できるが、当初からの宅地割を後に細分化したものと考えられる。ただし、以上のような宅地割に適合しない建物跡なども若干存在しており、それらをどのように考えるかは今後の課題である。

平城京の遺構は、奈良時代前半から平安時代前半まで連續と構築されている。各宅地内にある複数の井戸跡は、長期にわたる宅地利用の実態を反映する。井戸の廃棄にあたっては、様々な祭祀が行われたが、息抜き筒を立てる祭祀が奈良時代中頃には始まっていたことが明らかになった点は、重要な成果である。律令的井戸祭祀が変容する10世紀頃から、このような祭祀が始まるという見解⁴⁶は、再検討する必要があろう。中国思想の影響による井戸祭祀の変容は、奈良時代にお

44) 北川裕行「古代都城における井戸祭祀」『考古学研究』第47巻第1号、考古学研究会、2000

いてすでに始まっているのである。また、建物SB299の北東隅柱からは、9世紀中頃の須恵器壺M1個体が完形を保った状態で出土した。建物建築時の地鎮の際の上器と思われ、平安京遷都後もしばらく人々の居住が継続していたことを如実に示している。しかし、10世紀になると顯著な遺構の存在が明確ではなくなる。

12世紀になると、再び遺構が多くなるが、その分布はSD128を境として南北に大きく分かれる。坪内1/2東西道路の位置に重複してSD128やSK608が掘削されている点からみて、この頃まで道路跡が空閑地として遺存していたことがわかる。他の遺構の分布も区画の遺存を明瞭に示しており、坪内南西隅に掘削された土坑（SK601・602）の範囲は東西1/8の区画内に収まっている。二条条間路や七坪との坪境小路に沿って遺構が構築される傾向がみられるので、これらの道路もまだ十分に機能していたであろう。また、二坪周辺の道路側溝に堆積していた土壤の花粉分析が行われており、12世紀頃には周囲でソバに代表される畑作が盛行していたことが推定されている（第283次及び第292次・平成6年度）。このことから、遺構の希薄な空閑地では、ソバを主体とする畑作が行われていた可能性がある。顯著な遺構は14世紀前半を最後にみられなくなり、16世紀頃には一帯が水田化していくのであろう。（鑑方正樹・松浦五輪美・原田香織・山前智敬）



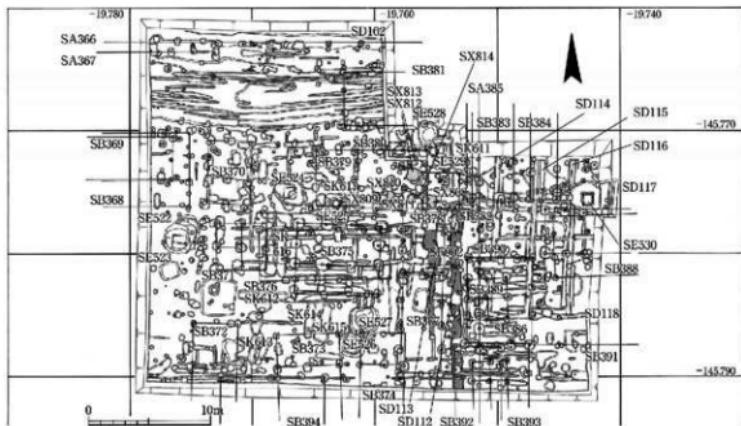
右京二条三坊二坪の遺構〔奈良～平安時代前半〕平面分布図 1/1,000

(2) 平城京右京二条三坊三坪の調査 第431-3・-4次

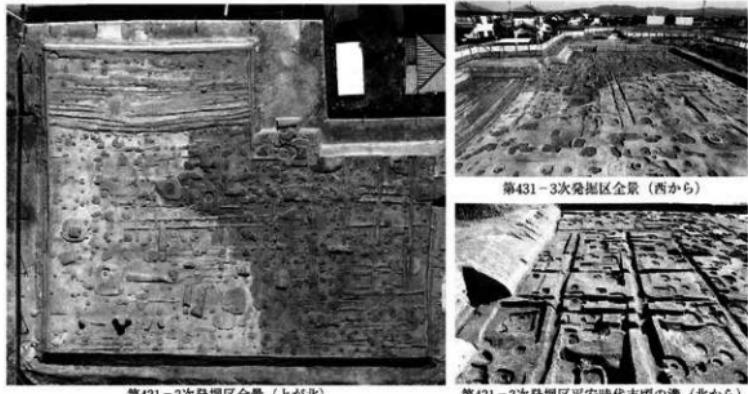
1 はじめに

右京二条三坊三坪では、これまでに坪の東半部で第273-2次調査、西二坊大路に接して第378-7次調査、西半部で第286-1次調査、南西部で第310-1次調査を実施している。今年度は、三坪北西隅の二条条間路に面した位置で第431-3次調査を、南半中央の第273-2次調査発掘区に東接する位置で第431-4次調査を実施した。

調査地周辺は、西から北、東へ緩やかに下がり、低い段をつけて水田化されている。今回の調査地はとともに從前に宅地化されており、その際の造成盛土が0.5~1.2mある。両発掘区の基本的な層序は、造成盛土の下、黒灰色土（耕土）、灰色砂質土、灰褐色土と続き、耕土下0.5~0.7mでは黄灰色粘土あるいは黄褐色土、茶灰色砂の地山となる。地山の標高は70.8~71.1mである。

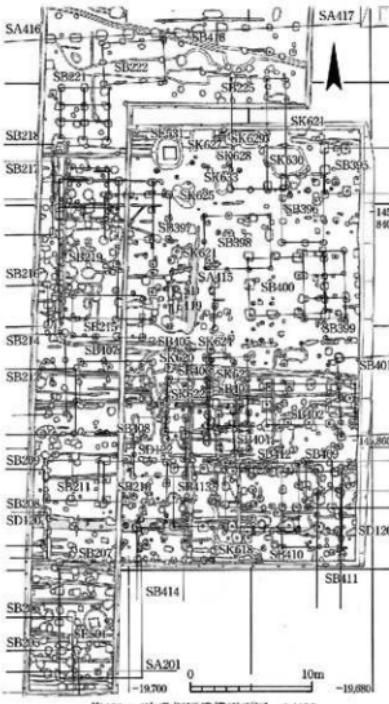


第431-3次発掘区遺構平面図 1/400



第431-3次発掘区全景（上が北）

第431-3次発掘区平安時代末頃の溝（北から）



第431-4次発掘区全景（上が北）



第431-4次発掘区全景（南から）

II 検出遺構

主な検出遺構には二条条間路南側溝、奈良時代から平安時代前半の掘立柱建物53棟、掘立柱塀6条、溝6条、井戸10基、土坑11、平安時代後半以降の掘立柱建物1棟、溝5条、土坑10がある。このうち、SB207、SB210、SB215、SB219、SB225は、第273-2次発掘区にまたがって位置し、今回その規模を確定することができた。またSA223、SA224、SB226は、今回の調査結果から規模と構造を変更したため、それぞれSA16、SA417、SB418と改め、旧番号については欠番とする。また、SB213は建物としてまとまらないことが明らかとなつたため、今回欠番とする。掘立柱建物・塀・井戸についてはその概要を以下の表にまとめる。遺構の数が多いので、主要なものに限ってその概要を報告する。

奈良時代から平安時代前半の遺構

二条条間路南側溝SD102 第431-3次発掘区の北端で検出した、東西方向の溝である。溝の南岸を検出したのみで、全幅、深さは明らかでない。

SF902 第431-3次発掘区の中央で検出した南北方向の道路である。道路側溝SD112、SD113の溝心々間距離は2.07mである。溝岸が浸食をうけており、当初の路幅は不明である。側溝心々間での道路中軸の国土座標値は、 $X = -145,782.86$ 、 $Y = -19,754.32$ である。これは、宅地内での東西1/4の位置にはば合致する。

奈良・平安時代の掘立柱建物・等一覧 (1)

遺跡番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁間全長 m (尺)	桁行件間 寸法 (m)	梁間柱間 寸法 (m)	奥出 (m)	備考
S 3207	南北	4×2	9.6 (32)	4.2 (14)	2.4	2.1	2.4	東面施
S 3210	東西	2×2	4.2 (14)	3.6 (12)	2.1	1.8		掘立柱物
S 3211	東西	3×2	4.8 (16)	3.2 (10.6)	1.6	1.6		
S 3215	東西	3×2	6.0 (20)	3.2 (10.6)	1.5	1.6		
S 3219	南北	5×2	11.4 (38)	4.8 (16)	2.4, 2.4, 2.1, 2.4, 2.4	2.4	3.0	東面施。北に開口に脚切あら。
S 3225	南北	5×2	9.0 (30)	3.2 (10.6)	2.1	1.6	1.5	東面施
S A366	東西	(9)	18.6 (62)		1.8, 2.4, 1.8			
S A367	東西	(3)	5.4 (18)		1.8			
S 3368	東西	2以上×2	2.4 (8)以上	3.8 (12.6)	2.4	1.9	1.9	南面施
S 3369	東西	2以上×2	1.5 (5)以上	3.6 (12)	1.5	1.8		
S 3370	南北	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8	1.8		掘立柱物。主棟北に3"振れる。
S 3371	東西	2×2	4.2 (14)	3.6 (12)	2.1	1.6		掘立柱物
S 3372	南北	3以上×2	5.1 (17)以上	3.6 (12)	1.8	1.8		北で東に3"振れる。
S 3373	南北	2以上×2	2.4 (8)以上	4.8 (16)	2.4	2.4	2.4	北1間目に脚切。北で東に3"振れる。
S 3374	南北	1以上×2	—	3.6 (12)	—	1.8	2.4	北面施
S B375A	東西	3×2	6.0 (20)	3.4 (11.3)	2.4, 2.1, 2.4	1.7	2.1	南北施。北で東に3"振れる。
S B375B	東西	3×2	6.0 (20)	3.4 (11.3)	2.4, 2.1, 2.4	1.7	2.4	S B375Aの壁
S B376	東西	5×2	10.5 (35)	4.0 (13.3)	2.1	2.0		西1間目に脚切。北で西に3"振れる。
S B377	南北	4×2	8.0 (26.6)	3.2 (10.6)	2.0	1.6		北で東に3"振れる。
S B378	南北	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.8, 1.8, 1.8	1.8		
S B379	南北	3×2	4.5 (15)	3.5 (11.6)	1.6	1.8, 1.7		
S B380	南北	3×2	6.0 (20)	4.8 (16)	2.0	2.4		壁塗と基を作り。
S B381	東西	2以上×3	2.4 (8)以上	4.5 (15)	2.4	1.5		北で西に3"振れる。
S B382	南北	2×2	3.0 (10)	3.0 (10)	1.5	1.5		
S B383	南北	3以上×2	3.2 (10.6)以上	3.6 (12)	1.6, 1.6	1.8		
S B384	南北	2以上×2	4.2 (14)以上	4.8 (16)	2.1	2.4	2.1	南北施。北で東に3"振れる。
S A385	南北	(10)	17.6 (58.6)		3.0, 1.4, 1.6, 1.8, 2.1, 3.4, 1.8, 1.6			
S B386	南北	1	3.4 (8)		2.4			S A385に取付く門
S B387	東西	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.6	1.8		北で西に3"振れる。
S B388	東西	2以上×3	2.1 (7)以上	5.0 (16.6)	2.1	1.6, 1.7, 1.7		北で西に3"振れる。SH387より新しい。
S B389	南北	2×2	3.2 (10.6)	3.2 (10.6)	1.6	1.6		壁塗施物。北で東に3"振れる。
S B390	南北	3×2	7.2 (24)	5.4 (18)	2.4	2.7		北で東に3"振れる。SH389より新しい。
S B391	東西	3以上×2以上	4.8 (16)以上	2.4 (8)以上	2.4	2.4		
S B392	南北	2以上×2	1.8 (6)以上	3.6 (12)	1.8	1.8		
S B393	南北	2以上×2	1.4 (4.6)以上	2.8 (9.3)	1.4	1.4		掘立柱物。北で西に3"振れる。
S B394	東西	4×2以上	8.4 (28)	—	2.1	—		
S B395	東西	2以上×2	1.8 (6)以上	3.6 (12)	1.8	1.8		
S B396	南北	3×2	5.4 (18)	3.2 (10.6)	1.8	1.6		
S B397	東西	3×2	4.5 (15)	3.6 (12)	1.5	1.8		
S B398	東西	3×2	5.4 (18)	4.2 (14)	1.8	2.1		
S B399	南北	3×2	3.4 (18)	3.2 (10.6)	1.8	1.6		組拌施物。北で西に3"振れる。SH400より新しい。
S B400	南北	3×2	6.3 (21)	4.8 (16)	2.1	2.4		北で西に3"振れる。
S B401	南北	5×1以上	6.3 (21)	—	2.1			北で内に3"振れる。
S B402	東西	4×2	7.2 (24)	3.2 (10.6)	1.8	1.6		
S B403	南北	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8	1.8		北で西に3"振れる。
S B404	南北	2×2	3.0 (10)	3.0 (10)	1.5	1.5		掘立柱物。北で西に3"振れる。
S B405	南北	4×2	7.2 (24)	3.6 (12)	1.8	1.8		
S B406	南北	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8	1.8		
S B407	東西	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8	1.8		SH403・405より新しい。

奈良・平安時代の掘立柱建物・塙一覧 (2)

遺構番号	南北方向	規模(柱径×梁間)	柱径全長m(?)	梁間全長m(?)	柱径柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	廻出(m)	備考
SB408	南北	3×2	4.8(16)	4.2(14)	2.4	2.1		
SB409	東西	3以上×2	4.2(14)以上	3.6(12)	2.1	1.8		西1面に開仕切あり。
SB410	南北	4×2	6.1(20.2)	4.8(16)	1.5	2.4		SB414より新しい。
SB411	南北	4以上×1以上	6.0(20)以上	—	2.0	—	2.1	西面開
SB412	東西	3×2	6.0(20)	3.6(12)	2.0	1.8	2.1	南側町
SB413	東西	5×2	13.0(40)	4.8(16)	2.4	2.4		SB410より新しい。
SB414	南北	2以上×2	2.4(8)以上	3.2(10.6)	2.4	1.8		
SA415	南北	3	5.4(18)	—	1.8			
SA416	東西	(5)	10.5(36)	—	2.1			ともに東で北に3°傾れる。旧SA223・224・SH226
SA417	東西	(3)	6.3(21)	—	2.1			
SB418	東西	1	3.6(12)	3.6	—			SA416・417に附付く門。

SD112・SD113 宅地内道路SF902の東西両側溝である。SD112は幅0.6~0.8m、検出面からの深さ0.1mで、長さ9mを検出した。SD113は幅0.5~0.9m、検出面からの深さ0.1mで、途切れながら南北に続く。延長11.5mを検出した。埋土から奈良時代中頃の土器が出土した。

SD119 第431-4次発掘区中央で検出した南北溝である。幅0.4~0.8m、検出面からの深さ0.3m。途切れながら南北に続く、北は発掘区の北半で終わる。南端は発掘区南辺で東西溝SD120に直交する。延長約23mを検出した。溝心の国上座標値はX = -145,849.00、Y = -19,694.75である。宅地内の東西1/4の位置にはほぼ合致する。埋土から奈良時代後半の上器が出土した。

SD120・SD121 ともに幅1m、検出面からの深さ0.2~0.4mの東西溝である。SD121は、途切れながらSD119の東に続く。延長27mを検出した。宅地内の南北1/4の位置にはほぼ合致する。

SD122 SD119の西約3mに平行する幅0.6mの溝。埋土から奈良時代末頃の土器が出土した。

SX808 第431-3次発掘区SB383の南西隅柱に重複した位置で検出した土坑である。平面一辺1.1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ0.9mと深い。擂鉢状に掘り込まれることから、おそらく壺を埋置したものであろう。重複関係からSB383よりも古い。

SX809~813 SR380の建物内部で検出した、約0.9m間隔で並ぶ埋壺土坑である。一辺0.6~0.9mの平面隅丸方形を呈する。擂鉢状に掘り込まれており、検出面からの深さ0.2~0.4mである。

SX814 南北0.6m、東西0.5mの平面隅丸方形の上器埋納土坑である。検出面からの深さ0.4m。土坑の中央に須恵器壺Hを据える。地鎮のための埋納であろう。

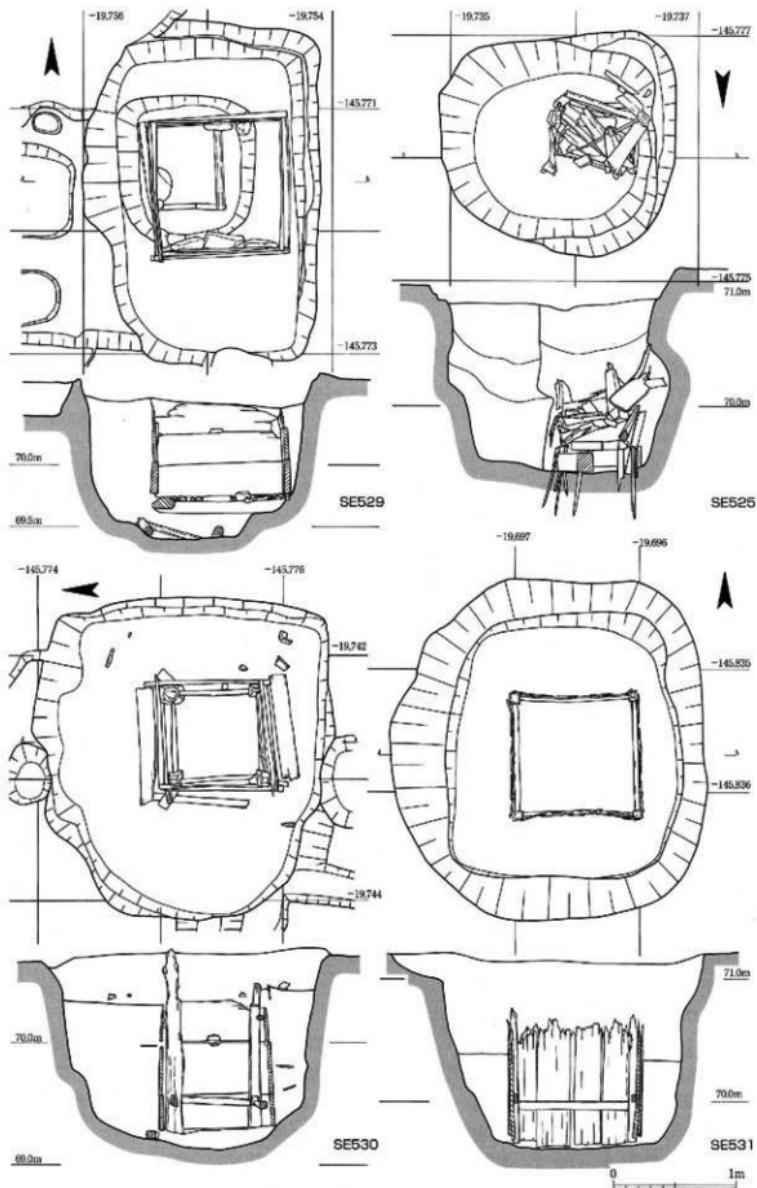
SK611 SE529に重複する位置で検出した東西3.5m、南北3.5m以上の平面不整形な土坑である。発掘区外北に続く。検出面からの深さ約0.3mである。奈良時代の土器が多く含む。重複関係からSE529より古い。

SK612~616 長辺2.5~4m、短辺0.9mの平面隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さはいずれも0.3m程度である。埋土は茶褐色粘土であり、いずれにも炭の碎片が含まれる。

SK617 SE525と重複する位置で検出した平面不整形な土坑である。東西7m、南北2.5mで、検出面からの深さ0.3mである。SE525より新しい。

SK618 第431-4次発掘区の南端で検出した平面不整形な土坑である。東西4.3m。南は発掘区外に続く。南北1.5m分を検出した。検出面からの深さ約0.6m。重複関係からSA420より古い。

SK619 同じく第431-4次発掘区の南辺で検出した平面不整形な土坑である。南北2.5m、東西1.8mで、検出面からの深さ約0.5mである。



井戸の平面及び断面図 1/40

奈良・平安時代の井戸一覧

遺構番号	概形(単位m)			井戸枠(単位m)			主要な出土遺物及び特記事項
	平面形	幅員	深さ	形態・底地	内法	底部施設	
SE522	隅丸方形 南北2.0	東西2.1	1.8	木材抜取			素出、須恵器、土器
SE523	隅丸方形 南北2.1	東西2.1	1.8	木材抜取、敷下板方形底板枠付の み残存	0.9×0.8		軒瓦6663A・6691B、墨書き
SE524	隅丸方形 南北2.1	東西2.4	1.85	抜取(方形底板枠か、木材跡あり)	0.9×0.9		墨書き、墨書き、ニチュア土器、縞模土器、製塗土器
SE525	隅丸方形 南北2.1	東西1.9	1.7	抜取(方形底板枠脚井機械室)		方形底板枠1枚	素出、曲物、墨書き、製塗土器、瓦、土馬、 土器
SE526	隅丸方形 南北2.4	東西2.2	1.8	木材抜取			板瓦上器、板瓦
SE527	隅丸方形 南北2.6	東西2.6	1.85	木材抜取			横削、製塗土器、ニチュア土器、墨、刻划上器、土馬
SE528	隅丸方形 南北2.8	東西1.8	1.3	木材抜取			木質、人形、軒瓦6732C、製塗土器、縞模陶器
SE529	隅丸長方形	東西1.7 南北2.8	1.3	古 新 方形容板枠(3段枠)、 南側板「南」書き有り	0.6×0.6 1.0×1.0 木、木敷		古事、墨書き、曲物、須恵、刻印瓦「日」文、墨 書き、墨書き上器、製塗土器、縞模陶器、須恵、 「解説四合付鏡、水晶スクリバー」
SE530	隅丸方形 南北2.4	東西2.6	1.6	方形底板枠脚井機械室(3段枠)、 敷下板方形底板有り(通り若ん か)	0.8×0.85		軒瓦6664A・6763B、墨書き上器、根付土器、 製塗土器、ニチュア土器、墨、須恵、円筒埴輪、 瓦片
SE531	隅丸方形 南北2.7	東西2.5	1.58	方形底板枠脚井機械室	0.9×0.9	無数	素出、曲物、斧柄、檢皮、墨書き土器、製塗土器、 ニチュア土器、墨

SK620 SD121の北側で検出した南北4m、東西3mの平面不整形な土坑である。検出面からの深さ0.2m。重複関係からSD121より新しい。

SK621 SD119の北側で検出した南北2m、東西1.3mの平面隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さ0.3m。重複関係からSD119より古い。

平安時代後半以降の遺構

SB376 第431-3次発掘区の中央で検出した東西方向の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間で、西から1間目に間仕切りを設けている。柱間の寸法は、桁行が2.1m(7尺)等間、梁間が2.0m等間である。柱穴埋土から11世紀前半の土器が出土した。

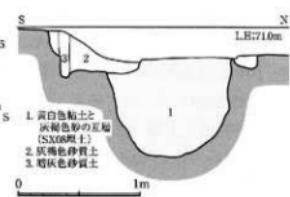
SD114~117 第431-3次発掘区東辺で検出した南北溝である。国字方眼方位に対して北で東に約3°振れる。溝はそれぞれ3m(心々間距離)の間隔で平行し、それぞれ南端で後述するSD118とつながる。このうちもっとも西側の溝SD114は、宅地遺存地割の東西1/4の位置にほぼ合致する。いずれも幅0.5~0.6m、検出面からの深さ0.1~0.2mの溝である。埋土はいずれも暗褐色粘質土で、11世紀前半の土器が出土した。

SD118 幅0.5~0.6m、検出面からの深さ0.1~0.2mの東西溝である。溝埋土は、暗褐色粘質土である。宅地遺存地割の南北1/4の位置にほぼ合致する溝であり、この溝と直交してSD114~117が北流する。ともに、平城京廃都後の周辺の耕地開発に関わり、開削された溝であると考える。

SK622~631 第431-4次発掘区の北部で検出した平面隅丸長方形の土坑である。概ね長辺1.6~1.8m、短辺1.0~1.2mで、検出面からの深さ0.8mである。埋土はいずれも暗灰色砂質土で、瓦質土器などが出土するが、詳細な時期は不明である。
(立石堅志・久保清子)



SX814全景（西から）、平面及び断面図 1/20



SX808断面図 1/20



上：SE529井戸枠（南から）、下：同底面（東から）



SE531全景（南から）

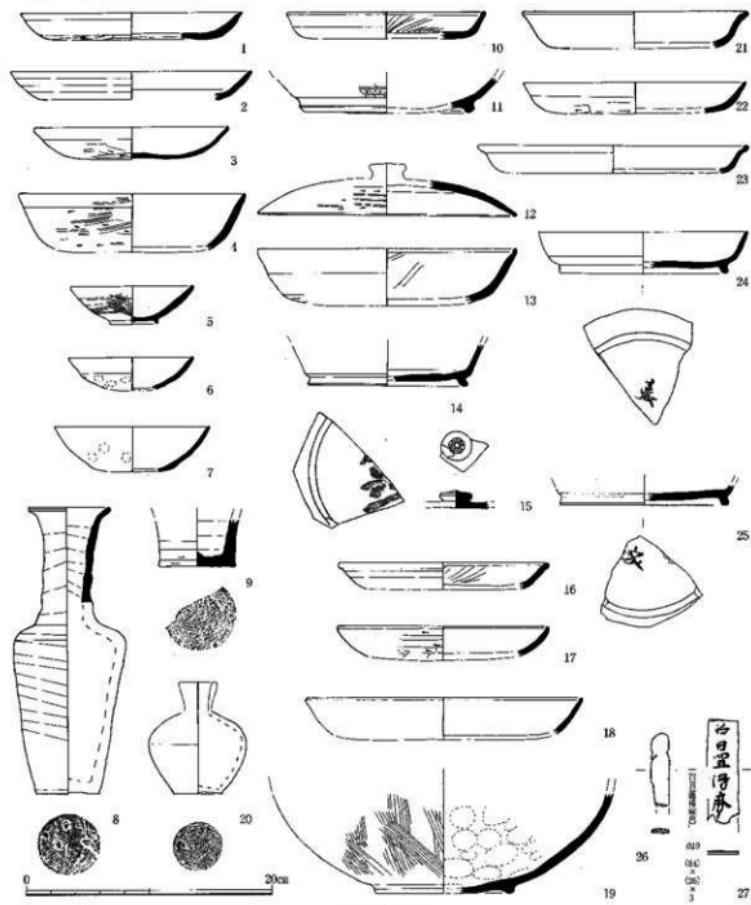


上：SE530全景（北西から）、下：同下部構造（西から）

III 出土遺物

瓦壇が遺物整理箱45箱、土器が82箱のほか、木製品、銭貨がある。SE529出土土器（1～9は枠内、10～14は掘形内）は、土師器皿A（1・2・10）・杯A（3・4）・高台付椀（5）・椀A（6・7）、須恵器壺G（8・9）、杯A（13）、杯B（11・14）、蓋（12）であり、14の底部外面に墨書きがある。SE530出土土器（15～20・25は枠内、21～23は掘形内）は、土師器皿A（16・22・23）・杯A（17・18・21）・高台付壺（19）、須恵器壺M（20）・蓋（15）・杯B（25）があり、15の頂部外面に花を描いたとみられる模画が、25の底部外面には「家」と考えられる墨書きがある。また、SE524出土の須恵器杯B（24）の底部外面の墨書きは「主帳」と判読できる。26は人形、27の木簡の訣文は「召日置得麻呂」である。いずれもSE528から出土した。

(久保清子)



出土遺物 1/4

2. JR奈良駅周辺地区画整理事業に係る発掘調査

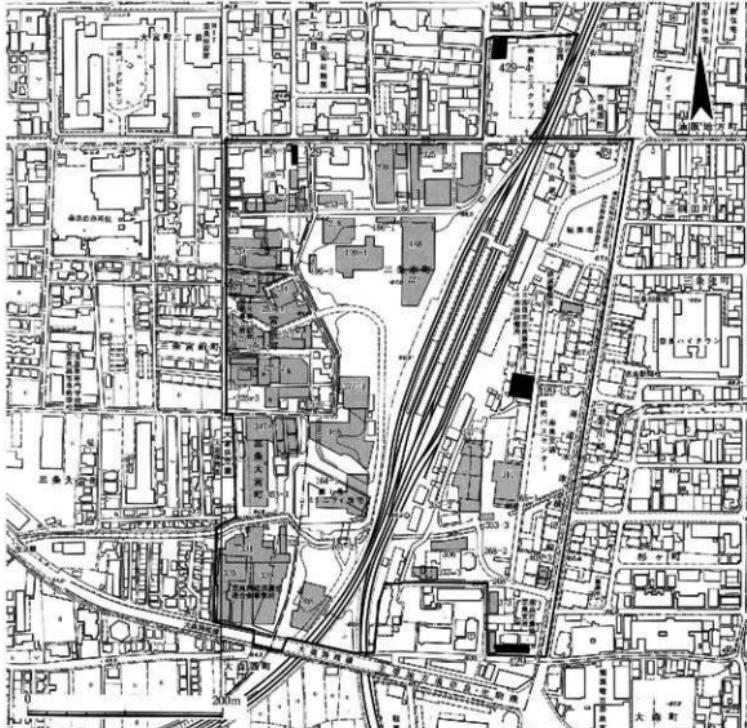
奈良市教育委員会では、奈良市が進めるJR奈良駅周辺地区土地地区画整理事業に伴い、昭和63年度から継続して事業地内の発掘調査を実施している。

平成11年度は、臨時交付金事業として平城京左京四条四坊十六坪・外京の左京三条五坊五坪・同四条五坊五坪・同四条五坊七坪で各1箇所の計4箇所、合計1,100m²の調査をおこなった。事業当初から平成11年度までの総発掘面積は39,198m²である。

なお、本文中の遺構番号は、事業地内で坪ごとに付けている通し番号である。

平成11年度 JR奈良駅周辺地区画整理事業地内発掘調査一覧

調査次数	事業名	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
429-1	臨時交付金事業	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町1	H11. 6.28~ 7.14	100m ²	久保邦
429-2	臨時交付金事業	三条遺跡・平城京左京四条五坊五坪	三条本町376-6, 377-1	H11. 8.17~ 9.30	255m ²	久保邦
429-3	臨時交付金事業	平城京左京四条五坊七坪	三条本町4-10、ほか	H11.11. 8~12.27	485m ²	久保邦
429-4	臨時交付金事業	平城京左京三条五坊五坪	大宮町1丁目26-3の一部	H11.11.22~12.28	260m ²	安井



JR奈良駅周辺地区画整理事業地内発掘調査位置図 1/5,000

(1) 三条遺跡・平城京左京四条五坊五坪の調査 第429-2次

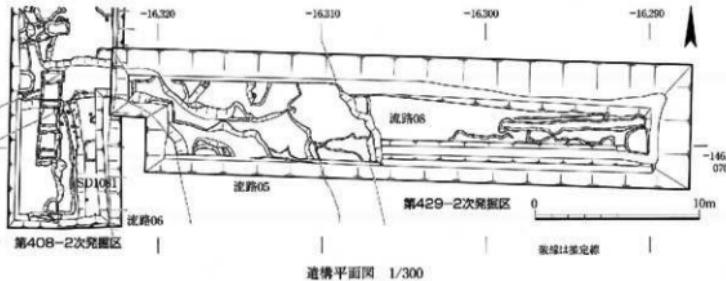
調査地は、左京四条五条五坪の南辺中央やや西寄りに位置している。同坪内ではこれまでに5箇所の調査を行っている（第268-2・-3次、第373次、第408-2・-3次調査）。

西隣接地では、第408-2次調査（平成10年度）を実施しており、四・五坪坪境小路西側溝SD1081、弥生時代後期～古墳時代初頭の自然流路05、奈良時代以降の自然流路06、中近世の粘土を採掘したと考えられる上坑を確認している。今回の調査では、同じく坪境小路、同西側溝SD1081の東岸、同東側溝の確認を目的として発掘区を設定した。

基本層序は、上から、造成土（0.8～1.2m）、暗灰色土の耕土（0.2～0.4m）、茶褐色土と灰色土の床土（0.2m）、灰色粗砂から中粒砂（流路06の埋土、0.1～0.4m）、灰色砂混じりの茶灰褐色粘質土（整地土、0.4～0.2m）、黄褐色シルトの地山または流路の埋土上面である。黄褐色シルト上面の標高は、最も高い箇所で64.9m、発掘区東半の流路の埋土上面の標高は65.0mである。

検出した遺構は、弥生時代後期、弥生時代後期～古墳時代の自然流路各1条、奈良時代以降の自然流路1条・溝・粘土採掘坑である。以下、主な遺構について概要を報告する。

流路05は、発掘区西半で検出した弥生時代から古墳時代にかけての自然流路である。第408-2次調査発掘区から続く。流路底の傾斜から判断すると、南東から北西の方向に流れていたと思われる。流路06は、奈良時代以降の自然流路である。発掘区内では両岸とも確認できず、西岸は第408-2次調査発掘区との間に想定される、東岸は発掘区外さらに東に位置すると考えられる。流路08は、発掘区東半で検出した弥生時代後期の自然流路である。発掘区中央で西岸を確認した。東岸は発掘区外東であり、幅は不明である。埋土は灰色粗砂で、一部に灰色細砂から中粒砂、灰色粘土を挟み、互層となっている。



遺構平面図 1/300



発掘区西半（西から）



発掘区東半（西から）

出土遺物についてみると、土器は、弥生時代後期後半の土器、奈良時代の須恵器・土師器が遺物整理箱11箱分出土した。瓦は21点あるが、奈良時代の平瓦、丸瓦は6点のみで、ほかは中世以降あるいは時期不明の瓦である。石器は安山岩製スクレイバー1点と、剥片、碎片、その他をあわせて16点である。ここでは、流路08から出土した弥生土器と、奈良時代の墨書き土器について概要を報告する。

流路08から出土した弥生土器には、壺、壺、鉢、高杯、器台がある。

壺（1~11）は、破片を含め、最も出土量が多い器種である。口縁の形態は、外傾もしくは外反し、端部は丸いもの、面取りされた外傾面のあるものが多い。また、口縁部が内轉し、端部が直立した受け口状のものもある（1）。大半のものが口径10~20cmの範囲内におさまるが、口径8.6cmの小型のものもある（10）。外面は、タタキにより整形を行ったままのもの、ハケメ調整をしているもの、タタキによる整形後にハケメ調整しているものがある。口縁部はナデ調整によつて仕上げているものがほとんどである。肩部及び口縁部に櫛描波状紋がみられるものがある（3・8）。内面はハケメ調整がみられる。9は裾が広がる低い脚台が付いたものである。外面はタタキメ、内面はハケメ調整がみられる。底部は調整がなく、指頭圧痕が残存している。

壺（12~22）には、広口壺、二重口縁壺、長頸壺、細頸壺、短頸壺がある。そのうち、広口壺が最も多く、口縁部は外反または外傾し、口縁端部には沈線、模描紋、円形浮出紋等の装飾もみられる。18の直立する口縁部は、大型の二重口縁壺の可能性があり、二重口縁壺はこれを含めて6点出土している。19は長頸壺で体部上半に記号紋が施されている。21は体部の破片で、膨らみのある形態から細頸壺の可能性が高い。22は大型の広口壺である。体部の張りが強いが、それと比べて底部は極端に小さい。外面は強い縱方向のミガキで調整されており、明確に残っている。内面は口縁部が横方向のミガキで、それ以外はハケによって調整されている。

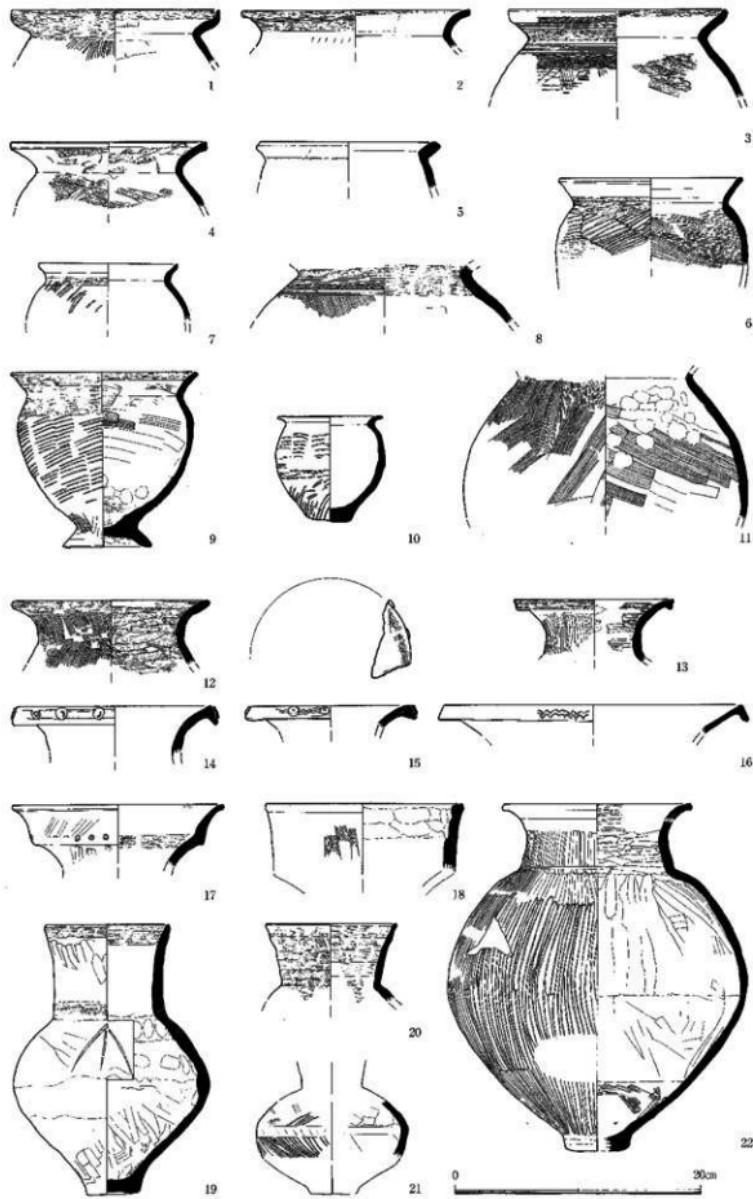
鉢（23~31）は、口縁部を調整していない粗雑なもの（23・24・26）と、タタキによって整形し、ハケ等により精緻に調整されたもの（28・29）とに分かれる。29の台付鉢の脚台は、高く、裾が広がらない。また、非常に丁寧に仕上げられており、先述の台付壺の脚台とはかなり様相を異にする。30の把手は、おそらく28のような外反口縁の台付鉢に付くものと考えられる。また、手づくねで無造作につくった脚台の付く底部（27）の破片が目立って多い。

高杯（32・33・35~37）は、杯部の口縁は外反するものが多いが、外傾するものや杯部が楕形になるとされる破片も若干出土している。脚部は裾が広がり、3または4箇所に円孔のあるものが多い。調整は杯部が内外面ともミガキ、脚部は外面がミガキで、内面はナデである。

器台（34・38）は、川土点数が少なく、確認できたものは破片を含め7点にすぎない。34は上部を欠いており、体部は細くくびれている。外面は体部を面取りするように整形し、裾部はミガキがみられる。内面の一部にはハケメがみられる。38は口縁部と脚端部を欠いている。外面の調整は縱方向のミガキで、体部3箇所に擬凹線が巡っている。また、3箇所に円孔を配している。内面はハケメ調整の後、一部にミガキを施している。

39は、体部の破片である。蔽部を欠いているが、体部の形態や紋様から判断して手焙形土器である可能性が高い。外面は斜め方向のハケメ調整の後、最も膨らみのある体部中央に2条の突帯を貼り付けており、突帯には刻み目を施紋している。さらに突帯下部には櫛描波状紋が巡っている。内面は斜め方向のハケメ調整である。

墨書き土器（40）は、須恵器の壺の破片で体部外面に「和銅二年」の墨書きがある。これは年号が書かれた墨書き土器としては、これまで知られている中で、おそらく最古のものと考えられる。判



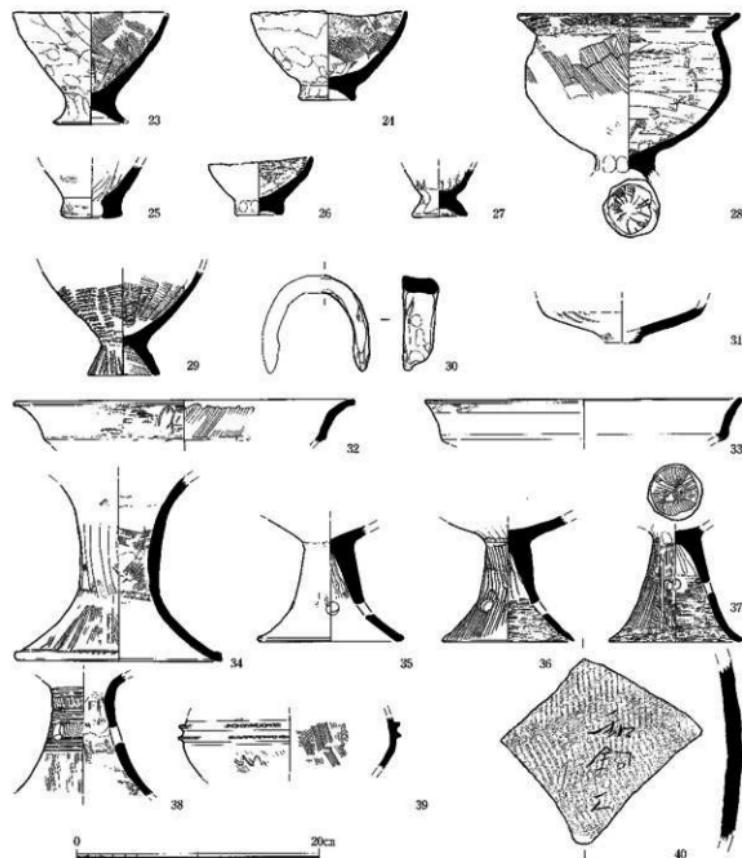
流路08出土土器 1/4

読困難な□部分が「三」であれば和銅三年（710年）となり、平城遷都の年を示している。整地層と考えられる茶灰褐色粘質土から出土した。

流路08から出土した弥生土器についてまとめる。技法には壺、甕、鉢に分割整形がみとめられる。器形の特徴としては、壺と甕の体部の張りが非常に強い。また、長頸壺や手焙形土器があることを考慮すると、出土した土器の一群は、弥生時代後期最終段階である大和VI-3・4様式の段階¹⁾に比定できる。また、出土した土器の特徴としては、甕や鉢に脚台が付くものがあることがあげられよう。出土した土器の特徴からみて、検出した自然流路08は弥生時代末期に埋没したと考えられる。

(久保邦江)

1) 藤田三郎・松本洋明「大和地域」「弥生土器の様式と編年・近畿編Ⅰ」木耳社、1989。



流路08出土土器及び墨書き土器 1/4

(2) 平城京左京四条四坊十六坪の調査 第429-1次

調査地は、左京四条四坊十六坪の北側中央部に位置する。同坪ではこれまでに主に中央から南北を11箇所発掘調査している。前年度までの成果によって、この坪における奈良時代の宅地利用の変遷が明らかになった。最初は、坪の中心部分に掘立柱塀を巡らせて方形区画が形成され、一坪利用であると考えられる。その後、東西方向の坪内道路を設け、南北に分割した1/2坪の宅地利用となっている。

今回の発掘区近隣の調査例としては、北西に隣接した場所で第408-1次北発掘区、少し離れた南側に同南発掘区がある（ともに平成10年度）。三条大路の関連遺構の検出が予測された北発掘区では、13世紀以降に粘土が採掘され、奈良時代の遺構面は破壊されていた。南発掘区では、奈良時代の整地土上面で重複する2時期の掘立柱建物を検出し、坪北半の宅地利用状況の一部が明らかになっている。

今回の調査は、第408-1次北発掘区で確認できなかった奈良時代の遺構の残存状況を把握すること目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土（0.5~0.8m）、暗灰色粘土（耕土0.2~0.3m）、灰褐色粘質土（0.1m）である。南半ではさらに淡灰褐色粘質土（整地土0.2~0.3m）があり、褐色粘質土もしくは黄褐色シルトが続く。北半では灰褐色粘質土上面が遺構面（標高63.3m）で、南半には整地土が広がる（標高63.2m）。整地土から奈良時代末~平安時代初頭の土器片が出土した。

検出した遺構は、奈良時代もしくは平安時代の掘立柱建物・土坑、時期不明の粘土採掘坑・溝である。

SB239・240は、発掘区南半、整地土上面で検出した掘立柱建物である。発掘区北半が粘土採掘坑で破壊されており、正確な規模を知ることができなかった。SB239は南北方向の柱列1間分、SB240は同じく2間分を検出した。いずれも柱間は2.4m（8尺）である。塀である可能性もある。柱穴から奈良時代末~平安時代初頭の土器片が出土した。

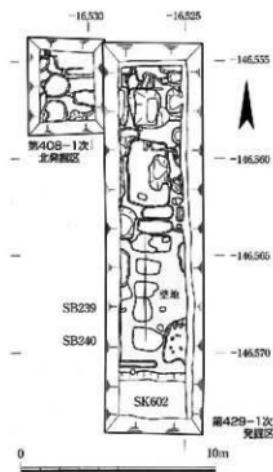
SK602は、発掘区南端で検出した土坑である。整地上上面から掘削されている。発掘区外に広がり、全体の規模は不明である。奈良時代末~平安時代初頭の土器が出土した。

発掘区北半では、奈良時代の遺構面が粘土採取のために掘削されており、想定される三条大路関連の遺構が検出できなかった。粘土採掘坑の埋土から土器が出土したが、いずれも小片で時期を特定できなかった。

調査の結果、発掘区北半については、第408-1次北発掘区と同様な状態であることがわかった。南半については、同南発掘区で検出した整地土がさらに北に広がり、奈良時代の遺構が存在することが確認できた。
（久保邦江）



発掘区全景（南から）



遺構平面図 1/250

(3) 平城京左京四条五坊七坪の調査 第429-3次

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条五坊七坪の南辺中央部に相当し、四条条間路北側溝が想定される位置である。この坪ではこれまで2箇所の調査を行っている。北辺中央部の坪境小路想定位置の調査は、湧水が著しく遺構を確認することができなかった（第71次・昭和59年度）。中央西寄りの調査では、時期不明の掘立柱建物・溝・溝状遺構、近世の埋甕を検出した（第377-5次・平成9年度）が、いずれの調査においても奈良時代の遺構を確認することができていない。今回の調査は、四条条間路と同坪内で確認できていない奈良時代の遺構の検出を目的に実施した。

発掘区内の層序は、南東隅では上から造成土（0.2～0.4m）、灰色粘質の耕土（0.2～0.4m）、暗灰色粘質土（0.1～0.3m）、青灰色粘質土（0.1～0.2m）と続き、黄褐色シルトになる。遺構は黄褐色シルト上面で検出した。遺構検出面の標高は65.2mである。

東南から北西に向かって深くなる谷地形を確認した。谷の底には灰色細砂・粗砂・砂礫の層が水性堆積しており、おそらく自然流路の堆積であると考えられる（自然流路01）。その上面の標高は64.2～64.7m、確認した範囲で最も深い部分の標高は63.4mである。東岸のみを確認しており、北東から南西の方向に斜行している。西岸は発掘区外西になり、川幅は不明である。流路底の傾斜から判断すると、北東から南西の方向に流れていると考えられる。出土遺物は、奈良時代の須恵器・土師器・瓦が多く、ほかに少量の古墳時代後半の土器と平安時代前半の土器がある。奈良・平安時代の遺物で特筆すべきものとしては緑釉陶器と、祭祀に使用したと考えられる人面墨書き土器、ミニチュア土器、土馬がある。

流路が埋まつた後、谷地形は人為的に埋め立てられたと考えられる。埋土の堆積は、大きく2層に分かれる。下層には10世紀前半の、上層には12世紀後半の遺物が含まれている。

検出した遺構は、平安時代以降の柱穴・溝、中世小溝がある。

柱穴と溝は、下層上面に掘り込まれている。柱穴については、まとまりを欠くが、掘立柱建物の柱穴であった可能性がある。

中世小溝は、上層上面に掘り込まれている。多くが重複しており、2時期以上あると考えられ、水田耕作に係わる鍬溝と考えられる。

溝については上層、下層とも北で東に振れており、自然流路01と同方向に振れている。自然流路01が埋没した後も、谷に制約された土地利用であったことがわかる。

今回の調査では、奈良時代の四条条間路を確認できなかった。しかし、奈良時代から平安時代は自然流路、10世紀以降は宅地利用、12世紀以降は水田耕作という土地利用の変化が明らかになった。

(久保邦江)



発掘区全景（南西から）



遺構平面図 1/400

(4) 平城京左京三条五坊五坪の調査 第429-4次

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条五坊五坪の北西部で、四・五坪坪境小路に面した地域にあたる。事前の試掘調査では、厚い砂層を確認し、河道の存在が推察された。このことをふまえ、本調査は奈良時代の旧地形の把握と土地利用の様相解明を目的として実施した。

発掘区内の土層は、大半の部分で造成土（厚さ約1m）、耕土及び灰色砂質シルトの床上（厚さ約0.2~0.3m）の下に河川成の葉理が発達した砂、さらに暗灰色シルトが続き、砂層上面から約1m下で青灰色シルトを主とする地山（標高64.4m）となる。ただし、発掘区の西辺南寄り10m分は、床土の下に後述する堤防遺構SX01があり、その下の地山はほかより約0.7m高くなっている。

遺構検出は砂層上面で行ない、奈良時代のものと思われる堤防遺構（SX01）、溝3条（SD02~05）、柱穴を確認した。このうち特筆すべきものには堤防遺構SX01がある。発掘区の西辺南寄りで、南北約10m分を確認した。厚さ0.1m程度の暗灰色や褐灰色のシルトブロックを積み上げて構築している。残存高は、地山上面の標高が高い部分では0.3~0.4m、一段低い部分では0.7mである。東据部分には護岸のしがらみがあり、径0.5~0.8m、長さ1m程度のカシ等の丸太材を1m前後の間隔で打込み、枝を渡している。しがらみの残存高は0.2~0.4mである。

出土遺物は、土器と木製品が遺物整理箱2箱分ある。土器は、砂、シルトの各層から奈良時代の土師器片が1点ずつ出土し、ほかに溝SD02~05から奈良時代の土師器片や須恵器片が出土した。木製品は、堤防遺構SX01沿いの砂層上位から篠木、曲物、編物等が出土した。

奈良時代には、調査地の東方に近接して河川があり、たびたび洪水が起こっていたと思われ、堤防遺構SX01を坪境小路東側溝に沿って構築し、それ以西の土地に洪水が及ぶのを防いだものと考えられる。

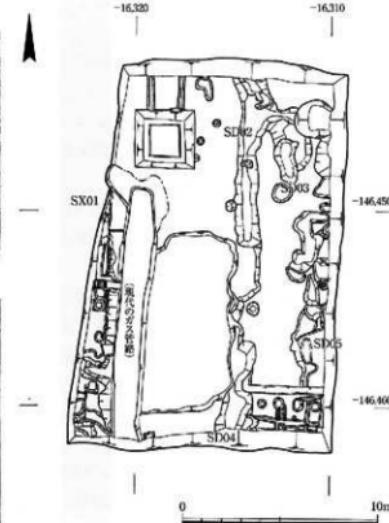
(安井宣也)



発掘区全景（南から）



堤防遺構SX01断面及びしがらみ（東から）



遺構平面図 1/250

3. 平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡の調査 第424次

事業名 (仮称) ならまち工芸工房建設事業
 届出者名 奈良市長
 調査次数 平城京 第424次
 調査地 奈良市阿字万字町1-1、ほか
 調査期間 平成11年5月6日～6月23日
 調査面積 238m²
 調査担当者 松浦五輪美・細川富貴子

調査の概要 調査地は、平城京条坊復原では、左京四条六坊十四坪の南端部にあたるが、十三・十四坪坪境小路の推定地は発掘区外となる。現在市道となっている大路推定地を挟んで東側は元興寺旧境内にあたり、この地域は中世・近世には奈良町として栄えた場所である。調査地は西に向かって下る傾斜地を宅地造成しているため、個々の敷地ごと石垣によって段々に区画されている。したがって、地下構造も造成による影響を受けていることが予想された。

発掘区内の基本層序は、約0.3mの造成土以下、茶灰色土を主体とする近代・現代の堆積層が0.3m前後、暗茶褐色土を主体とする近世の堆積層が0.4～0.6m堆積し、東部では疊混じりの橙灰色シルト（地山）となるが、西部はさらに灰茶色土を主体とする中世の堆積層が0.3～0.5m堆積している。遺構検出は橙灰色シルト上面で行い、その標高は81.4～82.4m、現地表面からの深さ



発掘区位置図 1/6,000



調査地全景（西から）

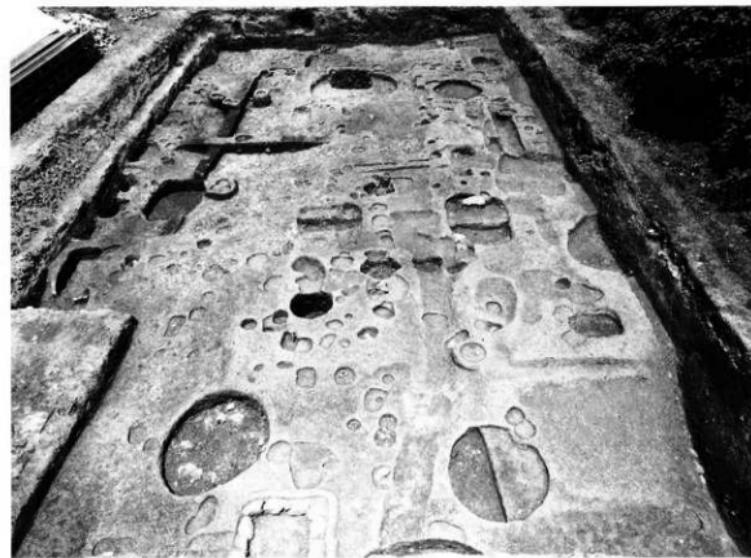
は東端で約0.8m、西端で約1.5mである。

検出した遺構のほとんどは溝と土坑である。土坑には井戸枠を抜き取ったと考えられる大型のものや、柱掘形と思われる小型のものがあり、発掘区内に古代から現代までの多数の掘形が認められた。以下、各時期ごとの主な遺構について述べる。

平安時代以前の遺構 SA01は、南北7間(16.7m)以上の掘立柱壠と考えられる。柱間は北から1.8、2.4、2.8、2.8、2.4、2.1、2.4mと不規則であるが、敷地を区画する施設として壠が建っていたと想定した。時期的には土坑SK05が埋められた直後のものと考えられる。

SD02は、発掘区東部中央に残る、長さ2.9m以上、幅0.6m、深さ約0.2mの南北溝で、南側は後世の遺構に破壊されている。8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。SD03は、発掘区中央部を貫く、長さ15.5m以上、最大幅2.0m、深さ約0.1mの南北溝であるが、傾斜面に遺存するため溝の西縁が削平された状態となっている。9世紀後半～末の土器が出土した。SD04は、南半中央部に位置し、長さ5.7m以上、幅0.6m、深さ約0.1mで、北で西へ直角に曲がるL字状の溝である。溝の両端部は後世の遺構によって壊されている。9世紀末～10世紀前半の土器が出土した。溝SD02～04の性格については不明であるが、SD03に関しては、土地を区画した際の造成に伴って掘り込まれたものとも考えられ、発掘区外の南北にも延びていた可能性が高い。おそらく西側を段状に削り出すのを主な目的とした、斜面に平坦部を造り出すための掘り込みと思われる。

SK05は、発掘区西半に広がる南北約9.5m、東西約4.5mの平面長方形状の土坑。深さは約0.3mで、炭が多量に混じる黒灰色土で埋めた後、おそらく地山を削ったと思われる黄灰色土で土坑の上面を覆っている。南に並ぶSK06も同じ性格の土坑と思われ、規模も同じであったと考えられる。两者とも10世紀後半～11世紀初頭の遺物が含まれており、SK05からは乾元大寶(958年初鑄)



発掘区全景（南から）

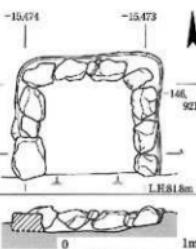
が出土した。SK05の埋土の堆積状況をみると、同一の土で埋めた後、上面を整地した状況が認められ、この土坑が廃棄物や灰燼処理のために掘られて使用され、すぐに原状に復旧された可能性が高いものと思われる。北東隅で検出したSK07は、南北1.3m、東西0.9mの平面隅丸方形で、深さ0.3mの土坑。その南のSK08は、東辺が発掘区外に広がるが、SK07とはほぼ同規模と思われる土坑。共に11世紀末～12世紀前半の土器が出土した。また、これらの土坑のある北東部には同時期の遺物を含む不定形な掘形が集中している。

鎌倉・室町時代の遺構 南東隅のSK09は、平面円形もしくは楕円形の土坑と考えられるが、発掘区内では掘形の北西部を南北3.3m、東西0.7m分検出した。深さ0.9m以上。12世紀後半～13世紀にかけての土器が出土した。その西のSK10は、直径約1.4mの平面円形で、深さ0.5mの土坑。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平な面となっており、全体の形状は円筒形を呈する。埋土には13世紀前半の瓦器が含まれるが個体数は少なく、ほとんど遺物は含まれない。深さから井戸掘形とは考えられず、おそらく大型の桶のようなものを据え付けた掘形で、抜き取り後に一度に埋められたものと考えられる。東壁にかかるSK11は、南北径2.1m、東西径1.0m以上で、平面円形と考えられる土坑。西半部のみ検出しており、深さ0.4m以上。13世紀後半の土器が出土した。北西隅のSK12は、南北径約3.6m、東西径約2.2mの平面楕円形で、深さ約0.4mの土坑。南に開口するような掘形で、土坑の最深部は北へ偏っている。15世紀の土器が出土した。南西隅のSK13は、南北1.3m、東西0.7mの平面長方形で、深さ約0.35mの土坑。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、箱状を呈する。15世紀～16世紀の土器が出土した。

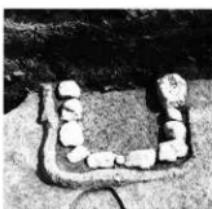
SX14は、発掘区中央部で検出した南北11.0m以上にわたる掘り込みである。斜面に平坦部を作り出すことを目的とした削平部の東端ラインが残存したものと考えられる。SD03とはほぼ同位置にあり、同様に土地の区画・造成に伴うものと考えられる。西側は地山の傾斜に合わせて整えられたものと思われ、SD03のように溝状の掘形としては認識できなかった。埋土には10世紀～15世紀の土器が含まれる。南壁にかかるSX15は、南北1.0m以上、東西1.2mの平面方形の掘形の壁面に沿って、人頭大の石を並べた石組遺構。発掘区内では北半部を検出したものと考えられ、全体では口字状に石が組まれていたと考えられる。発掘区南壁の観察によると、石を据えた際の掘形と別に、時期が降ってから内部が掘り込まれた様子が窺えるため、当初の石組はさらに上に2段以上積み上げられていた可能性が高く、後に上部の石は抜き取られたものと考えられる。したがって、抜き取り穴の掘り込み面の高さからすると、本来は深さ0.6m以上であったものと推定される。この形態の石組遺構は、奈良町地域の調査でいくつか検出された例があるが、その性格は不明である。水が溜められていた形跡はなく、本来石が積み上げられて



SK05全景（南から）



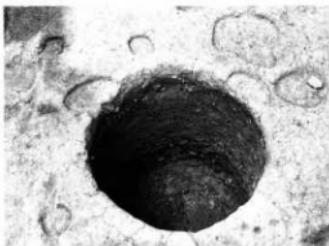
SX15平面及び立面図 1/40



SX15全景（北から）



SE16全景（西から）



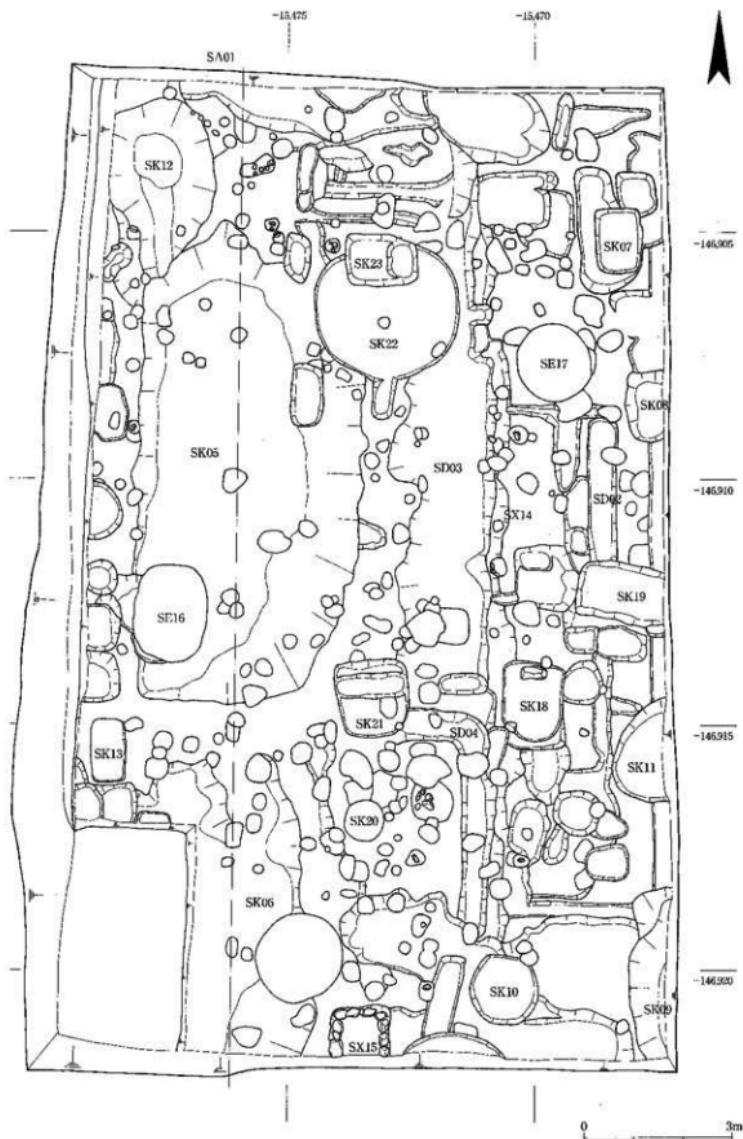
SE17全景（南から）

いたものだとすると、地下収納庫のような施設であった可能性も考えられる。

江戸時代以降の遺構 発掘区西部で検出したSE16は、南北径2.0m、東西径1.5mの平面楕円形の掘形で、深さ2.6m以上の井戸。井戸枠は抜き取られたものと思われる。壁面が袋状に抉れており崩落の危険があったため、底面は確認できなかった。埋土の上部では壁面との間に空隙が残っており、一度に埋められた上が沈み込んだ状態が認められた。17世紀前半の土器とともに、荷札木簡が出土した。また下駄14個体を含む多量の木製品も出土した。北東部で検出したSE17は、直径約1.5mの平面円形で、深さ約2.0mの掘形であり、壁面がほぼ垂直に立ち上がる円筒形を呈するところから井戸と考えておきたい。現状ではほとんど湧水せず、井戸枠や石組の痕跡もみ認められない。18世紀前半～中頃の土器と共に巴紋の軒丸瓦、木製品、金属製品が出土した。

南半東部のSK18は、平面がほぼ方形で、南北1.6m、東西1.2m、深さ約0.4mの土坑。北端で長さ約0.5m、幅約0.25m、厚さ約0.3mの大型の石を検出したが、底面に置かれた状態ではなく性格は不明である。16世紀末の土器が出土した。東端中央のSK19は、南北約1.2m、東西1.8m以上、深さ約0.25mで、発掘区外東へ広がる平面長方形の土坑。方形を呈する土坑の中で唯一主軸が正方位に対して振れている。17世紀前半の土器が出土した。南半中央のSK20は、直径約0.8mの平面円形で、深さ2.15mの土坑。井戸掘形の可能性も考えられるが、径が狭く、井戸枠が組まれたとするとこの土坑より上の部分であろう。湧水層を求めて試掘されたものかもしれないが、現状では湧水しない。17世紀の土器と共に奈良時代の軒丸瓦が出土した。その北のSK21は、一辺約1.5mの平面ほぼ正方形で、深さ約1.0mの土坑。SK18と東西に並ぶが、出土土器は17世紀以降のもので、時期が異なると考えられる。北半中央のSK22は、平面円形で、直径約2.9m、深さ約0.25mの土坑。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平に敷えられた定形的な土坑であり、何らかの施設を構築した際の掘形と考えられる。最終的には廐棄物処理に利用されたらしく、埋土には18世紀前半～中頃の土器、陶磁器が多く含まれていた。SK23は、SK22と重複する南北約1.0m、東西約1.5mの平面長方形で、深さ約1.0mの土坑。東半はさらに一段深く掘り込まれ、最深部で深さ1.2mである。内部はほとんど貝殻（大半がアサリ）で埋められており、貝殻を処分するために掘られた土坑と思われる。18世紀中頃～後半の土器が混じる。

今回の調査区では、奈良町においては検出例の少ない平安時代以前の遺構がいくつか確認できた。検出した遺構の状況からみると、当時から南北方向に長い宅地割りが行われていたことが推定され、その宅地境界はSD03とSX14のように中世においても踏襲されていた部分があるようである。しかし江戸時代になるとこの境界がなくなっているように見受けられる。ただし、今回明瞭な建物跡は確認できず、詳細な宅地利用の変遷を知るまでには至らなかった。（松浦五輪美）



遺構平面図 1/100

出土遺物 出土遺物には瓦、土器、木簡、木製品、金属製品、錢貨がある。弥生時代、奈良時代～江戸時代のうち、鎌倉～江戸時代の遺物が多い。奈良～平安時代の土器は遺物整理箱で15箱分、鎌倉～江戸時代の土器は42箱分、瓦は78箱分出土した。

奈良～平安時代の土器 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器がある。

SD02出土土器には、土師器杯A(1・2)・杯B(7)・杯C(3)・杯E(6)・椀C(4・5)・高杯(8・9)、須恵器蓋・壺がある。器面が剥離して調整不明のものが多いが、土師器杯A(2)の口縁部外面にはケズリとミガキがわずかに残る。8世紀末～9世紀初頭である。

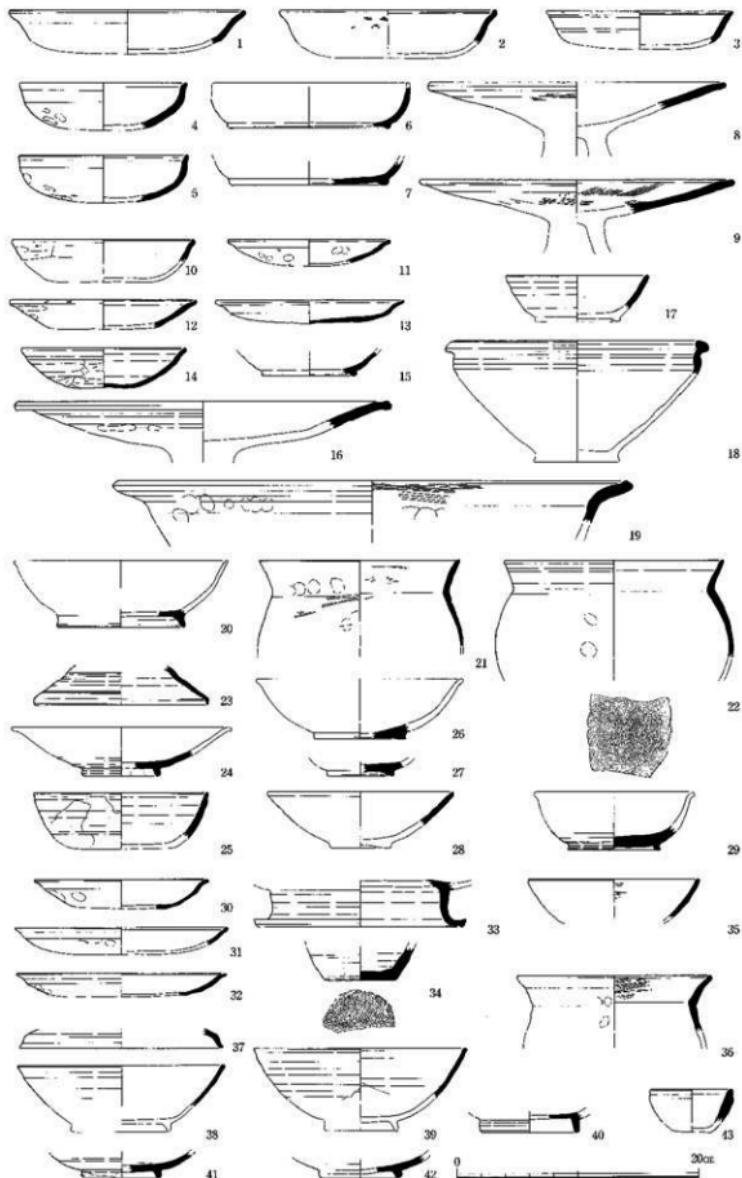
SD03出土土器には、土師器杯A(10～12)・杯B(15)・皿A(13)・椀A(14)・高杯(16)・鍋(19)・壺、須恵器杯B(17)・鉢D(18)・鉢A・壺・壺、黒色土器A類碗(20・21)・壺(22)、灰釉陶器の蓋(23)・椀(24・25)、綠釉陶器椀(26・27・29)、青磁椀(28)がある。土師器杯・皿・椀の体部外面は、ケズリで調整されているが、ユビオサエも残る。口縁部上半は強いヨコナデによりやや外反気味に開く。灰釉陶器椀(24)の底部内面には重ね焼き痕が残り、中央部分は無釉である。綠釉陶器椀の釉は内外面に塗られているが、塗り方が均質でなく、濃淡がみられる。青磁椀(28)は、9世紀の越州窯産である。9世紀後半～末頃である。

SD04出土土器には、土師器杯A(30)・皿A(31・32)・高台付杯か皿(33)・壺、須恵器蓋(34)・杯・皿・壺、黒色土器A類碗(35)・壺(36)・鉢(43)、灰釉陶器蓋(37)・椀(38～42)・壺がある。土師器杯・皿の調整は、口縁部上半はヨコナデ、下半から底部にはユビオサエが残るものが多く、ケズリが見られるものは少ない。黒色土器(43)は内外面とも黒色化しているが、ミガキが残っていないのでA類かB類が不明である。灰釉陶器椀の口縁部下半と底部内外面は無釉のものが多い。底部内面に重ね焼き痕が残るものもある。9世紀末～10世紀前半である。

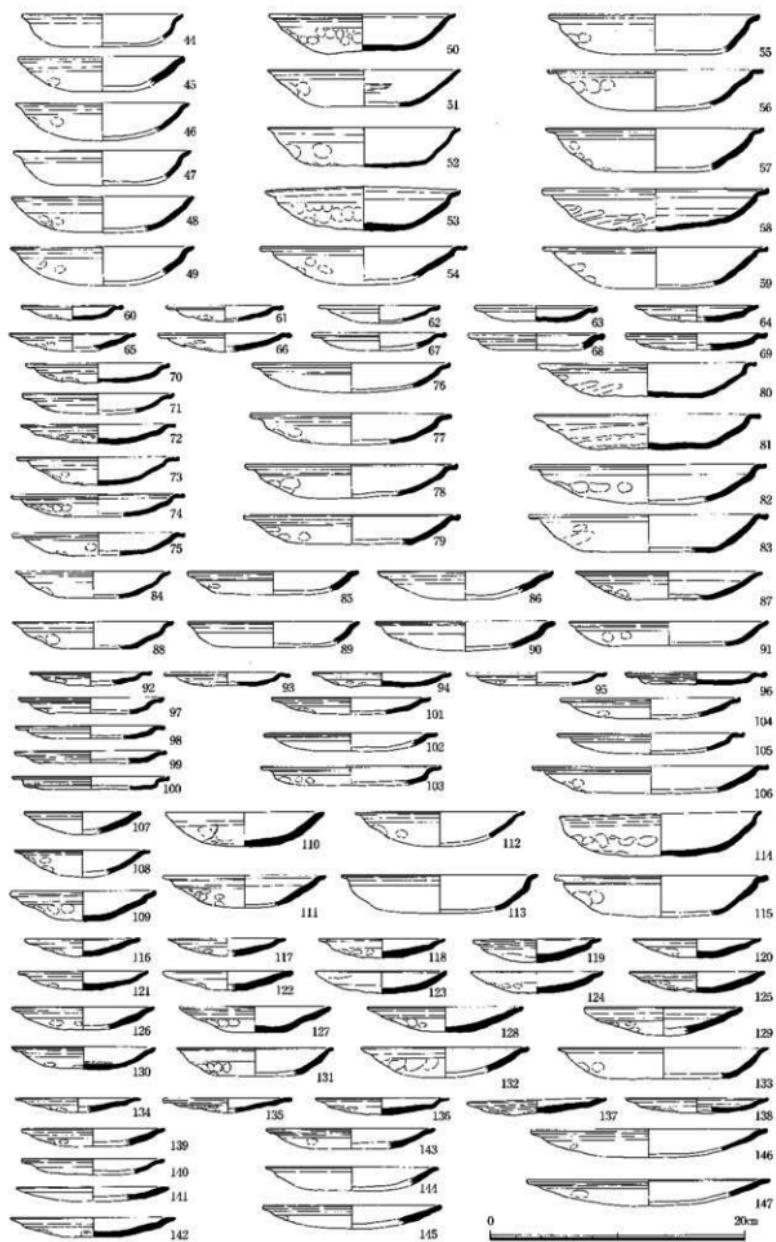
SK05出土土器には、土師器杯・皿(44～147)・壺(148～150)、須恵器鉢D(181)・杯・皿・壺・蓋、黒色土器A類碗(151～156)・壺(160)、B類碗(157・158)・皿(159)、白色土器椀(161・162・164)・皿(163)・高杯(179・180)、綠釉陶器椀(165～168・170・171)・輪花椀(169)・皿(172・173)・輪花皿(174)・壺(175)・花瓶(176)、灰釉陶器皿(177)・花瓶(178)がある。土師器杯・皿は、器壁の厚さから、①底部、体部、口縁部の厚さがほぼ一定なもの(44～106)と、②底部が厚く、体部から口縁部にかけて極端に薄くなる、または全体の厚さが一定でないもの(107～147)に分類することができる。また、別に径高指数(器高/口径×100)の分布などから深い杯(44～59・107～115)、浅い杯(60～91・116～133)、皿(92～106・134～147)の3つに分けた。調整手法は、すべてヨコナデとユビオサエである。土師器は杯や皿の高台も出土しているが、底部外面の剥離した跡と接合するものはなかった。白色土器椀・皿は、削り出し高台で、京都市幡枝窯産である。都城遺跡以外では出土例が少ない。綠釉陶器椀・皿は、口縁部内外面と底部内面にはやや厚めに濃緑色で施釉するが、底部外面は薄い。体部外面にミガキはなく、底部外面には糸切り痕跡がある。形態などからみて近江窯か美濃窯である。灰釉陶器は綠釉陶器に比べて出土量が少ない。SK05出土土器は、崇福寺西僧坊床面出土土器¹⁾と形態が似ているが、土師器杯・皿の法量がやや小さい点から、やや新しくみて、10世紀後半～11世紀初頭のものと考える。ただし、綠釉陶器輪花皿(174)は、形態的に9世紀半ば頃の製作である。

(細川富貴子)

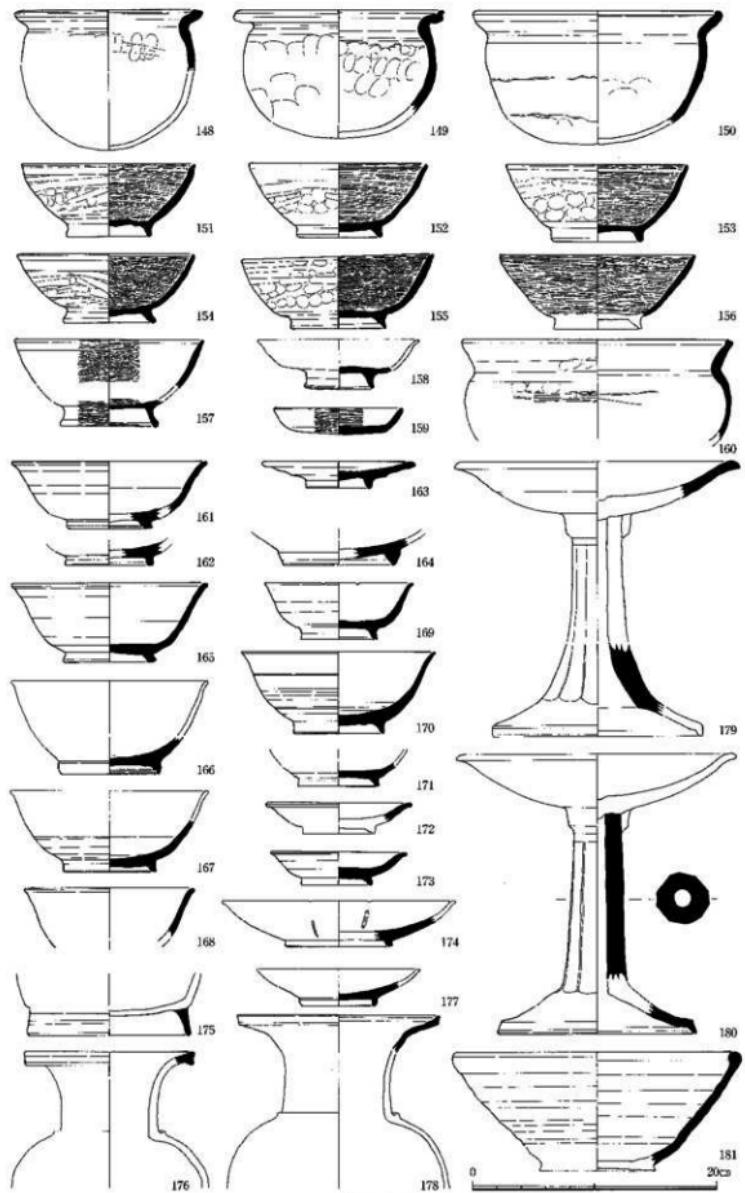
1) 奈良国立文化財研究所『崇福寺発掘調査報告』1987



SK02~04出土土器 1/4



SK05出土上器(1) 1/4



SK05出土土器(2) 1/4

平安時代末～江戸時代の土器 11世紀末から13世紀前半、13世紀後半、15世紀、16世紀後半から17世紀前半、18世紀前半の各時期の遺物が多くみられる。ここではその中でも江戸時代以降のSE16・SE17出土土器について述べることにする。

SE16出土土器 (182～222) には、土師器皿・釜・焼塙壺蓋・瓦質土器擂鉢・捏鉢・深鉢・浅鉢・風炉・瓦燈蓋・蓋・壺、国産陶器椀・皿・鉢・盤・泥塔などがある。出土数の内訳は、左表に記したとおりである。182～201は土師器皿。底部から口縁部の立ち上がりが強く屈曲し、内底面と口縁部を分割してなで、口縁部のなでを右上がりになで抜くもの(a類: 188～190、195～201)と、底部から口縁部の立ち上がりが丸みを帯び、底面と口縁を分割せずになで抜くもの(b類: 182～187、191～194)がある。ともに口径に大小がある。また、土師器皿のほとんどは、口縁部に煤が付着し、灯明皿としての使用が窺える。188・189は内面にハケメ調整痕が残る。201は、内外面に墨書きによる区画線が引かれ、特に内面は2本線により4分割される。216は、大和I型²²の釜である。輸入磁器の中では中国製染付椀が多い。205は杯、206・207は椀。国産陶器には、肥前系の唐津窯の製品が多くみられる。209～213・217は唐津窯製品。209は灰釉碗で、高台疊付け部分を、使用前に砥石で極めて平滑にならす。砂目積み。210・211は灰釉折縁皿。胎土目積み。212は刷毛目椀。白泥を体部に塗布し、これを篠状のものにより掻き取り、ハケメ状とする。胎土目積み。213は灰釉漬掛けの碗。漆を練る器として利用されたもので、内面に漆が付着している。217は灰釉鉢。胎土目積み。202・203・208は瀬戸美濃系窯の製品。202は灰釉折縁皿。203は天目茶碗。登窯I期²³に当たる。208は、志野向付。215は京窯の壺。胎土軟質で、赤褐色を呈する。鉄絵が一部残る。219は丹波窯擂鉢。5本単位の櫛目による擂目がある。220・221は備前窯の製品。220は擂鉢。5本単位の櫛目による擂目がある。221は大甕。214は瓦質土器香炉。体部外面に梅花紋の単体スタンプを施す。218は瓦質土器深鉢。体部外面に1条の波状紋を巡らす。222は泥塔。多宝塔を型押しした後、舟形に面取りする。成形後焼成される。これらの土器は一部の輸入磁器を除き、概ね17世紀前半頃の時期を考えてよかろう。

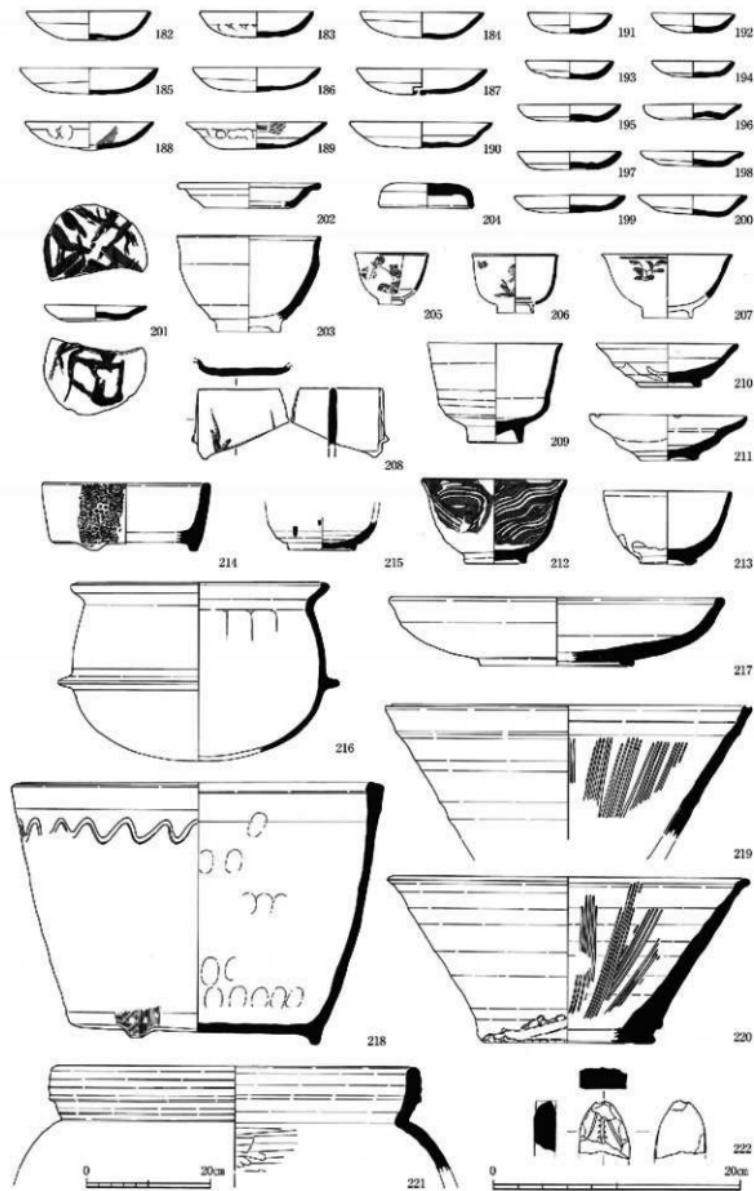
22) 菅原正明「畿内における土器の製作と流通」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所、1983。

23) 井上喜久男「尾張陶窯(一)江戸中期の瀬戸物概年一」「愛知県考古資料集「科銘記要」14、愛知県考古資料館、1994。

SE16出土土器組成表及びグラフ

種類	地図	器種	出土件数		出土率(%)
			a類	b類	
土 師 器		皿	448	25.6	
		蓋	34	5.4	
		鉢	349	20.1	
		焼塙壺蓋	3	0.1	
		合計	177	10.2	
瓦 質 土 器		小計	693	36.1	
		蓋	78	4.5	
		鉢	10	0.5	
		碗	112	6.4	
		深鉢	10	0.5	
		方形容縁	13	0.7	
		底洗不明	277	16.0	
		蓋	47	2.7	
		泥塔	3	0.1	
		蓋	3	0.1	
國 產 陶 器		瓦質器皿	5	0.2	
		器種不明	8	0.4	
		小計	566	32.5	
		碗	161	9.3	
		皿	26	1.5	
		大皿	16	0.9	
		鉢	4	0.2	
		蓋・壺	2	0.1	
		小計	209	12.0	
		碗	9	0.5	
國 產 陶 器		皿	2	0.1	
		大皿	8	0.4	
		鉢	2	0.1	
		向付	2	0.1	
		蓋・壺	4	0.2	
		小計	27	1.5	
		盃・奥	42	2.4	
		擂鉢	25	1.5	
		小計	68	3.8	
		盃・奥	210	12.1	
國 產 陶 器		擂鉢	1	0.05	
		小計	211	12.2	
		蓋	5	0.3	
		壺	1	0.05	
		碗	1	0.05	
		鉢	1	0.05	
		小計	523	30.3	
		碗	7	0.4	
		皿	2	0.1	
		鉢	6	0.3	
輸 入 磁 器		小計	15	0.8	
		皿	1	0.05	
		小計	16	0.9	
		合計	1728	100	





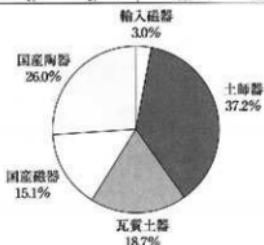
SE16出土土器 1/4 (221は1/8)

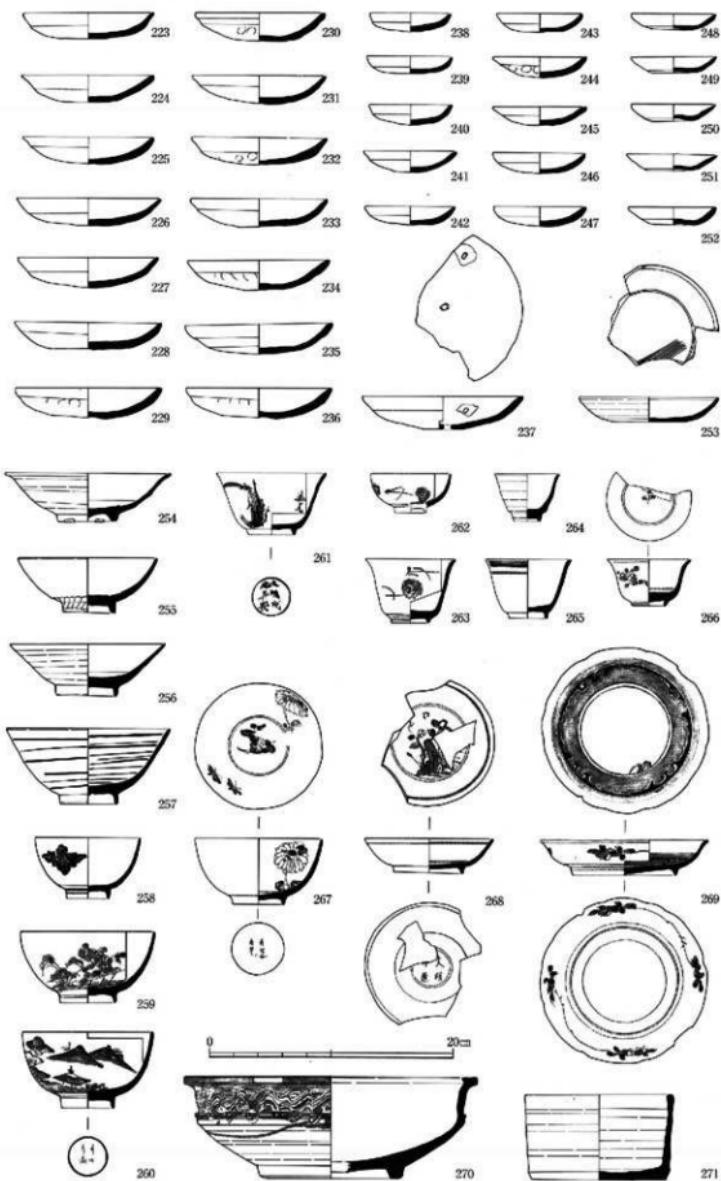
SE17出土土器（223～277）には、土師器皿・炮烙・焼塩壺・瓦質土器深鉢・浅鉢・風炉、国産陶器碗・皿・鉢・擂鉢・鍋・壺・甕、国産磁器碗・皿・壺・輸入磁器染付碗・皿などがある。出土数の内訳は、左表に記したとおりである。223～252は土師器皿。底部から口縁部の立ち上がりが強く屈曲し、内底面と口縁部を分割してなで、口縁部のなでを右上がりになで抜くもの（a類：248～252）と、底部から口縁部の立ち上がりが丸みを帯び、底面と口縁を分割せずになで抜くもの（b類：223～247）がある。口径に大小があるが、a類は小皿のみが出土。土師器皿のほとんどは、口縁部に煤が付着し、灯明皿としての使用が窺える。237は、底部中央に焼成後の穿孔と、口縁部に近い部位に穿孔に至らない打ち欠きがある。灯明下皿であろうか。253は、透明釉をかける軽陶質の灯明皿。内底面に5条の櫛目がある。国産陶器のうち、供膳形態での割合は肥前系の磁器が陶器を大きく超える。254～258は唐津窯の製品。254～257・270は灰釉皿。255は見込みの釉を蛇目に剥ぎ取る。257は刷毛目碗。258は鉢。緑色に発色する灰釉を掛ける。258～269は肥前系窯の磁器。258～260・267は丸形碗。258はやや小振りであり、外面に濃みによる菊花紋の装飾がある。259は草花紋を、260は東屋山水紋を表わす。267は内面に、菊花と蝶を対面に配する。260は高台内に崩れた「大明年製」の裏銘を、267は同じく崩れた「大明成化年製」の裏銘を表す。268は丸形の小皿。見込みに圓線を巡らせ、その中に草花紋を表す。高台内に崩れた「大明年造」の銘款を配す。269は端反りの輪花五寸皿。見込み周縁に圓線を巡らせ、青海波を濃み絵で表す。裏紋様には如意頭紋が崩れた唐草紋を配する。261～266は杯。262は丸形のもの。261・263～266は端反りのもの。このうち261は器壁が極めて薄く、釉の透明度も高いことから、中国製磁器の可能性が高い。外面に崩れた菖蒲紋を表す。高台内に比較的整った「大明成化年製」の裏銘を表す。264は白磁。263・266は梅花紋を表す。265は口縁部外面に濃みによる圓線を巡らす。国産陶器では信楽窯製品が多い。271・275・276は信楽窯の製品。271は水注か。275は擂鉢。内面に7本単位の櫛目による櫛目がある。276は壺である。272は風炉。焼成は土師器質である。273・274は大和系の炮烙。口縁部が外反するもの（a類：273）と、内縁気味のもの（b類：274）がある。瓦質土器のほとんどは深鉢の破片で占められる。277は深鉢。一部の輸入磁器を除き、18世紀前半頃の時期を考えよかろう。

(立石堅志・中島和彦)

SE17出土土器組成表及びグラフ

種類	底地	器種	出土点数	出土率(%)
土 師 器	■	皿	298	30.2
		a類	22	2.2
		b類	276	28.6
	△	燒塩壺	1	0.1
瓦 質 土 器	▲	壺	67	6.8
	●	小計	366	37.2
	▲	深鉢	110	11.1
	●	小型浅鉢	1	0.1
	●	方形浅鉢	1	0.1
	●	盆	22	2.2
	●	甕	21	2.1
國 產 陶 器	●	壺	1	0.1
	●	器種不明	18	1.8
	●	小計	184	18.7
	●	碗	115	11.6
	●	皿	25	2.5
	●	小計	140	14.2
	●	瓶	1	0.1
國 產 磁 器	●	碗	2	0.2
	●	盤	5	0.5
	●	壺	1	0.1
	●	小計	8	0.8
	●	小計	149	15.1
	●	碗	77	7.8
	●	皿	12	1.2
國 產 系 統	●	大皿	1	0.1
	●	盆	4	0.4
	●	小計	94	9.8
	●	碗	1	0.1
	●	盤	86	8.7
	●	圓盤	52	5.2
	●	小計	138	11.9
國 產 陶 器	●	碗	1	0.1
	●	皿	1	0.1
	●	盆	2	0.3
	●	盤	1	0.1
	●	不規	4	0.4
	●	小計	10	1.0
	●	碗	1	0.1
國 產 磁 器	●	盤	20	2.0
	●	壺	5	0.5
	●	盤	1	0.1
	●	壺	6	0.6
	●	小計	266	26.0
	●	碗	19	1.9
	●	皿	19	1.9
輸 入 磁 器	●	盤	1	0.1
	●	小計	59	3.0
	●	合計	965	100

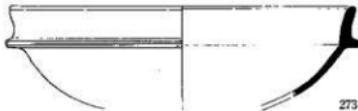




SE17出土土器(1) 1/4



272



273



274

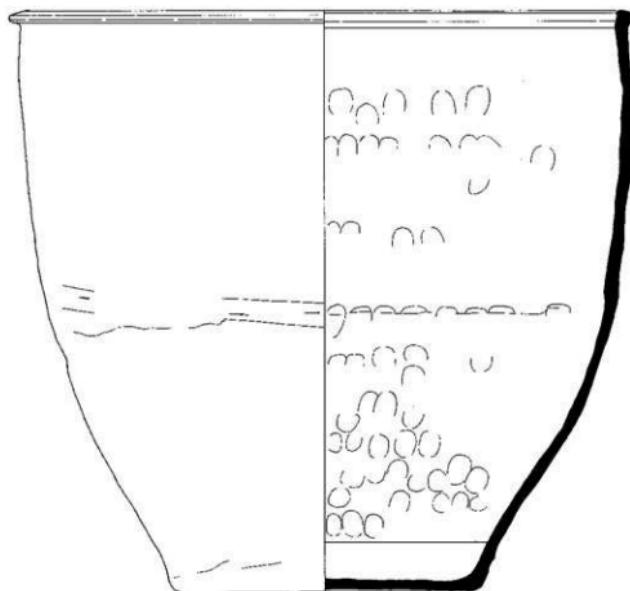


275



276

0 20cm



277

SK17出土土器(2) 1/4

瓦 大半が丸瓦、平瓦であり、軒瓦は、軒丸瓦が367点、軒平瓦が185点、いずれか不明なものが14点の計566点である。

奈良時代の軒瓦 軒丸瓦が4点、軒平瓦が4点の計8点ある。

軒丸瓦は、6012Abが遺物包含層から1点、6201AがSE17、柱穴、遺物包含層から各1点、計3点出土した。軒平瓦は、6712AがSE16から1点、6733HがSD04から1点、型式不明がSK05、遺物包含層から各1点、計2点出土した。

平安時代以降の軒瓦 軒丸瓦が363点（型式不明129点を含む）、軒平瓦が181点（型式不明61点を含む）、いずれか不明なものが14点の計558点である。軒瓦の大部分は近世以降の巴紋軒丸瓦と均整唐草紋軒平瓦である。

1は複弁八弁の蓮華紋軒丸瓦で、中房に6個（1+5）の蓮子があり、蓮弁は盛り上がりが大きく、子葉はハート形である。SK20から1点出土した。大安寺旧境内で多量に出土する平安時代の軒丸瓦で、7251Aに分類される⁴⁾。2は複弁八弁の蓮華紋軒丸瓦で、中房に6個（1+5）の蓮子があり、中房と蓮弁基部間に圓線が廻る。外縁は高さ1cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。中房から蓮弁にかけて平扣で、弁中央先端と間弁先端の3箇所に明瞭な範傷がある。遺物包含層から1点出土した。薬師寺旧境内出土品と同範である⁵⁾。3は左巻きの二巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は相互に、尾部は圓線に接する。圓線の外にさらに二重圓線が廻る。外縁は高さ1cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。巴の断面形は方形である。遺物包含層から1点出土した。薬師寺旧境内出土品と同範で、範の彫り直しが確認でき、先後関係から薬師寺旧境内出土品に先行する⁶⁾。4は左巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は小さく、先端が尖り気味で、各々離れ、尾部も隣の巴、圓線のいずれとも離れている。瓦当面直径は13cmである。外縁は高さ0.5cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。SE17から2点出土した。元興寺旧境内出土品と同範の可能性がある⁷⁾。5は左巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れているが、尾部は隣の巴と接する。瓦当面直径は12.8cmである。外縁は高さ0.3cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。巴の1つに沿って幅1cm前後に窪む範傷がある。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。169点のうち152点がSE17から、1点がSK23から出土した。元興寺旧境内出土品と同範の可能性がある⁸⁾。6は左巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れ、尾部も隣の巴と離れている。瓦当面直径は14.5cmである。外縁は高さ0.4cm、幅1.7cmの素紋の直立縁である。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。SE17から19点出土した。元興寺旧境内出土品と同範の可能性がある⁹⁾。7は左巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れ、尾部も隣の巴と離れている。2つの巴の頭部は屈曲し、円形のものと、先端が尖り気味のものとがある。さらにもう1つの頭部は屈曲せず、直線的で、先端が尖り気味である。瓦当面直径は13.5cmである。外縁は高さ0.6cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。SE17から5点出土した。8は左巻きの三巴紋軒丸瓦である。巴の尾部は隣の巴と接する。外縁は高さ0.4cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。SE17から1点出土した。9は左巻きの三巴紋軒丸瓦に復原できる。巴の頭部は各々離れているが、尾部は圓線に接する。少なくとも1つの巴の頭部は屈

4) 奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内Ⅰ」1997。

5) 奈良国立文化財研究所「薬師寺発掘調査報告」1987 Fig36軒丸瓦58。奈良国立文化財研究所にて同範認定を行った。

6) 前掲書5) Fig41軒丸瓦101。奈良国立文化財研究所にて同範認定を行った。

7) 元興寺文化財研究所「元興寺の古瓦」1983 室町時代の軒丸瓦6。

8) 前掲書7) 室町時代の軒丸瓦12。

9) 前掲書7) 室町時代の軒丸瓦13。

曲せず、直線的で、先端が尖り気味である。外縁は高さ0.8cm、幅1.3cmの素紋の直立縁である。SK20から1点出土した。10は左巻きの三巴紋軒丸瓦に復原できる。巴の尾部は隣の巴、圓線のいずれとも離れている。外縁は高さ1cm、幅2cmの素紋の直立縁である。SE16から1点出土した。11は左巻きの三巴紋軒丸瓦に復原できる。巴の頭部は各々離れ、尾部も隣の巴、圓線のいずれとも離れている。外縁は高さ0.6cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。圓線から外縁にかけて珠紋を横断する明瞭な範傷が少なくとも2箇所ある。1点出土した。12は右巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れ、尾部も隣の巴、圓線のいずれとも離れている。瓦当面直径は15.5cmである。外縁は高さ0.6cm、幅2cmの素紋の直立縁である。1つの巴の頭部を横断する明瞭な範傷がある。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。SK23から1点出土した。元興寺旧境内出土品と同範の可能性がある¹⁰。13は右巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れているが、尾部は隣の巴と接する。瓦当面直径は13.5cmである。外縁は高さ0.5cm、幅1.5cmの素紋の直立縁である。珠紋には椿円形のものが1つある。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。13点のうち12点がSE17から出土した。14は右巻きの三巴紋軒丸瓦で、巴の頭部は各々離れているが、尾部は隣の巴と接する。瓦当面直径は12.8cmである。外縁は高さ0.6cm、幅1.3cmの素紋の直立縁である。瓦当裏面にカキメを入れて丸瓦を接合している。14点のうち13点がSE17から出土した。15は右巻きの三巴紋軒丸瓦に復原できる。巴の頭部は各々離れているが、尾部は圓線に接する。巴は頭部が大きく、尾部までが短い。圓線は細く、珠紋は小さい。外縁は高さ0.6cm、幅1.6cmの素紋の直立縁である。SE17から1点出土した。16は右巻きの巴紋軒丸瓦である。巴の尾部は圓線に接する。巴の頭部の盛り上がりが大きく、圓線は細い。外縁は高さ0.6cm、幅1.8cmの素紋の直立縁である。SK23から1点出土した。17は右巻きの巴紋軒丸瓦である。巴の尾部は隣の巴、圓線のいずれとも離れている。外縁は高さ0.6cm、幅1.3cmの素紋の直立縁である。SE17から1点出土した。18は右巻きの三巴紋軒丸瓦に復原できる。巴の尾部は隣の巴と離れているが、珠紋に接する。外縁は高さ0.6cm、幅1.9cmの素紋の直立縁である。2点のうち1点がSE17から出土した。19の軒丸瓦は、大きな珠紋の外側に細い圓線が廻る。外縁は高さ0.9cm、幅1.9cmの素紋の直立縁である。SE16から1点出土した。これら以外に、明らかに異範である巴紋軒丸瓦が数点とSE17から小形の菊紋軒丸瓦が1点出土しているが、いずれも小片である。

20の唐草紋軒平瓦は、瓦当面に向かって左4単位分の唐草を確認したのみで、均整唐草紋であるか偏行唐草紋であるかは不明である。下外区に線鋸齒紋がある。瓦当面には横方向の明瞭な範割れ痕があり、瓦当面下半部は上半部より0.1cm突出している。顎長5cmくらいの段顎である。瓦当上縁部を0.7cmの幅で面取りし、平瓦部凹面に布目痕がある。1点出土した。21は均整唐草紋軒平瓦で、中心飾りは1対の唐草紋である。唐草の展開は左右で異なる。瓦当面の厚さ4cm、上外区の厚さ1.5cm、下外区の厚さ0.7cm、脇区幅3cm、外縁の高さ0.4cmである。平瓦部凸面広端縁にカキメを入れる顎貼り付けの段顎である。SE17から106点出土した。新薬師寺旧境内、正暦寺旧境内出土品と同範で（正暦寺第1次・2次・平成10年度）¹¹、元興寺旧境内、興福寺旧境内出土品と同範の可能性がある¹²。22は均整唐草紋軒平瓦に復原でき、中心飾りは対向する「C」字形の唐草である。SE17から1点出土した。23は均整唐草紋軒平瓦で、中心飾りは三葉紋である。唐草は左右に3回以上反転する。第2単位までは連続し、第3単位との間で離れている。上外区の厚さ1.2cm、

10) 前掲図7) 奈良町時代の軒丸瓦8。

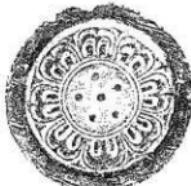
11) 正暦寺出土品は、軒平瓦124型式A種。

12) 藤井典彦「中・近世瓦の研究 元興寺施」元興寺文化財研究所、1982。

芦出淳一「元興寺極楽坊中匠軒平瓦にみる瓦当接合技法の展開」『元興寺文化財研究』No67、元興寺文化財研究所、1998。



1



2



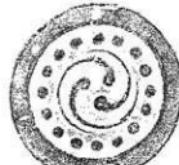
3



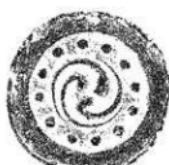
4



5



6



7



8



9



10



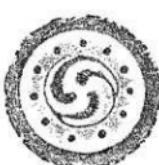
11



12



13



14



15

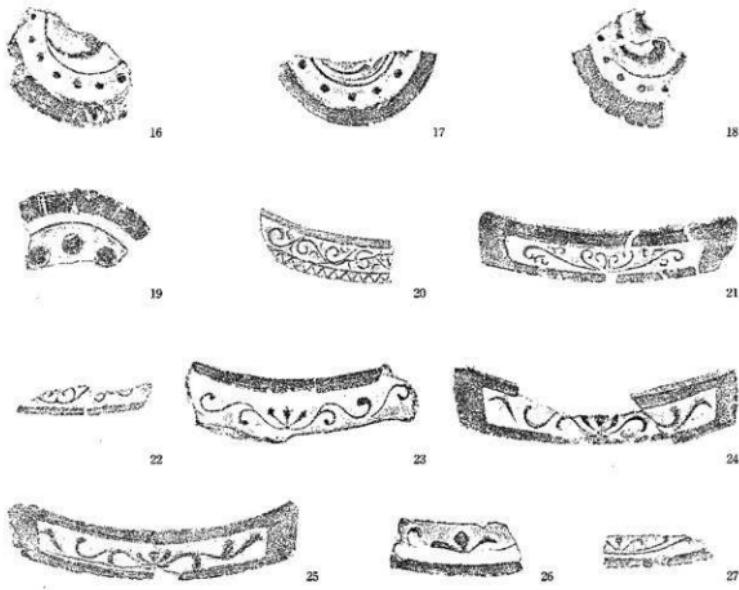
出土軒丸瓦 1/4

下外区の厚さ0.4cm、外縁の高さ0.7cmである。瓦当上縁部を1cmの幅で面取りする、額貼り付けの段額である。SE17から1点出土した。24は均整唐草紋軒平瓦で、中心飾りは三葉紋である。唐草は左右に3回反転している。上外区の厚さ1cm、下外区の厚さ0.7cm、脇区幅2.2cm、外縁の高さ0.3cmである。平瓦部凸面広端縁にカキメを入れる額貼り付けの段額である。7点のうち1点がSE16から、6点がSE17から出土した。元興寺旧境内、唐招提寺旧境内出土品と同范の可能性がある¹³⁾。25は均整唐草紋軒平瓦で、中心飾りは三葉紋である。唐草が左右に3回反転する。先述の24と同紋であるが、唐草の巻きが弱い。瓦当面は厚さ4cm、上外区の厚さ1cm、下外区の厚さ1cm、脇区幅2.5cm、外縁の高さ0.4cmである。瓦当裏面にカキメを入れる瓦当貼り付けの段額である。SE17から1点出土した。26は均整唐草紋軒平瓦に復原でき、中心飾りの中心葉が菱形の三葉紋である。下外区の厚さ0.9cm、外縁の高さ0.7cmである。SK22から1点出土した。27は均整唐草紋軒平瓦に復原でき、中心飾りは三葉紋である。唐草は左右に2回以上反転するが、直線的で巻きが弱い。下外区の厚さ0.7cm、外縁の高さ0.3cmである。SE17から2点出土した。これら以外に、橘紋軒平瓦がSE17から1点出土しているが、中心飾り部分の小片である。

これらのうち、軒瓦5と21について若干記す。出土した平安時代以降の軒丸瓦363点のうち169点が軒丸瓦5で、軒平瓦181点のうち106点が軒平瓦21である。先述の通り、両者と同范と思われる軒瓦が元興寺旧境内でも出土しているが、必ずしも同旧境内での主体的な軒瓦とまではいえない。しかし、両者がSE17からまとまって出土したことで、組み合う可能性が高いことと、奈良町遺跡での主要な近世軒瓦の一端が明らかになったといえる。

(宮崎正裕)

13) 前掲書7) 江戸時代の瓦(軒平瓦)2、唐招提寺【唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告書】1995 Fig10軒平瓦67-2。



出土軒瓦 1/4

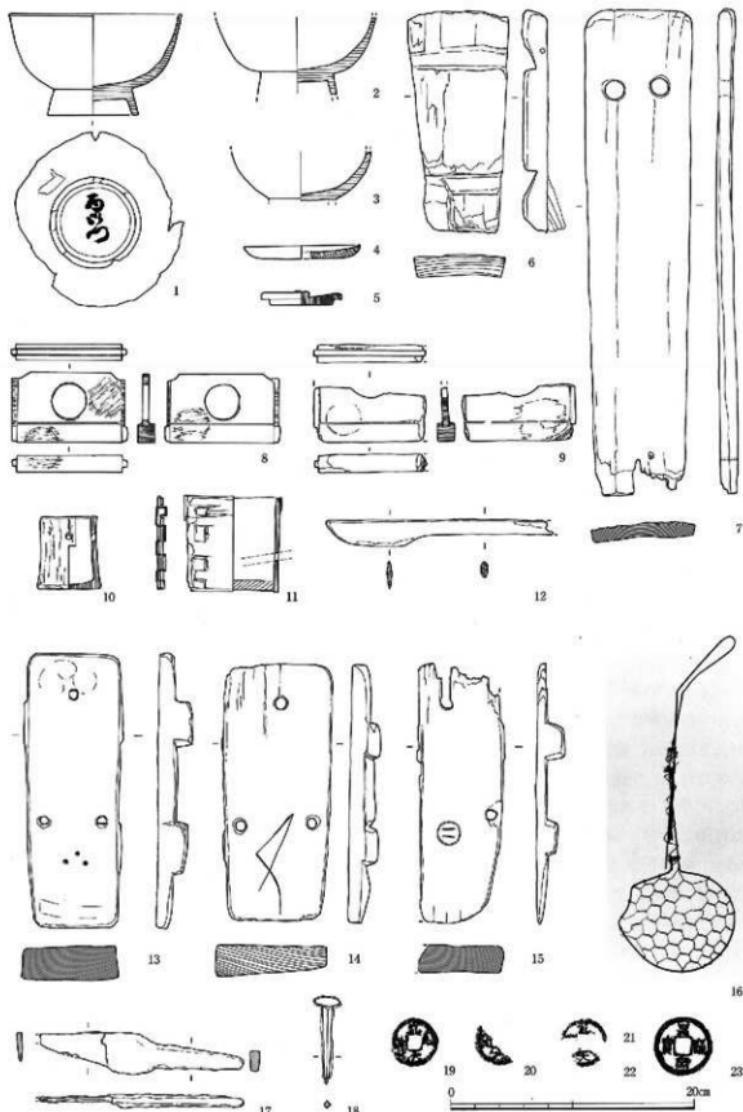
木簡 井戸SE16から出土した荷札木簡である。「出雲村弥四郎」と書かれている。「出雲村」は、現在の奈良県桜井市の東部に江戸時代～明治22年まで存在した出雲村であると考えられる。

木製品・金属製品 木製品は243点で、大半はSE16・17から出土した。1～3は漆椀である。1は復原口径14.0cm、器高8.4cm、高台径7.4cm。内外面とも茶褐色の漆が塗られている。底面には「西御門」の墨書きがある。「西御門」は、現在も残る奈良市の町名をさすと考えられる。2は残存部の最大径12.5cm、残存高6.3cm、高台径6.0cm。内外面とも黒漆塗りである。3は残存部の最大径11.3cm、残存高4.0cm。内面朱漆、外面黒漆塗りである。4は挽き物の小皿である。口径9.5cmに復原でき、器高1.1cm。5は挽き物で、容器の蓋と思われる。復原径6.6cm、高さ1.1cm。上面がくぼみ、その中心につまみが付く。茶入れの蓋を模したものとも考えられる。上面は黒く、漆が塗られていた可能性がある。6はつるべの桶の一部と考えられる。径約30cm、高さ18.2cmの桶に復原できるが、1枚のみなので明確ではない。上下に2条のタガを嵌めたと思われる溝が彫り込まれている。上のタガのつく位置の両側面に釘穴が残る。7は桶の把手である。長さ39.7cm、最大幅8.8cm、厚さ1.0cm。担桶（たご）の紐通しの部分で、板の下端部には釘穴が残る。8・9は黒漆塗りの蒔絵の板である。縦5.7cm、横9.5cm、厚さ0.5cmで、それぞれ中央に径3cmほどの透孔が穿たれている。下部には角棒状の別材がはめ込まれ、縦断面が凸字状を呈する。円形を呈する金箔の紋様は、研ぎ直しのためかすべて擦られて不明瞭となっている。漆は厚く丁寧に塗られているが、左右両端は別の部分に嵌め込まれていたと思われ、漆が塗られていない。この板は、室町時代以降にみられる蒔絵鏡台の鏡懸けの一部の可能性があり、中央の孔には透かし彫りの飾り金具が嵌め込まれていたものと考えられる。10は竹製の容器で、全面に黒漆が塗られている。復原口径4.5cm、高さ5.9cm、外から内側に下がる円形の孔が穿たれており、柄を取り付けた孔とすれば柄杓の身とも考えられるが、柄の先端にあたる側が欠損しており不明である。11は曲物柄杓の身である。口径7.3cm、高さ7.8cm。下部に柄を取り付けた孔があるが、柄の先端側の孔は欠損している。1列内4段継じ。12はヘラ形の木製品である。残存長18.5cm、最大幅2.2cm。身と考えられる幅広の部位は、刃をついたように下縁を薄く加工している。13～15は下駄である。13が長さ22.5cm、最大幅7.6cm、厚さ1.5cm。3点とも連齒下駄で、前歯が中央に、後歯が歯と歯の間に穿たれる。平面形はいずれも隅丸長方形を呈する。13には3つの黒丸を三角形状に配した焼印、14には「4」字状の線刻、15には○に二の字の焼印がある。13は指の痕から右履きと推測される。金属製品には、銅製品が目立つが出土量は少ない。16は銅製の網杓子である。網部の復原径8.0cm。柄の復原長21.0cm。太めの針金でオタマジャクシ状の枠を作り、身には細めの針金で亀甲状の網を張る。柄には木製の芯を挟み、細い針金で巻き付けている。現代で使用されているものと同じ形態である。17は鉄製の刃物であるが、錆化と損傷が激しく全体像は不明である。残存長16.5cm。茎の長さから推測して短刀もしくは包丁の可能性が考えられる。18は銅製の網である。残存長3.3cm、頭部径約1.0cm。断面は正方形で、先端を欠損している。長さから考えると単なる飾りの網ではなく、固定具としても機能していたと思われる。錢貨は2種類出土しており、19～22は乾元大寶（初鋤958年）である。19のみ完存し、径1.97cm。21と22は出土状況から同一個体の可能性が高い。23は篆書体の皇宋通寶（初鋤1038年）で北宋錢である。径2.43cm。以上の遺物の出土構造は、1・4・8～10・12・16がSE17、2・3・5～7・11・13～15・23がSE16、17・19～22がSK05、18が中世以降の溝である。



出土木簡

(松浦五輪美)



出土木製品・金属製品・裁貨 (1~17は1/4、18~23は1/2)

4. 平城京左京一条三坊十三坪の調査 第440次

事業名 一条高校多目的複合施設建設
 届出者名 奈良市長
 調査次数 平城京 第440次
 調査地 法華寺町1351
 調査期間 平成12年2月1日～3月31日
 調査面積 531m²
 調査担当者 松浦五輪美

調査の概要 調査地は、平城京条坊復原で左京一条三坊十三坪の北半部東端に位置する。すぐ東には東三坊大路が推定されているが、今回の調査は推定道路位置まで及んでいない。一条高校敷地内では、昭和54・56・59年度と平成元・2年度に奈良市教育委員会が調査を行っており、大型掘立柱建物などを検出している。このうち十三・十四坪境付近の調査では、条坊造構は検出されず、道路推定位置に建物跡があることから2坪が1つの宅地として利用されていたと推測されている。また一条大路をはさんで南には「芸亭」推定地もあり、この付近が高位の貴族階級の居住地として占められていた可能性が高く、今回の調査ではその様相を知る手掛かりを得ることが1つの目的であった。

発掘区は、武道場跡地にあたり、遺構検出面の直上が約0.7mの造成土で覆われ、基礎による



発掘区位置図 1/6,000

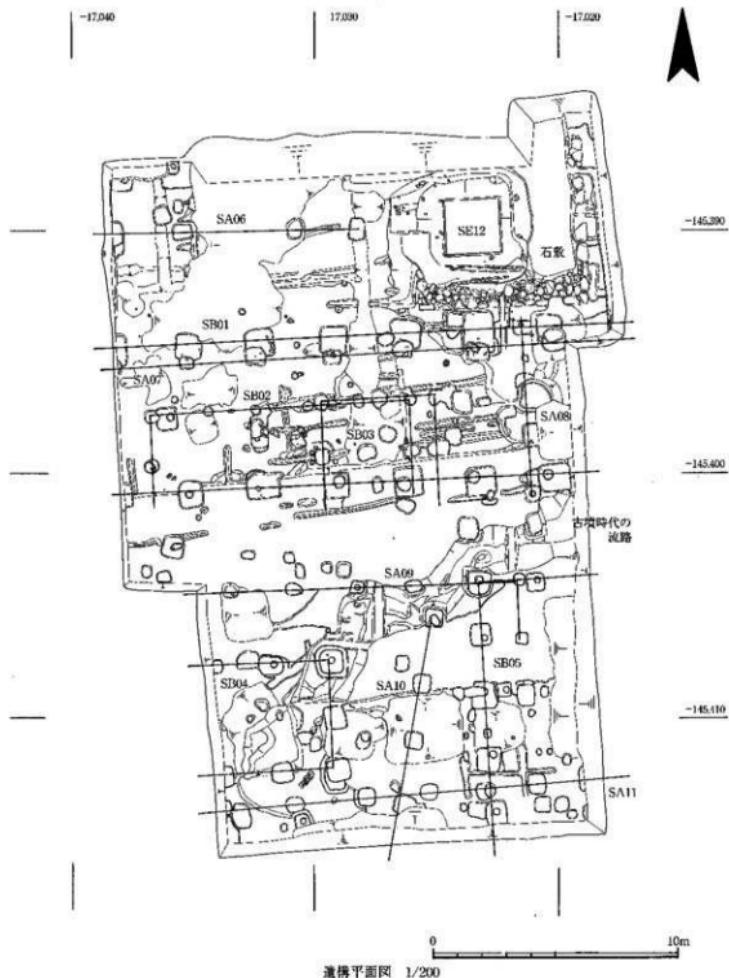


発掘区全景（左が北）

擾乱も多数存在した。遺構検出面は黄色粘土、灰褐色または青灰色砂で、地点によって異なる。検出面の標高は北半で66.2m前後、南半で65.9m前後であり、発掘区中央付近に造成前の水田面の段差がある。

検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀6条、井戸1基、石敷がある。このほか、発掘区南半を西から南東に向かって流れる古墳時代の自然流路も確認しており、埋土から4~5世紀の土器が出土している。



遺構平面図 1/200

掘立柱建物・塀 SB01は、桁行8間（24m）以上、梁間2間（6m）と推測される東西棟掘立柱建物である。発掘区内では3m（10尺）等間の2列の東西側柱列を7間分確認したのみで、妻柱は発掘区外にあたるものと考えられる。柱掘形から9世紀後半の土器が出土した。

SB02は、桁行5間（10.5m）、梁間2間（4.2m）の東西棟掘立柱建物と考えられるが、造成前の水田面の段差によって南の柱列が削られており、建物の北半分のみ検出した。桁行の柱間は2.1m（7尺）等間である。

SB03もSB02と同様であり、北側柱列2間（4.8m）とその両端から南へそれぞれ1間（2.1m）分の柱掘形を確認したのみであるが、おそらく南北2間以上、東西2間の掘立柱建物と考えられる。

SB04は、桁行3間（5.4m）以上、梁間2間（3.6m）の東西棟掘立柱建物である。柱間は全て1.8m（6尺）等間。

SB05は、東西2間（3.6m）以上、南北5間（9.0m）以上で、南北棟掘立柱建物と考えられる。南北の柱間は1.8m（6尺）等間。

SA06は、東西4間（9.9m）以上の掘立柱塀。一部壊されているが、柱間は西から2.7、2.4（推定）、2.4（推定）、2.4mである。

SA07は、東西6間（18m）以上の掘立柱塀。柱間は3.0m（10尺）等間。SB01の北側柱筋に重なるように位置し、SB01より新しい。塀の南端から2/3に位置し、2坪利用であった場合、宅地を3等分する塀であった可能性がある。

SA08は、南北3間（7.2m）以上の掘立柱塀。柱間は2.4m（8尺）等間。北は石敷に壊されている。東に広がる建物の一部である可能性もある。

SA09は、東西5間（12m）以上の掘立柱塀。柱間は西から2.7、2.7、2.1（推定）、2.4（推定）、2.1m。東端で南北1間（2.4m）分南に続く可能性がある。SB05より古い。

SA10は、南北3間（7.8m）以上の掘立柱塀。柱間は北から2.7、2.4、2.7m。北で東に振れる。

SA11は、東西6間（15.0m）以上の掘立柱塀。柱間は西から2.7、3.0、2.7、2.4、2.1、2.1mと不規則である。南へ広がる建物の一部である可能性もある。

以上の建物については直接時期の判断できる資料は少ないが、造構の重複からみると、SA08→（SE12）→SB01→SA07の順に、またSA09→SB05の順に前後関係が確認できる。また、出土遺物からみると、SB01は9世紀後半の可能性が高く、位置的に重なるSB02・03はともにSB01より新しいものと考えられる。

井戸・石敷 井戸SE12は、東西南北それぞれ6m以上の平面隅丸方形状の掘形で、井戸枠は内法2.23m四方の井籠横板組である。横板16段分（深さ約4.6m）が残存していた。枠内底面には、渡過用の拳大の円碟が厚さ0.2m程度敷きつめられていた（写真4）。また北側横板の内に沿って、2段積の塙が西寄りの1.25m分のみ並んでおり、部分的に塙の代わりに同じくらいの大きさの扁平円碟も利用されている。これは底部の隙間から流れ込む砂や泥を防ぐためのものと考えられる（写真6）。

井戸枠材は、上から3段目までと4段目以下で異なっている。上3段分（12枚）は断面が扁平な五角形の板で、組み上げた外観が校倉状を呈する（写真1）。長軸の両端に釘穴が残っていることから建築部材の転用と考えられる。長さ252cm前後、幅25~30cm、厚さ6~10cmのヒノキ材である。4段目以下は丁寧に仕上げられた分厚い板で、長さ254~259cm、幅28~30cm、厚さ12~15cmのスギ材である。4段目以下の枠材はこの井戸を造るために特別に用意されたものと考えられ、なかには「東（六カ）」、「西十」などの番付が墨書きされたものもみとめられる。

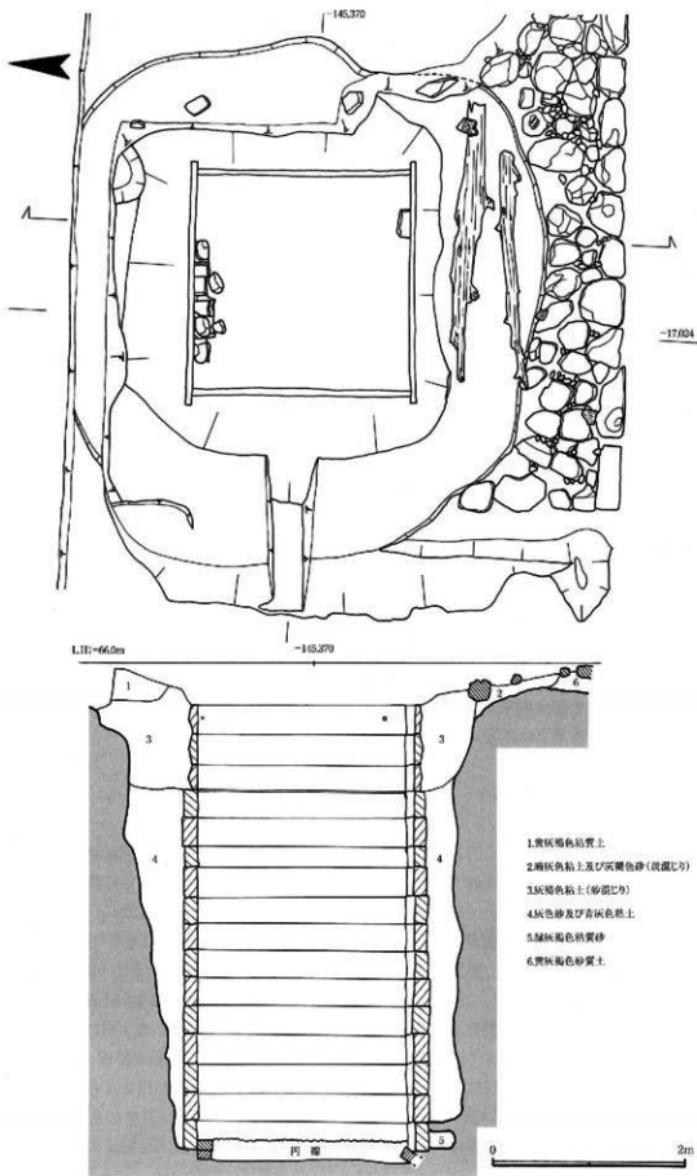
この井戸枠材の違いと掘形の土層の観察から、井戸SE12は一度改修が行われたことがわかる。井戸の構築過程を復原してみると、まず掘形の中に枠を据える位置を決め、4つの角それぞれの外側に接して杭を打ち込み固定させる。このとき、整形された長い角杭と枝を利用したような丸木とで角を挟むようにしてそれぞれの角に打ち込んでいる（写真4・5）。枠の組み方は井籠横板組であり、仕口が凹のものと凸のものが交互に積み上げられており、その過程で枠を安定させるために長さ10cm、幅2cm、厚さ0.2cm程度の薄板を横板の間に挟んでいる箇所がいくつかある（写真3）。太納は一切使用されていない。この後、下から14段目以上は改修によって別の材と取り替えられるが、その際にも枠の水平を保つために、東側のみ長さ222cm、幅7.5cm、厚さ1.5cmの細長い板を古い枠材の上面に打ち付けて高さを調節してから転用材を積み上げている（写真2）。最終的には地上に出ていた井桁は他所へ運び去られたものと思われる。

掘形埋土中の遺物から、築造当時の時期は9世紀初頭頃と推測され、改修が行われたのは9世紀



SE12井戸枠細部

1. 上から1~4段目（南西から） 2. 上から4段目上面（東から） 3. 上から11段目北東角上面（北から）
4. 枠内底面の様子（東から） 5. 枠外の杭の状態（南西から） 6. 埋出土状態（南から）



SE12平面及び断面図 1/100

中頃と考えられる。井戸が完全に埋没するのは10世紀前半である。

石敷は、井戸枠を取り囲むように、一辺6.9m四方の正方形に敷かれていたものと考えられるが、校舎の建物基礎によって広く壊されており、南辺と東辺を確認した。安山岩を中心に花崗岩、チャートの人頭人の河原石を用いた玉石敷で、隙間に小砾を詰めている。南西隅のみ凝灰岩切石を用いている。東辺の石は南辺の石より大型の安山岩が用いられており、趣が異なっている。井戸の掘形によって南半が壊されていることが確認でき、少なくとも改修後は当初の石敷としての機能と景観を失っていたと判断される。構築当初の井戸掘形は、直接石敷と重複がみとめられないと、井戸の掘削そのものが石敷より新しい可能性も残るが、石敷と井戸枠の東西中心線がそろっていることから、この石敷が構築当初の井戸に伴っていた可能性が高いと思われる。改修が行われたころは、既に石敷は土に覆われていたと推測される。

検出した遺構のほとんどは、9世紀以降のものであり、掘立柱建物については判断材料が少ないものの、いくつかの柱掘形から平安時代に属する土器が出土している。また、遺構は4時期以上の変遷が考えられるが、特にSE12より新しい遺構については全て9世紀以降と考えられる。なお、これまでの周囲の調査で検出した遺構を再検討したところ、出土遺物から9世紀以降に属すると判断される掘立柱建物がいくつか確認でき、この一帯が平安時代になつても宅地として利用されていたことが明らかとなった。

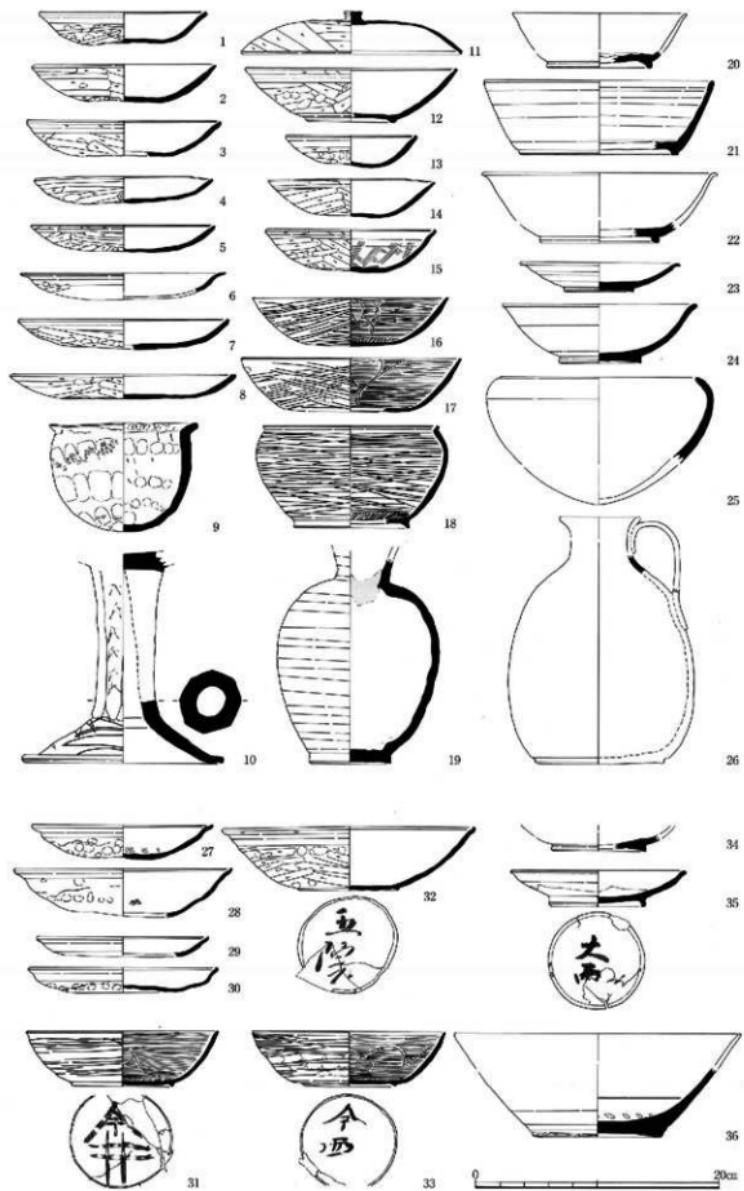
今回の検出遺構の中でも特に注目されるのは、大型井戸SE12である。この井戸の規模はこれまで平城京で検出されたものの中でも最大級で、これを凌ぐものは宮内にしか存在しない。しかも深さからみてこれだけ遺存状態の良好なものは初めてである。残存するものだけでも64枚もの大型の枠材が用意されており、その構築の背景に強力な権力の存在を垣間見ることができる。大型建物SB01の存在とあわせて、この地に平安遷都後も重要な施設が存在したことを示している。これが個人的なものか公的なものかは不明であるが、有力な貴族階級が先に都を移っていましたと考えるなら、この時期この地にこれほどの構造物を構築できたのは官営であったからとも考えられる。1つの仮説としては、9世紀初頭平城京へ戻ってきた平城上皇との関連が考えられるが、今回の調査ではそれを示す成果は得られていない。しかし、少なくともこの大型井戸は、廃都後の平城京の様相を知る上では非常に重要な意義をもつ遺構として捉えられる。 (松浦五輪美)

出土遺物

出土遺物は整理箱で143箱分で、その大半は井戸SE12から出土したものである。現在整理中のため、一部について報告する。

土器・土製品 4~5世紀の土師器、8世紀の土師器・須恵器、9~10世紀の土師器・黒色土器A類・須恵器・絞釉陶器・灰釉陶器・青磁・碗、用途不明土製品が遺物整理箱で37箱分出土した。

このうちの大半が井戸SE12からのものである。以下、井戸SE12出土土器について概要を記す。築造当初の掘形からは、土師器蓋の破片が1点出土しただけで詳細な時期は不明である。改修後の掘形からは、土師器杯・皿・壺、黒色土器A類杯・須恵器壺・壺が出土した。土師器杯・皿は、ケズリ調整(c手法)が主体で、口縁部が外方に聞くものが多い。これらは9世紀前半の土器と考えられる。枠内からは、土師器杯A・杯B・皿A・椀A・蓋・高杯・鉢・小壺・壺、黒色土器A類杯・皿・鉢・須恵器杯B・壺M・壺・壺・綠釉陶器皿・椀・鉢・瓶、灰釉陶器椀・青磁鉢・碗、用途不明土製品が出土した。特に土師器杯・椀が多く、火を受けた痕跡が残るものが多い。時期的には、井戸枠15段目から井戸底にかけて出土した土器は、9世紀中頃~後半のものが主体を占め、これより上層で出土した土器は、9世紀中頃~後半のものに加えて、9世紀後半~10世紀前半



SE12出土土器

頃のものが混在している。

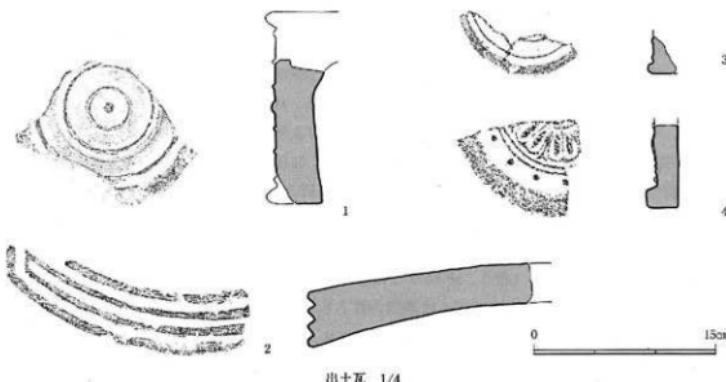
9世紀中頃～後半の土器（1～26）は、土器器杯A（1～3）、杯B（12）、皿A（4～8）、椀A（13～15）、杯蓋（11）があり、粗いケズリ調整（e-c手法）が主体を占める。口径は、杯Aが14.0～14.5cm、皿Aが14.5～16.0cm、椀Aが13.5cm大のものが多い。高杯（10）は、芯棒に粘土を巻き上げて脚部を作っている。脚部外面には「氏」と読める文字が六文字分墨書きされている。裾部内面には煤が付着している。壺は「都城形壺」¹⁾と呼称されているものほかに、小型の壺（9）がある。体部外面に成形時の凹凸を残す粗雑な作りで、胴部外面上半には棒状工具の先を押し付けたような痕跡が残る。内外面全体に煤が付着するが、特に底部外面は著しい。黒色土器A類杯（16・17）は、口縁部外面を粗いケズリで調整した後、粗いミガキを施しているが、内面のミガキは丁寧である。黒色土器A類鉢（18）は、杯と比べると内面のミガキがやや粗い。須恵器杯B（20・21）は貼付け高台で、20の底部外面には糸切り痕跡が残る。須恵器壺（19）は平高台と卵形の体部、外上方に開く口頭部からなる。底部を糸切りで離した後にヘラ記号「-」を刻んでいる。体部外面はロクロナデ調整。19は、植物の葉を丸めて頭部内にねじ込み、栓をしたような状態で出土したため、X線CTスキャナで壺内の状態を撮影した。その結果、底部内面に薄い膜状のものがみとめられたが、これがどういったものかまでは明らかにすることはできなかった。後述する綠釉瓶（26）と嘉祥元年（848年）の紀年銘のある壺と共に井戸枠11段目の層から出土した。綠釉陶器には椀（24）、皿（23）、鉢（25）、瓶（26）がある。23・24はケズリ出しの平高台で、24の底部外面には門線が巡る。いずれも山城産である。25は鉄鉢形の鉢で、この他にもやや小ぶりのものが1個体出土している。内外面ともにミガキが丁寧に施され、釉も厚くガラス質感が強い仕上がりになっている。都城遺跡等の消費地では類例が少ない資料である。26は低い平高台と卵形の体部からなる把手付きの瓶である。釉下にあるミガキはやや粗めではあるが、釉は丁寧に塗られ、25と同様にガラス質感が強い仕上がりである。壺内には、人名が記された人形と小石、鉄釘、木釘、種子、粉、須恵器壺片が納められていた。灰釉陶器椀（22）は、底部の器壁が分厚いのが特徴的で、その内面に灰釉が厚く掛かる。22・25・26は東海産の製品であろう。

9世紀後半～10世紀前半の上器（27～36）は、量的には全体の1割程度である。土器器杯A（27・28）・皿A（29・30）は、口縁部をヨコナデ調整（e手法）するものが主体を占め、口縁部上半の外反が強く、器壁も薄くなるのが特徴である。口径は、杯Aが13.5～14.0cm、皿Aが14.0～15.0cm大のものが多い。杯B（32）は、前述した12と比べると口縁部の外反がさらに強くなっている。底部外面には「五院」と墨書きされている。黒色土器A類椀（31・32）は、幅が狭く低い高台と内輪気味にたちあがる体部からなる。底部外面には「今井」「今西」と墨書きされている。このほかに「今井」が1点、「今西」が1点、「井」と記されたものが2点出土している。綠釉陶器椀（34）は幅広の輪高台が特徴的である。内外面ともに厚く釉が掛けられ、釉下には丁寧なミガキが施され、ガラス質感がある。灰釉陶器皿（35）は、釉の付け掛けがはっきりとわかり、底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。底部外面には「大西」と墨書きされている。「大西」の墨書き土器は、近隣の東三坊大路東側溝SD650出土土器²⁾にも類例がある。34・35は東海産の製品である。青磁鉢（36）は、オリーブ黄色の釉が内外面に掛けられ、底部内面には重ね焼き痕跡が明瞭に残っている。高台は、釉を掛けた後にケズリ調整が加えられているため生地が露呈している。中国越州窯系の製品である。

（三好美穂）

1) 小森俊寛「総説」「古代の土器4 煙炊具」古代の土器研究会、1996。

2) 京良國立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書VI」1975。



出土瓦 1/4

瓦塙 大半は丸瓦と平瓦で、内訳は丸瓦が1,154点（156.678kg）、平瓦が2,150点（348.760kg）、いずれか不明なものが1,088点（14.580kg）の計4,392点（520.018kg）である。そのうちSE12からの出土数量がほぼ半分を占める。さらにその大部分が枠内から出土したもので、掘形からの出土量は極めて少ない。軒瓦は29点ある。軒丸瓦の内訳は、6012Cが3点、6130Aが1点、6133Aが1点、6133Bが1点、6133種別不明が3点、6291Aaが1点、型式不明軒丸瓦が6点、平安時代の複弁蓮華紋軒丸瓦が2点である。軒平瓦の内訳は、6572Jが3点、6654Aが2点、6663Aが1点、6664Fが1点、6732Aが1点、6732Cが1点、型式不明軒平瓦が2点である。1は6012C、2は6572Jである。瓦当紋様からみて、ここでは6012Cと6572Jの組み合わせが考えられるが、両者ともに出土点数は少ない。6012Cと6572Jが頭塔で（国第199次・昭和63年度）、6572Jが大安寺旧境内で（DA第73次・平成8年度、ほか）出土している。3の重圓紋軒丸瓦の型式は不明で、石敷の裏込から1点出土した。平安時代の複弁蓮華紋軒丸瓦は2点あるが、小片で、遺存状態が悪い。2点とも外縁は素綫の直立線で、圓線が2重に廻る。この2点は同范の可能性が高い。4はそのうちの1点で、蓮弁から外区にかけての破片である。胎土が粗く、焼成がやや軟質、色調は表面が黒灰色、内面が灰色である。SE12枠内の16段目から出土した。もう1点は外区部分の破片である。SE12枠内の8段目から出土した。4と同范と思われるものが、吹田市岸部瓦窯や京都市西賀茂瓦窯などの平安京関連瓦窯跡、平安京跡、嵯峨院跡などで出土し、平安時代前期に比定されている³⁾。

堺は31点（42.590kg）あり、そのうち20点（34.030kg）がSE12から出土した。そのすべてが枠内からで、掘形からは出土していない。SE12の井戸底に敷かれていたものは10点あり、法量は21cm×21cm×4.5cmのもの6点と、31cm×16.5cm×7.5cmのもの4点の2種類に大別できる。SE12枠内から出土したその他の堺は、すべて破片で、法量での分類はできなかった。
(宮崎正裕)

木簡 SE12から7点の木簡が出土したが、2点以外は墨痕がわずかにみとめられる程度の破片である。1は長さ44.2cmの長大な削屑で、积文は以下の通りである。

[左]

[右]

人田真植麻呂□□返□小開□如件 井氏吉小口与□□開□

性格は不明であるが、人名と「小開」、「大開」が対句となっていると考えられる。2は表裏に文字が書かれた、厚さ約1cmの板である。表は7月から12月までの月名が書かれ、左側に「木生火々生

3) 大覚寺『史跡大覺寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸復元修築事業に伴う調査 1994』1997のDKM01型式。

十・・」の五行相生説と「木剋土々剋水・・」の五行相剋説が書かれている。裏には周辺に沿って「狸」「蟹」「鬼」などの動物名が書かれ、中心から右上に向かって「巳未人」の文字がみとめられる。中央には釘穴が残る。呪付木筒であろうか。1が15段目、2が11段目で出土した。

木製品 SE12から出土した木製品には、人形、斎申、漆器、曲物、挽物、柄杓、下駄、横櫛があり、その他に葦草履、編物も出土している。3~8は人形で、確認できた個体数は91枚であり、破片から考えると100枚近くあったものと思われる。これらの人形には2通りの出土状態がみとめられ、約半数が11段目の土中から東となって出土し、残りの半数が同層出土の縁軸壺の中から発見された。3は男性を表した人形で、胸部に「伊勢竹河」の入名が書かれている。このタイプが上中から東で出土したもので、7・8は、当初のまま遺存していた東である。ほかに東がほどけたと思われる状態のものが6つあり、それらの人形から、東ねられたものは全て「伊勢竹河」と書かれていると推定される。確認もしくは推定されるものは51枚である。7・8は、ともに最も外側にくる人形が内向きとなるようにして7枚が重ねられ、頭部に1箇所、胸部に2箇所の木釘または紐通しの孔が穿たれ、巻状の紐で巻かれている。おそらく人形を束ねる際には一定の決まり事があったものと思われる。4~6は、縁軸壺の中に桃の種や初、鉄釘、土器片などとともに入れられていたものである。4は「伊勢宗子」、5は「秦奈良子 又名栗日」、6は「伴廣富」の入名が書かれている。顔の表現は3種とも似ており、女性を表していると思われる。それぞれ6枚、17枚、13枚確認しており、「伊勢宗子」と「秦奈良子 又名栗日」が表裏に書かれたものが1枚ある。また木筒を転用したものもみとめられる。壺内の入形は束ねられて形跡がなく、男性（もしくは戸主）と女性（もしくは家人）の入形は廃棄の方法が異なっていたようである。大きさは壺内のものが全体的に短めであるがややばらつきがあり、3のタイプが長さ8.9~15.6cm、幅1.3~2.2cm、厚さ0.1~0.3cm、4のタイプが長さ10.7~11.5cm、幅1.8~2.0cm、厚さ0.1~0.25cm、5のタイプが長さ9.9~11.6cm、幅1.1~2.3cm、厚さ0.1~0.5cm、6のタイプが長さ8.6~11.6cm、幅1.5~2.5cm、厚さ0.1~0.2cmである。9は、内外面とも黒漆塗りの漆器で、葦壺形に組み合わされる壺の上半部と思われる。下半部との合わせ目は、内側に浅い段がつくように加工されている。口径9.8cm、胸部径19.9cm、高さ4.5cmである。

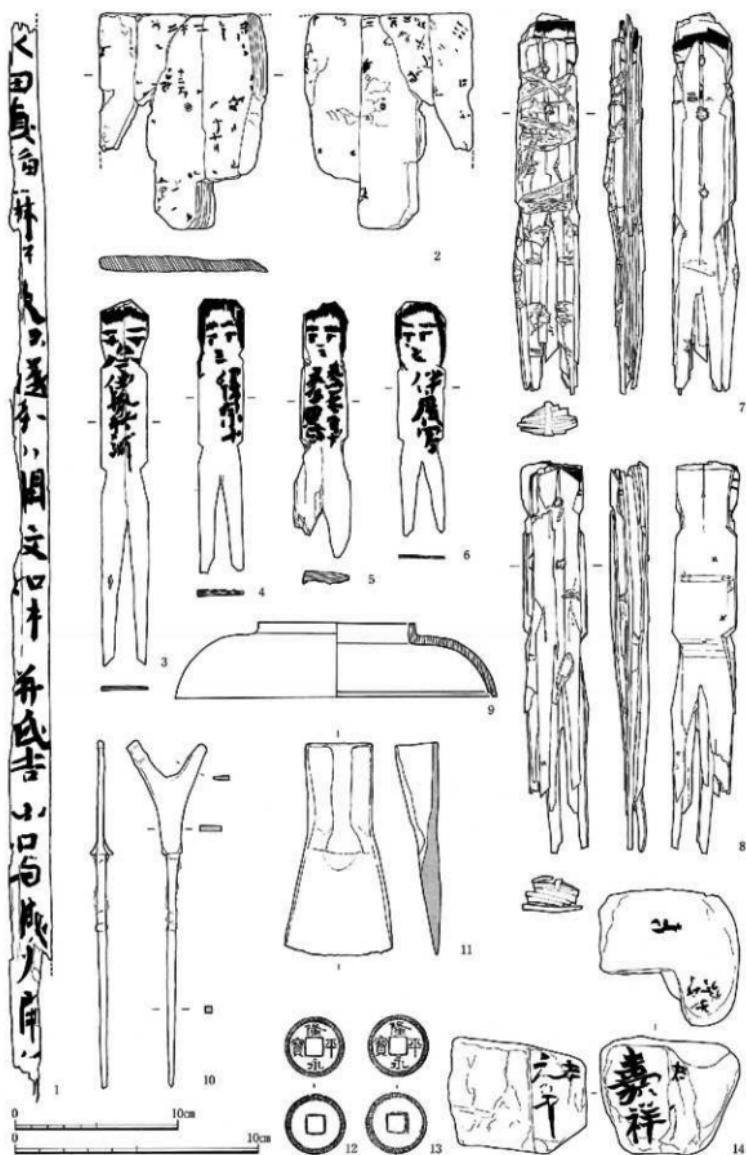
金属器 SE12出土の金属器は、鉄鎌2点、鉄斧2点、刀子4点と、壺に入れられていた釘2点がある。10は狩俣（雁股）の鎌で、右先端がやや欠けているもののほぼ完形を保っている。銹化のため刃部は不明瞭である。長さ14.2cm。もう1点の鉄鎌は、断面正方形の錐状の身をもち、身と茎がほぼ同じ長さである。長さ10.5cm。11は袋状鉄斧である。袋部は方形に折り返されている。長さ8.7cm、刃部幅4.4cmである。他1点は袋部を円形に折り返しており、11より一回り大きい。長さ10.2cm、刃部幅4.3cmである。鉄鎌、鉄斧は13・14段目で出土した。

錢貨 隆平永寶2枚と富壽神寶の破片1点が出土した。12・13は隆平永寶である。外径は12が25.01mm、13が25.33mm。5段目より上部および16段目で出土した。

その他の遺物 SE12からは上記のほか、桃の種や胡桃などの植物遺体、ウマ・シカなどの歯骨、墨書きされた自然縞が出土している。歯骨は、ウマが3個体、シカが2個体分確認できる。このうちウマの1個体は1頭分がそのまま廃棄された状態で9段目から出土した。14は珪岩の並角縞に墨書きされたもので、直角に交わる節理面に「嘉祥元年」（848年）と書かれ、上部の平坦面にも駆除不能であるが文字がみとめられる。13段目で出土した。

なお、SE12の8段目で出土した曲物と、井戸枠材について年輪年代測定を行った。曲物が775年。井戸枠は改修前のスギ材と転用されたヒノキ材の2種について行い、前者が649年、後者が786年の値が出ている。

（松浦五輪美）



SE12出土の木簡・木製品・金属器・錢貨・墨書きのある石 2・9・14は1/3、そのほかは1/2

5. 平城京右京七条一坊十五坪の調査 第427次

事業名	病院増築
届出者名	医療法人康仁会
調査次数	平成京 第427次
調査地	六条町102-1、ほか
調査期間	平成11年5月10日～6月23日
調査面積	394m ²
調査担当者	三好美穂

調査の概要 近鉄西ノ京駅から南東に約0.7kmの場所で実施した。平城京の中では、右京七条一坊十五坪の南半部に相当する。これまで十五坪内では、2次（第97次・昭和60年度、第349次・平成8年度）にわたる調査を実施しており、西一坊大路東側溝、十坪・十五坪境小路西側溝、橋、奈良時代の掘立柱建物10棟、掘立柱塀3条、井戸3基、土坑、平安時代の井戸3基、室町時代の粘土探掘坑等の遺構を検出している。なかでも、平安時代の井戸枠には「湯屋□延久參年四月十日」と墨書きされた曲物が使用されており、出土遺物の実年代を知る上で重要な手がかりとなった。また、室町時代の粘土探掘坑内から瓦質土器擂鉢が意識的に据え置かれたかのような状態で6箇所から出土するなど興味深い資料も得ている。

発掘区内の基本的な層序は、約0.5mの造成土の下に、暗褐色粘土の耕土（0.2m）、暗褐色砂質土（0.1m）、土師器、瓦器、瓦を包含する明灰色砂質土（0.1m）が続き、地表下約0.9mで黄褐色粘土の地山となる。しかし、発掘区北東隅及び南西隅では、明灰色砂質土の下に灰色砂や茶灰色中粒砂が堆積していた。遺構は、地山上面と砂層上面（標高約57.2m）で検出した。

検出した主な遺構には、奈良時代の建物・塀・井戸・土坑、平安時代の池状遺構と溝、室町時代の粘土探掘坑とそれ以降の小溝がある。

奈良時代の遺構 掘立柱建物7棟（SB01～07）、掘立柱列3条（SA08～10）、井戸1基（SE11）、土坑1（SK12）がある。建物・柱列の柱穴は、室町時代の粘土探掘坑と重複したものが多く、SB05・06の柱穴は大半が壊されており、かろうじて彫形の痕跡が残るにすぎない。SB01・05の柱掘形の埋土からは、8世紀末～9世紀初頭頃の土師器、黒色土器A類の小片が出土しており、平



発掘区位置図 1/6,000



発掘区全景（北から）



発掘区全景（南から）

安時代の建物になる可能性がある。掘立柱列は3条検出したが、削平された柱穴もあることから本来は建物となるのかもしれない。建物と堀の主軸は、いずれも国土方眼方位と一致しており、配置関係から少なくとも2時期以上の変遷があることがわかる。

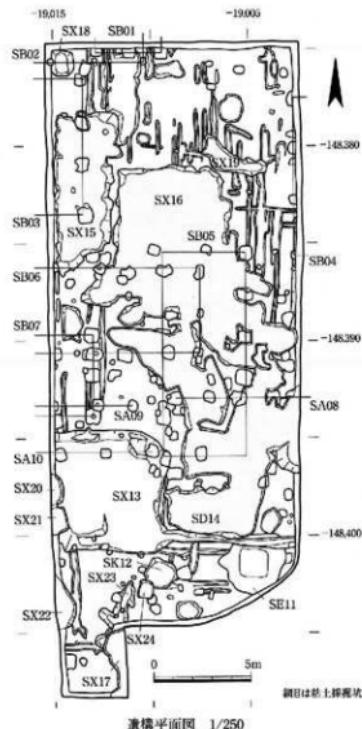
SE11は、東西約3.2m、南北約3.0mの平面隅丸方形の掘形を呈し、検出面からの深さは約5.5mである。掘形内部には枠の抜取坑が見られ、枠の上部は残存していなかった。検出面から約1.1m掘り下がったところで縦板組横桟留の枠の下部が残っていた。枠は、内法一辺0.8m、底部から0.42m分が残存する。横桟は、材の両端を凹形と凸形に作りだしたものと組合せの仕口としている。寸法は9cm角で、全長93~95cmである。4段分を確認した。掘形、枠内、抜取坑から奈良時代後半~末頃の土器、瓦、木製品が出土した。

SK12は、東西2.0m、南北1.5mの平面稍円形の土坑で、検出面からの深さは0.4mである。土坑内には、奈良時代の遺物を若干包含する灰白色粘土、黒灰色粘土が堆積していた。

平安時代の遺構 池状遺構SX13と溝SD14がある。SX13の掘形は、東西6.0m以上、南北約8mの平面隅丸方形になると考えられる。西端は発掘区外へ続く。浅い皿状に掘り込まれ、検出面からの深さは0.3mである。遺構内には、9世紀前半頃の土器と石鈎の未製品を包含する暗褐色粘土と淡灰色砂が堆積していた。SX13の南東隅には、排水施設SD14が接続する。SD14は、長さ6.5m以上、幅0.6mの溝で、掘形の断面はU字状である。東端は発掘区外へ続く。溝内には、奈良時代~平安時代初頭の土器を包含する暗灰色粘土が堆積していた。SX13はSA10と、SD14はSE11と重複しており、重複関係からそれぞれSX13、SD14が新しいことがわかる。

室町時代の遺構 粘土探掘坑(SX15~24)がある。発掘区全体の約40%を占めている。検出面からの深さは0.4~0.6m、埋土は黄褐色粘土のブロックを含んだ灰色粘土である。埋土から、瓦質土器擂鉢や捏鉢が意図的に据え置かれたかのような状態で出土している。前回の調査(第349次)で検出した大規模な粘土探掘坑と同時期のものである。このような粘土探掘坑は、右京八条二坊十二坪の調査¹¹⁾でも検出されており、ここでも瓦質火舎や擂鉢等が出土している。調査所見によると、東大寺文書などにみる土器(かわらけ)の原料採取の可能性もありうると指摘されている。十五坪内の3次にわたる調査で検出した粘土探掘坑群も砂地の部分には及んでいないことから、同様な目的で粘土を探取したのかもしれない。

(三好美穂)



遺構平面図 1/250

出土遺物 瓦塊、土器、土製品、石製品、木製品、金属製品が遺物整理箱で17箱分出土した。これらのうち、主なものを以下に詳述する。

瓦塊 遺物整理箱6箱分出土した。丸瓦、平瓦のほかに軒丸瓦7点、軒平瓦3点、埠3点、文字瓦1点がある。軒丸瓦の内訳は、小山廐寺式（いわゆる紀寺式）（1）1点、6318A1点、型式不明5点である。小山廐寺式はSX10から、6318A1は明灰色砂質土から出土した。小山廐寺式は外区のみ残る小片である。白鳳時代の瓦が出土したことは、特筆すべきことである。軒平瓦の内訳は型式不明が3点である。丸瓦、平瓦の造構ごとの出土点数と重量の内訳は、表の通りである。なお、平瓦のなかには凹面に模骨痕を残し、桶巻作りと考えられるものが、SE11から2点（670g）、SX16から1点（160g）出土した。埠は、3点すべて小片で、大きさがわかるものは無い。文字瓦はSX03から出土した。丸瓦の下端面に「弓」の刻印がある（2）。刻印「弓」はa種のみが知られており³⁾、本例はそれである。

(原田憲二郎)

丸瓦・平瓦の出土量（重量の単位はkg）

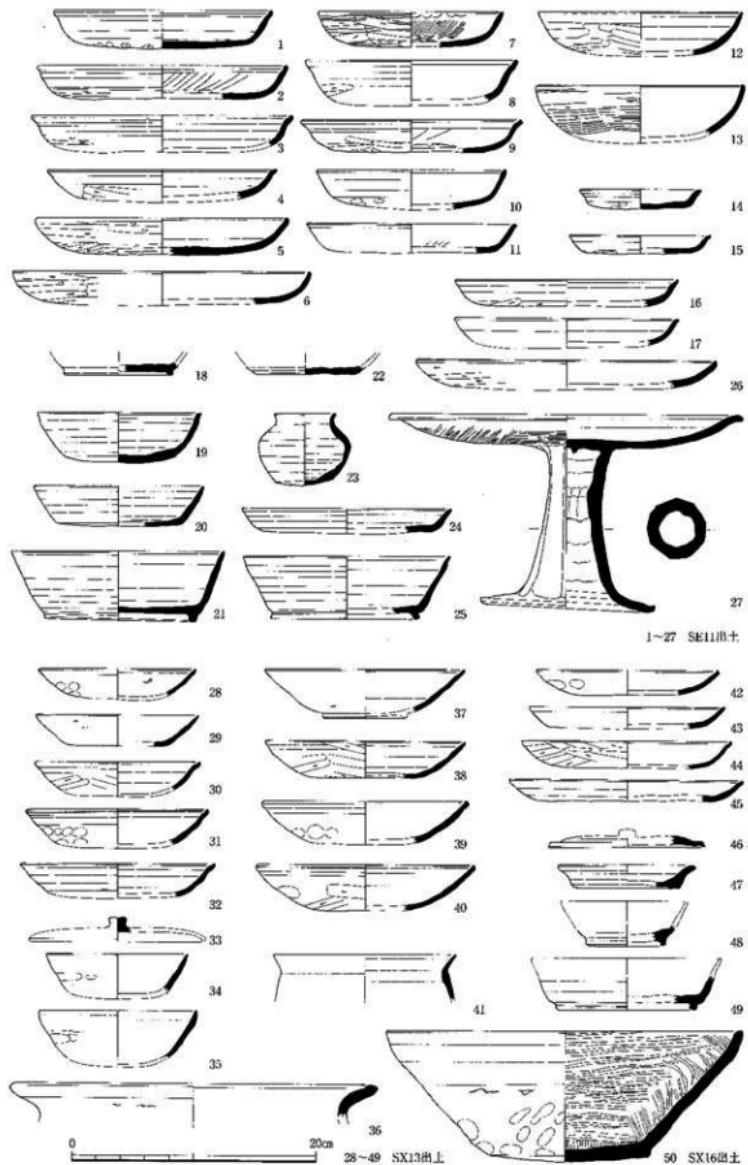
	丸瓦		平瓦		不明		点数計	重量計
	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
SX03柱穴	1	0.05	3	0.14	3	0.05	7	0.24
SX06埠	0	0	1	0.03	0	0	1	0.03
SBD1柱穴	2	0.18	0	0	1	0.01	3	0.19
SE11	27	4.44	91	8.68	32	0.19	150	13.21
SX13	39	3.29	142	16.31	56	2.09	227	15.69
SD14	1	0.05	8	0.69	3	0.06	12	0.80
SX15	5	0.23	97	2.94	18	0.37	80	3.54
SX16	13	2.26	105	4.83	132	1.74	250	8.83
SX17	0	0	3	0.01	3	0.02	6	0.03
SX18	1	0.08	0	0	2	0.04	3	0.12
SX20	0	0	5	0.30	5	0.06	12	0.36
SX21	0	0	3	0.14	3	0.06	6	0.20
SK22	0	0	0	0	3	0.05	3	0.05
SX24	0	0	2	0.06	1	0.01	3	0.07
小柱穴	1	0.04	3	0.15	5	0.11	10	0.30
小溝	2	0.06	4	0.16	20	0.26	26	0.80
明灰色砂質土	18	1.16	22	1.21	52	0.68	92	3.05
合計	110	11.84	450	29.69	341	9.82	901	47.81

土器・土製品 奈良時代中頃から室町時代までの土器・土製品が遺物整理箱で10箱分出土した。ここでは、井戸SE11及び池状造構SX13の出土土器を以下に詳述する。

SE11の掘形からは、土師器杯A（1～3・22）・杯B（18）・杯C（4）・皿A（5・6）・高杯・甕・製塙土器・須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺・甕・土馬が出土した。杯・皿は、底部外面だけを削るものと外面全体を削るものがある。杯A（22）と杯B（18）は、ロクロ成形による土器器で、底部外面は無調整のままである。18は内面に炭素を吸着させているが、ミガキは見られない。播磨地域あたりからの搬入品であろうか。掘形出土の土器は、形態的な特徴や法量などから、8世紀後半のものと考えられる。

井戸枠内からは、土師器杯A（7～9・12・13）・杯C（10・11・17）・皿A（16・26）・皿C（14・15）・高杯（27）・壺B・甕・製塙土器・須恵器杯A（19・20）・杯B（21・25）・皿C（24）・壺（23）・鉢・甕・土製の有孔円板が出土した。土師器の杯・皿は、口縁部がヨコナデ調整だけのものと口縁部だけを削るもの、外面全体を削るものがある。高杯（27）の脚部は、粘土紐巻き上げないし輪積みによってつくられている（円筒技法）。須恵器の杯・皿は、いずれも底部外面は無調整である。壺（23）は、底部外面は無調整、その他はロクロナデ調整である。枠内出土土器も8世紀後半のものと考えられる。

2) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』1977。



出土器 1/4

SX13から、土師器杯A (28~32・38~40)・杯B (37)・皿A (42~45)・杯蓋 (33)・椀 (34・35)・甕 (36)、黒色土器A類甕 (41)、須恵器杯B (48・49)・杯蓋 (46)・皿 (47)・壺・甕が出土した。土師器杯・皿は、口縁部をヨコナデ調整するものと外面を削るものとがあり、口縁部の立ち上がりが直線的に外に聞くものが多い。椀 (35) は、口縁端部のみをヨコナデ調整している。また、口縁部上半部分が内彎する特徴がある。このような形態の椀は大和地域では出土例が少なく、河内系の土器の可能性が考えられる。甕 (36) は、口径が30cmの大型品である。黒色土器A類甕 (41) は、器表面が摩滅しており、調整は不明である。須恵器杯B (48・49) は、いずれも低い角台で、底部外面は無調整である。杯蓋 (46) は、口縁端部が外側に聞くのが特徴的である。皿 (47) の底部外面は無調整のままで、器壁が全体的に分厚い。これらの土器は、形態的な特徴からみて9世紀前半頃のものと考えられる。

この他に、室町時代の粘土採掘坑SX16からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土した。瓦質土器程鉢 (50) は、ほぼ完存する。内面には幅の太いミガキが粗く施されている。体部外面下半～底部外面には指頭压痕が残る。
(三好美穂)

石製品 石鉄製作に関連すると考えられる未製品、残核、破片、原石がある。主なものを以下に示した。1~4は、丸薬の製作過程が追える資料である。板状素材の周縁を粗削り (1)、形を整え、剥片の厚みを整えて周縁をさらに細かく調整し (2・3)、磨きをかけて面を平滑にしている (4)。5~7は加工の容易な凝灰岩を磨いた後、切込みを入れ、折り取っている。いずれも細長く、

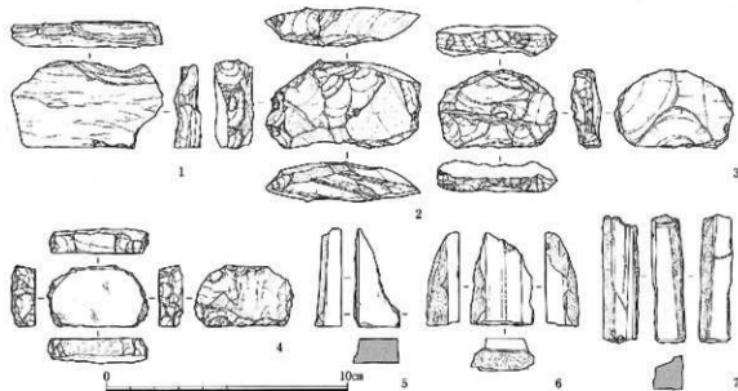
出土石製品の属性

番号	種類	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	石材	色調	出土遺構等
1	丸薬未製品	3.00	6.25	1.25	硅岩	淡褐色	SX13 暗灰褐色土
2	丸薬未製品	3.00	6.40	1.65	安山岩	暗褐色	SX13 暗灰色土
3	丸薬未製品	3.20	4.90	1.25	安山岩	暗褐色	不明
4	丸薬未製品	2.50	4.20	1.00	珪岩	淡褐色	磨削面直上
5	道方残核	4.05	1.90	1.05	凝灰岩	乳白色	SX13 暗褐色土
6	道方残核	3.85	2.60	1.05	凝灰岩	乳白色	SX16 淡褐色砂
7	道方残核	5.25	1.45	1.45	凝灰岩	乳白色	SX13 暗褐色土

製品とは考えがたいので、おそらく製品に必要な部分をとりのぞいた残核と考えられる。直線的な切り込みが残っており、巡方製作に伴うものである可能性が高い。

なお、隣接地の第349次調査でも、粘土採掘坑、遺物包含層から同様の石鉄未製品が5点出土している。

(久保邦江)



出土石製品 1/2